

たかばやしはろこく (高林芳谷) 〔人〕名は徹、東京の人、名高き女醫者なり。明治維新後、神田區に住し、技を以て生活す。籍紳の令嬢等入門すのもの頗る多し。又、獨逸英國人等に教授せり。二十七年五月歿す。年五十五。

たかばやしやま (鷹林山)〔地〕讚岐國香川郡の南端に位す。高さ三九五〇尺。

たかはらやま (高原山)〔地〕下野國鹽谷郡の中央に位す。高さ六七七〇尺。

たかひさあいがい (高久露屋)〔人〕字は子遠、下総國の人、江戸に住す。有名なる畫家なり、天保十四月四日歿す。年四十八。

たかひとしんわう (幟仁親王)〔人〕に及び、利なき時は、耳を垂れて怖れ去り、直に人家に入る。

たかまさあう (尊雅王)〔人〕尊義王の御子なり。吉野の兵に擁せられ、神璽を奉じて、大和國に潛居す。長祿二年六月、又、吉野に遷り、幕兵に來襲せられて、十津川に走り、劍を蒙りて、同年八月薨す。南朝の皇胤、此に於て、絶ゆ。

たかまつ (高松)〔地〕讚岐國にある市街にして、松平氏の舊藩地なり。

たかまつかう (高松港)〔地〕讚岐國香川郡の北海岸にあり。明治廿八年築港以來、縣下第一の良港となり、百貨の輻湊を來たし、交通最も頻繁となれり。

たかまつくわうざん (高松鐵山)〔地〕○筑前國遠賀郡にあり。石炭を

紹仁親王の御子にして、光格天皇の猶子なり。明治十四年、神道總裁に任ぜらる。世々、家風の書を善くす。親王に至りては、特に、其妙を極む。同十九年一月、大勳位に叙せられたる日薨す。

たかぼとぎさ (高鋒崎)〔地〕肥前國平戸嶋の北部にある薄香灣、古江灣の南にあり。二灣の西北端なる長崎と相臨めり。

たかぼとぬま (鷹梁沼)〔地〕陸奥國上北郡にあり。周回六里半余。

たかまがはら (高天原)〔地〕常陸國鹿嶋郡に屬し、茫々たる砂原際涯なく、矮松其間に点茂し、風光頗る佳なり。相傳ふ。鹿嶋明神常に群鹿を率ゐて、惡鬼と此野に戦ふ。神軍利ある時は、群鹿相追うて一帯海邊

産出す、産出高凡そ二万五千噸。○羽後國雄勝郡にあり。硫黃を産出す。製出高凡そ十五万斤。

たかまつじやうし (高松城址)〔地〕讚岐國高松市にあり。一に玉藻城と云ふ。天正十六年、生駒親正の築く處にして、寛永十一年、松平頼重代りて城主となり、子孫相繼ぎて維新に至る。今尙城樓外壁を存し、海上より遠望するを得べし。

たかまつどのし (高松殿址)〔地〕京都市上京區姊小略西、西洞院にして、高松明神瀾のある處は其舊址なり。元、醍醐天皇皇子高明親王の居なりと云ふ。拾芥抄に曰く、鳥羽天皇、長門守守行をして遣進せしめらる。後白河天皇の潛邸にして、此に踐祚あり、在位三年脱履の後、又、

此に御す。平治元年、兵火す。

たかまつのおゆき (高松信行) (人)

通稱は平十郎、信濃國の人、嘉永年中、江戸の塚田孔平の弟子となり、劍術を學びて技大に揚る。師に代りて諸國を巡廻し、門人を督せり。文久三年、京都に於て、足利尊氏以下の木偶梟首の黨に入り、事露はれて捕へられんさし、奮戦して死す。

たかまやま (高天山) (地) 河内國金剛山の別稱なり。

たかみしま (高見嶋) (地) 讃岐國北方にあり。周囲一里半。惣飽七嶋の一たり。

たかみつしふ (高光集) (書) 藤原高光の和歌の集なり。

たかみなかみのかみ (高水上神) (人) 大山祇神の御子なり。

年、國博士に擧げられ、小徳冠に位す。白雉五年、遺唐押使となりて、高宗に謁し、應答雄辯、大に、國華を揚ぐ。居る事数月、彼地にて歿す

たかむじんのじや (高牟神社) (地) 尾張國愛知郡にあり、郷社にして、高皇產靈神、神皇產靈神、及び、應神天皇を祭る。成務天皇の御宇の創建なり。

たかもとじゆん (高木順) (人) 本姓は原田氏、字は子友、紫溪と號す。名高き儒者なり。數年間、國學の教授たり。又、和歌に名あり。文化十年歿す。年七十八。

たかやま (高山) (地) 飛騨國にある市街にして、前田氏の密藩地なり。

たかやまのじんじや (高山神社) (地) 上野國新田町にあり。縣社にして、

たかむすびのかみ (高皇產靈神) (人) 造化三神の一なり。

たかみや (高宮) (地) 近江國犬上郡の西部に位し、芥町と、高宮川との中間にある名邑なり。

たかみやま (高見山) (地) ①一名高角山、又、高倉山と云ふ。大和國吉野郡の東北隅にあり。高さ四二九〇尺。②一名去來見山、又、高角山と云ふ。伊勢國飯南郡の南境に位す。高さ四二九八尺。

たかみやま (太神山) (地) 一に田上山に作る。一名不動山と云ふ。近江國栗太郡の南部に位す。高さ一六〇〇尺。

たかむすぶるまさ (高向玄理) (人) 推古天皇の十三年、隋に留學し、留る事卅三年にして、歸朝す。大化二

高山正之を祭る。明治十二年十一月の創建なり。

たかやまのゆき (高山正之) (人) 字は仲繩、通稱は彦九郎、上野國の人、豪邁にして、奇節あり。夙に、皇室の式微を嘆き、尊王攘夷の説を主唱し、諸國を遍歴して、人心を鼓舞す。然れども、遂に、志を得る能はず。寛政五年六月、筑後國久留米に於て自殺す。年四十四。

たかよしあち (尊義王) (人) 初め、僧となりて、金藏王と號す。嘉吉三年七月、吉野の兵、王を奉りて、潜かに、天皇と稱し、同年九月、内裏に侵入して、神器を奪ひ、叡山に據る。畠山氏、大兵を率ゐ、來りて討つ。時に、山僧、約を變じて、畠山に屬す。王、利あらず自殺し給ふ。

たからがはをんせん (寶川温泉)

〔地〕上野國利根郡にあり。虫の湯、鳩の湯、龜瀧の湯の三所あり。泉質各硫黄泉なり。

たからぎやま (寶木山)〔地〕日向國西臼杵郡の中央南部に位す。高さ六二四七尺。

たからじま (寶嶋)〔地〕薩摩國南方にあり。周回二里半余。薩摩七嶋の一たり。

たからづかゝわちせん (寶塚鑛泉)

〔地〕一名武庫山冷泉と云ふ。攝津國武庫郡にあり。泉質炭酸塩泉なり。

たからゝかみしま (高井神嶋)〔地〕伊豫國弓削嶋の南方にあり。周回一里半余。

榎本其角におなす。

たかをうちぢのり (高尾氏規)〔人〕字は子塵。十右衛門と稱す。高松の藩士なり。幼にして穎異、學を好む。既に長じて、來り教を乞ふもの多し。史局總裁、中寄合、公子の師等となり、令名あり。文政二年歿す。

たかをか (高岡)〔地〕下總國にある市街にして、井上氏の舊藩地なり。

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕○越中國高岡市にあり。縣社なり。前田利長を祭る。慶長十五年の創建なり。○土佐國高岡郡にあり。縣社にして、靈元天皇外五神を祭る。

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

たかゝかじんじや (高岡神社)〔地〕

野郡にあり。山城三尾(高尾、榎尾、横尾の三山を云ふ)の一にして、山中に神護寺あり。三尾、各、近畿紅葉の名所にして、其名、古來、著はる。就中、高尾は、全山楓にして、殆んま、他木を交へず、晩秋の候には、甚だ、壯觀なり。

たかーをーやま (高尾山)【地】紀伊國西牟婁郡の西北部に位す。高さ二六四〇尺。

たきーあんーきゆうーし (多藝行宮址) 【地】美濃國養老郡養老村字行在所は即ち宮址なり。靈龜三年、元正天皇美濃國に行幸し給ひ、養老二年には醴泉へ行幸あり。天平十二年、聖武天皇も、また、此地に鸞輿を駐め給ひしと云ふ。

たきーがーさこーやまーたき (瀧迫山瀑)

【地】石見國美濃郡にあり。高さ二五〇尺。幅二五尺。
たきーがはーかづーます (瀧川一益)【人】彦右衛門と稱し。織田信長に仕ふ。智勇にして、騎射を善くす。信長の歿後、柴田勝家に黨し、秀吉と戦ひ、軍敗れて、降る。後、越前國に漂流せりと云ふ。

たきーくわくーないーのーつま (瀧鶴臺)【人】名は長愷、彌八と稱す。山口藩の儒醫にして、博學才能あり。名聲、當時に鳴れり。尤も、古方の醫師を崇び、其方劑奇功ありしと云ふ。又、書を善くす。安永二年正月歿す。年六十五。

たきーくわくーないーのーつま (瀧鶴臺妻)【人】容姿最も醜、人娶らんとするものなし、父母之を憂ふ。而して

後國中頸城郡にあり。高さ一〇八尺。幅一二尺。

たきーざはーれいーせん (瀧澤冷泉)【地】羽後國仙北郡にあり。寛政九年の發見にして、泉質硫黄泉なり。

たきーしーみみーのーみこと (手研耳命)【人】神武天皇の皇子にして、綏靖天皇の庶兄たり。神武天皇の崩後、非望を企て、事成らずして誅せらる。

たきーたけーをんーせん (瀧谷温泉)【地】越後國北蒲原郡にあり。蟹湯、本湯の總稱にして、泉質各炭酸泉なり。文久年間の發見たり。

たきーつーひめーのーかみ (多岐津姫神)【人】素盞鳴命の御子なり。

たきーにーてんーぢち (吒根尼天堂)【地】三河國豊川町にあり。俗に豊川稻荷と稱す。堂宇壯嚴にして、華麗

女常に曰く、妾は鶴臺先生の如き人に非ざれば嫁せず。鶴臺之を奇として娶る。果して内助の効あり。常に兩袖に白赤の絲襪を持ち、善行あれば白絲を結び、以て自ら心を戒む。時人其篤志を賞せり。

たきーけいーざん (多紀桂山)【人】名は元簡、字は廉夫、安長と稱す。徳川幕府の醫官にして、學問該博、技術精巧なり。侍醫に擢てられて、法眼に進み、醫學教授となれり。後、故ありて、致仕し、専ら、著述に従事せり。文化七年十二月歿す。年五十六。

たきーざき (瀧崎)【地】能登國羽咋郡の西海岸にして、巉巖磊々海岸に峭立せり。北に長手崎あり。

たきーざはーのーたき (瀧澤瀑)【地】越

東方に發し、西南流して、二流となり、一は北西流して羅水溪と云ひ、鹿港の南に至りて海に入る。一は西流して西螺溪と稱し、西螺溪の北に至りて海に入る。

たぐちしびよし (田口成能) (人)

阿波國の豪族なり。壽永二年、平氏の西海に敗走するを迎へて、之に黨し、四國、及び、山陽道を徇へて、兒嶋を復す。同三年、源氏の大軍至るに及びて、亦、款を義經に納れ、平氏を滅す。

たぐちますひと (田口益人) (人)

萬葉作者の一人にして、和歌に巧なるを以て知らる。和銅二年、右兵衛に累進し、尋て歿す。

たぐちりうしよ (田口柳所) (人)

名は興治、字は子期。關鶴、通齋なり。

隱岐の海あらし浪風心して吹けり。風濤忽ち収り、荻田山の行在所に還らせ給ひしと云ふ。

たぐちめちぢ (宅麻爲氏) (人)

姓は藤原氏、有名なる畫家にして、特に、佛像に妙を得たり。畫家宅間氏の祖なり。永延頃の人。

たぐちめひさ (宅間爲久) (人)

姓は藤原氏、畫を以て家を繼ぎ、下総守に任ぜらる。特に、佛像の高手にして、當時、海内無比と稱せらる。壽永頃の人なり。

たけ (竹) (人)

世に白柏子竹女と云ふ。江戸淺草の醫鈴木某の女、新吉原の遊女となり、小式部と云ふ。最も文を善くす。尾張侯徳川宗春之を寵し遂に携へて尾張に歸る。享保中、名古屋より、江戸に歸りし時、庚子道

この別號あり。有名なる江戸の詩人なり。性、酒を好む。醉へば即ち筆を採りて詩を賦し、畫を畫く。杉浦梅潭等と吟社を起し、不如學と云ふ。明治二十五年六月歿す。年五十四。

たぐはちぢひめのみこと (栲幡千千姫命) (人)

高皇產靈神の御子にして、瓊瓊杵尊の御母なり。

たぐひやま (焼火山) (地)

隱岐國西嶋の南岸にあり。諸峰海角に臨みて聳立す。巔に巨岩あり。高さ凡そ二十丈、半腹に穴あり。下瞰すれば其底を測るべからず。窟前に一堂あり、觀音の像を安置す。承久年中、後鳥羽上皇此山に遊獵し給ふ。偶、暴風起り、波濤激して時に官船を覆さん

す。上皇御詠あり「朕こそは新嶋守の記あり、名文を以て世に著はる。天明二年五月歿す。年八十。

たぐいさをじんしや (建勳神社)

〔地〕〇一に、ケンケンシンジャと

呼ぶ。山城國愛宕郡にあり。別格官幣社にして、織田信長を祭る。明治八年の創建なり。〇羽前國天童町にあり。縣社にして、織田信長を祭る。明治三年。舊天童城主織田信敏創建す。

たけいちいはんべい (武市半平太) (人)

吹山、瑞山等の號あり。土佐の藩士にして、有名なる勤王家なり。人となり、沈黙にして、文、武を兼ね、又、書を能くす。夙に、尊攘説を唱へ、水戸、薩、長の有志と往來して、大に、成す處あらんことを。偶々、藩主の忌む處となり、慶

應元年五月、死を賜はる。年三十七
たけがきちよきん (竹恒直温)

〔人〕姓は藤原氏、字は叔恭、徳川幕府の司税として、良吏の譽高し。文化十一年十一月歿す。年七十七。

たけがはちくさい (竹川竹齋)〔人〕

初め彦三郎と稱す。伊勢國の人、家世々兩替を業とす。竹齋幼にして江戸に出で、家業を練習するの傍讀書を好む。後、大坂に遊學して經濟の學を修む。嘉永六年、米艦浦賀に至るや、病を力めて海防論を草し、又、金銀を献納す。慶應二年、幕府召して時局を諮ふ。即ち民力の休養、殖産等の策を献す。維新後、學校の設置せらるるを喜び、圖書を献するこゝろ六千余卷に及ぶと云ふ。明治十五年十一月歿す。年七十四。

たけこまじんじや (竹駒神社)〔地〕

陸前國岩沼町にあり。一に武駒、又、武隈に作る。縣社にして、稚皇産靈神、倉稻魂命、保食神を祭る。承和九年の創建なり。

たけさきこらうゑことば (竹崎五郎繪詞)〔書〕弘安の役に、肥後の

士竹崎五郎が勳功を鎌倉へ申立てたる始末を、繪を添へて、記したるものなり。

たけさきじま (竹崎嶋)〔地〕肥前國

藤津郡の東南方にあり。周回一里余

たけざはこんゑもん (竹澤權右衛門)〔人〕淨瑠璃の名家、井上播磨

の弟子なり。淨瑠璃節、及び、三絃に巧にして、遂に、一派を始む。義太夫節三絃の開祖なり。貞享頃の人。

たけしきから (竹敷港)〔地〕對馬國

下縣郡北海岸の東部にあり。淺海灣に臨む。交通運輸の機關具備し、海運至便、船舶の出入頻繁なり。

たけしきのうら (竹敷浦)〔地〕對

馬國下縣郡なる竹敷港の沖を云ふ。

たけしま (竹嶋)〔地〕大隅國硫黃嶋

の東方にあり。周回三里。

たけた (竹田)〔地〕豐後國直入郡の

東部に位する名邑にして、中川氏(舊岡藩と云ふ)の舊藩地なり。近年、養蠶盛にして、煙草の産出多し。

たけたあやさぶらう (竹田斐三郎)

〔人〕名は成章、竹塘と號す。舊大洲藩の士なり。夙に蘭學を修め、後、英佛の學を研究し、専ら築城、造兵等に力を竭す。安政元年、幕府に擢でられ、五陵廓、及び、辨天崎の砲

たけたいづものじよう (竹田出雲掾)〔人〕初代。名は清一、通稱

は次郎兵衛。初め、江戸に住して、

砂時計を造る。又、操人形を製し、

傀儡師となりて、人形を朝廷に獻す。

万治元年、出雲掾に任ぜらる。寛文

二年、初めて、大坂に操芝居を興行

す。享保十二年九月歿す。年八十一。

たけた二代。初代出雲掾の子にして、名

は清定、千前軒と號す。竹本の座主

にして、有名なる淨瑠璃作者たり。

寶曆六年十月歿す。年六十六。

たけたかららんさい (武田耕雲齋)

【人】名は正一、伊賀守を稱し、如雲と號す。水戸の藩士なり。人となり、驍勇にして、智略あり。兵法に精通し、又、經濟の道に精し。景山侯に仕へて、老臣たり。夙に、尊攘説を唱へ、有志を糾合す。藩内、正、奸二黨に分るるや、自ら、正黨の首領となり、兵を擧げて、奸黨を討つ。萬治元年八月、幕府の兵に敗られて、越前國敦賀に奔り、遂に、降りて刑せらる。年六十三。

たけいさかつより (武田勝頼) 【人】武田信玄の第三子にして、庶子をして家を繼ぐ。天正元年、兵を擧げて諸國を征服し、勝に乗じて、織田信長、徳川家康の兵と戦ひて、大に、敗らる。同十年三月、天目山に走り、自殺す。年三十七。

たけいさとい (武田悟亭) 【人】名は定夫、字は子毅、助太夫と稱す、名高き福岡藩の儒者なり。天保十一年六月歿す。年五十四。

たけいしんげん (武田信玄) 【人】「たけいはるのぶに」おなり。

たけいさのたき (嶽谷瀑) 【地】飛騨國益田郡にあり。高さ凡そ一二〇〇尺、幅八尺。下流益田川に注ぐ。

たけいさのふかつ (武田信勝) 【人】小字は竹王丸、後、太郎と改む。勝頼の長子なり。天正十年、徳川、織田、北條連合して勝頼を攻むるや、信勝と共に天目山に入る。勝頼諭して遁れ、再擧を謀らしむ。信勝従はず、奮戦して父と共に自殺す。年十六。

たけいはいりより (武田梅龍) 【人】

名は欽孫、字は聖謨、美濃國の人に於て、有名なる京都の儒者なり。妙法院親王に仕へて侍讀となり、傍ら學生を教授す。又、兵法に通ず。明和三年十月歿す。年五十一。

たけいはるのぶ (武田晴信) 【人】幼名勝千代、信玄と號す。勇武にして、機略あり。稀世の兵法家なり。又、詩歌を善くし、且、佛を信ず。村上義晴、上杉謙信と兵を構へて、連年虚日なし。永祿十一年五月、徳川家康と兵を構へ、天正元年四月、三河國野田城を圍みし時、流丸に中り、病を得て歿す。年五十三。上杉謙信、信玄の死を聞くと、好敵手を失ひたりと嘆せしと云ふ。

たけいよしのぶ (武田義信) 【人】太郎と稱す。晴信の長子なり。永祿

四年、初めて川中嶋の戦に従ふ。人となり剛勇にして、よく將士の心を得たり。立ちて世子となる。時に、嬖妾の子勝頼寵あり。義信を讒するものあり。遂に父と絶ち、之を殺さんと謀り、事顯はれて獄に下され、後、殺さる。年三十。

たけいあいざん (武智愛山) 【人】名は方獲、字は伯暉、畿右備門と稱す。松山藩の世臣にして、有名なる儒者なり。最も經史に通じ、詩文、和歌、書畫、篆刻をよくし、傍ら、擊劍に達す。侍讀、教授等に累進す。明治維新後、母を奉じて雑沓を避け、孝養を盡し、學生を教授せり。明治二十六年一月歿す。年七十八。

たけいやはのかみ (武乳速神) 【人】つばやむすびの神の御子なり。

たけとみしま (竹富嶋) [地] 琉球國石垣嶋の西南方にあり。周囲二里弱。
 たけとよ (武豊) [地] 尾張國知多郡の中央東端に位する名邑なり。
 たけとりものがり (竹取物語)

〔書〕無稽の事實を骨子とし、滑稽的に、諷刺的に書ける小説にして、小説中、最も、古きものなり。其著者は、源順なりと云ふ説あれど、信し難し。只、平安朝頃になれるものと云ふは、眞に近し。

たけとりものがたりかい (竹取物語解) [書] 竹取物語を註解したるものにして、田中大秀の著なり。

たけとりものがたりせう (竹取物語抄) [書] 和漢の書を引用して、竹取物語を註解したるもの。小山儀の著なり。

出征したる皇族、即ち四道將軍の一人なり。

たけのうちちびんびんいつ (竹内玄支一) [人] 竹窓、有無軒、句當など號す。播磨國の人なり。幼にして、明を失ふ。性、律語を好み、遂に、其妙を極む。俳諧奇人編を著せり。文化元年八月歿す。年八十三。

たけのうちちびんどり (竹内玄同) [人] 名は幹、西坡と號す。越前丸岡侯の醫員にして、幕府に徴されて待醫を兼ね、西洋醫學所長となり、法印に叙せらる。明治十三年一月歿す。年七十六。

たけのうちしきぶ (竹内式部) [人] 山崎敬義の門人にして、程朱の學を奉ず。所謂遺言を説く、此に於て、公卿紳士の其門に入るもの、甚

たけとりものがたりい (竹取物語傳言解) [書] 竹取物語を俗解したるもの。特に、諸書を参考して、本文を校合したるものにして、佐々木弘綱の著なり。

たけなかしけはる (竹中重治) [人] 字は半兵衛、美濃の人。世々齋藤龍興に属す。人となり沈勇温厚にして、智慮多し。世人以て楠正成に比す。後、去て織田信長に属し、豊臣秀吉の參謀となる。每戦從はざるなく、籌策よく効を奏す。秀吉重く之を用ゑたり。天正七年六月、病で營中に歿す。年三十六。

たけなかはんべゑ (竹中半兵衛) [人] たけなかしけはるにおなじ。
 たけぬかはおけのみこと (武淳川別命) [人] 崇神天皇の朝、四方に

だ多し。某公卿、其幕府の忌憚に觸れ、延ひて、朝廷を煩さん事を恐れ、潛かに、幕府に報す。寶曆七年式部、遂に、京都を逐はる。後、信濃國に至りて、歿せりと云ふ。近世、勳王の風潮は、此時に起因したりと云ふ。

たけのうちてつじらち (竹内哲次郎) [人] 下総國の人、幼にして孤きなり、兄と共に江戸に出でて芳野金陵に従學し、又、劍法を習ふ。夙に皇室の式微を悲み、志士と往來して謀議する處あり、後、失戸侯に従ひて水戸に赴き、侯自刃するの後、鹿嶋に至り、新莊の兵と戦ひて之に死す。

たけのうちとらかん (竹内東門) [人] 名は安明、字は文會、有名なる府内藩の儒醫たり。文化十二年四月

たけのうらちのすくね (武内宿禰)

たけのうらちのすくね (武内宿禰) 孝元天皇の後裔なり。仲哀天皇の熊襲を征して、筑紫に崩し給ふや、神功皇后を輔けて、三韓を征せしめ、又、幼主、應神天皇を襲戴して、功勞、甚だ多し。景行、成務、仲哀、應神、仁徳の五朝に歴仕し、仁徳天皇の五十五年歿す。

たけのうらちのひさもり (武内久盛) [人] 中務太夫と稱す。最も、逮捕の術に妙を得たり。竹内流逮捕術の祖なり。天文頃の人。

たけのうらちの (竹浦) [地] 加賀國江沼郡黒崎村の海濱を稱する古名なり。たけのこしじま (竹子嶋) [地] 長門國青海嶋の西北端にある小嶋を云ふ。地の西端に燈臺あり。

たけのした (竹下) [地] 駿河國駿東郡にあり。建武の役、脇屋義助、尊良親王を奉して、足利尊氏と戦ひ、敗走したる處なり。

たけのしんじや (多家神社) [地] 安藝國安藝郡にあり。縣社にして、神武天皇を祭り、高木神、五瀬命、仲哀天皇、神功皇后、應神天皇を合祀す。

たけのゆくわちせん (獄湯鐵泉) [地] 豊後國速見郡にあり。泉質硫黄泉なり。

たけのせんせん (獄温泉) [地] 陸奥國中津輕郡にあり。源泉五所あり。泉質各硫黄泉なり。

たけのしんじや (武林隆重) [人] 唯七と稱す。淺野長矩に仕へて、中小性たり。赤穂四十七士の一人。

て、外從五位下に叙せらる。

たけべいじんしや (建部神社) [地] 一名新宮と云ふ。近江國栗太郡にあり。官幣大社にして、日本武尊を祭る。天武天皇白鳳四年の創建なり。

たけみかづちのかみ (建御雷神) [人] 饒速日神の御子にして、經津主神と共に、中國を平定し給ひし神なり。

たけみなかたのみこと (建御名方) [人] 大國主神の御子なり。たけもととせうけん (竹本虎嘯軒) [人] 「このしやうるく」に同じ。

たけはやすさのののみこと

〔建速須佐男命〕〔人〕一名を月夜見尊と云ふ。伊弉諾尊の御子なり。

たけはら (竹原) [地] 安藝國賀茂郡の東南海濱に位する名邑なり。

たけひなどりのかみ (武夷島神) [人] 穗見命の御子なり。

たけふ (武生) [地] 越前國南條郡の東北隅に位する名邑なり。

たけふくはひと (武生國人) [人] 萬葉作者の一人にして、和歌に巧なるを以て名あり。寶字中、六位を歴

たけもとせきとい (竹本石亭) (人) 通稱は又八郎、對松堂と號す。名高き東京の畫家。倂ら和漢の學に通じ、詩、文章、狂歌、狂文、等に巧なり。明治十一年、宮内省の命を奉りて、七卿長門落の圖を模寫して賞せらる。同二十一年一月歿す。年六十七。

たけもとちくごのせうじより (竹本筑後少掾) (人) 名は博教、通稱は五郎兵衛、攝津國の人にして、淨瑠璃の名家たり。竹本流の祖なり。正徳四年歿す。年六十四。

たけもとはりまのせうじより (竹本播磨少掾) (人) 竹本筑後少掾の門人にして、竹本流をよくす。遺言に依り、二代目竹本義太夫となる。淨瑠璃中興の祖なり。延享元年七月歿す。年五十四。

たけき (武雄) (地) 肥前國杵鳴郡の西南部にある名邑にして、温泉を以て其名著はる。

たけをか (竹岡尼) (人) 初め播州室の遊女なり。容姿甚だ美、源顯基之を寵し、携へて京都に飯り、後、一年ならずして棄てられ、又、室に歸り、祝髪して尼となり、世を終る。たけがかは (武雄川) (地) 肥前國杵鳴郡にあり。源を矢筈山の東麓に發し、東流して筑紫海に注ぐ。流程二十二里。

たけをしむこりひこのじんじ (建男霜凝日子神社) (地) 豊後國直入郡にあり。縣社にして、建男霜凝日子神、豐玉姬命、彦々瀨命を祭る。白雉二年の創建なり。たこと (多古) (地) 下總國にある市街

にして、久松氏の舊藩地なり。たことから (打狗港) (地) 旗後、又、崎後と云ふ。臺灣嶋鳳山の西方にあり。海水陸地に跨入するここと二里余、一大鹹湖をなし、港口には北に打狗山、南に旗後山相對峙して、之を扼するあり。港内水深く、船舶常に輻湊す。實に、本嶋第一の良港なり。殊に台南鐵道の開通以來、一層の便利を得、市場頗る繁盛なり。

たことざん (打狗山) (地) 又打狗山と云ふ。臺灣嶋打狗港の港口を扼し、高さ一〇〇〇尺。山の東麓には温泉あり。硫黄質を含む。此山は全部石灰岩にて成れるが故に、之を採掘して、石灰を製せば、良質なるセメントを得べしと云ふ。たことないくわうざん (田子内嶺山)

【地】羽後國雄勝郡にあり。銀を産出す。製出高凡そ十六万五千匁。たことうら (田子浦) (地) 駿河國富士郡の沿岸にあり。東海道中著名なる勝區とす。北に富士山を負ひ、西に三保の松翠を望み、南は外洋にして、山海雙美の景を備ふ。古來國風多し。頓阿法師「たこの浦やふとのたかれの影見えて波もひさつにふれる白雪」

たことうら (田枯浦) (地) 一に多古に作る。越中國氷見郡窪村より、氷見町に至る間の總稱なり。たことひ (多胡碑) (地) 上野國吉井町にあり。碑は高さ四尺一寸、幅一尺六寸、乃至二尺。下野の國造碑陸前の多賀碑と共に、我邦の三古碑と稱せられ、又、上野三碑の一なり

碑文は字跡道勁、菅蘇之を蝕し、讀み易からず。

たごののみなと (田子湊)〔地〕伊豆國西浦にあり。佳港なれども、未だ、船舶の輻湊するに至らず。

たごはな (多古鼻)〔地〕出雲國八束郡多古浦部落にあり。

たごけさ (蛸瀨)〔地〕伊豆七嶋の一なる神津嶋の東南沿岸にして、サスカ崎さ、松山鼻との中間の海濱を云ふ。

たごやくしなう (蛸薬師堂)〔地〕

京都市京極にあり。一に永福寺と稱す。初め比叡山の北谷に在り、三條室町に移し、後、今の地に再轉す。

たごしゆんない (太宰春臺)〔人〕名は純、字は徳夫、彌左衛門と稱す。春臺は其號なり。信濃國の人にして、

年間迄は、府廳、官吏とも、皆、備はりしと云ふ。

たごいふじん (太宰府神社)〔地〕筑前國太宰府町にあり。官幣中社にして、菅原道真を祭る。延喜五年の創建なり。

たごいふじやうし (太宰府城址)〔地〕筑前國太宰府町にあり。この地往古より水城を築きて外寇の鎮せしむ。弘安二年、元寇大擧して此地に迫る。我軍備あり、賊克つ能はず。後、筑紫探題を置き、鎮西を治せしむ。元弘の役、少貳、大友二氏の陥る處となる。

たごさうらん (田崎草雲)〔人〕名は芸、梅溪と號す。下野國足利の人、東京に住す。有名なる畫家なり。最も山水花鳥をよくし、又、劔法に

有名なる鴻儒なり。物徠來の門人にして、博學、宏識、經史に通じ、又、經濟に精し。延享四年五月歿す。年六十八。

たごいふ (太宰府)〔地〕筑前國筑紫郡太宰府町にありき。この地は、北條氏執權の時、九州探題を置き、以て、九州の政務を掌りし處なり。而して、太宰府廳舊址は、觀世音寺の西、築山と稱する小丘の上にある。南に、大門の址、北には、都府樓の址ありて、其中間に大社を構へたるものさ覺しく、處々に礎石の殘留を見る。按ずるに、宣化天皇の御宇、大伴磐連をして、國政を執らしめ給ふ、則ち、太宰府廳建設の初めなるべく、其廢絶は、年代を詳にせざれども、之を、舊記に徴するに、嘉元

達し、多く劔客と交る。維新後、足利町に歸り、學生を教授す。皇居御造營の時、命を蒙りて御杉戸を畫けり。明治三十二年歿す。年八十餘。

たごはぬま (田澤沼)〔地〕又、八郎瀧と云ふ。羽後國仙北郡にあり。周回三里余。

たごんじ (太山寺)〔地〕播磨國明石郡にあり。天台宗にして、靈龜二年藤原鎌足の孫藤原宇合の創建、定惠和尚の開山なり。

たじからうら (槌柄浦)〔地〕伊勢國度會郡の南沿岸にして、熊野灘に屬す。

たじからかり (槌柄港)〔地〕伊勢國度會郡の南沿岸槌柄浦の正北にありて熊野灘に臨む。西隣なる養港と共に、伊勢内海沿岸諸港に比すれば、

盛ならずと雖も、和船の出入決して少しとせず。

たしきへん (多識篇)〔書〕人類、鳥獸、器物、衣服、草木、金石等の部分の名稱を示し、其解釋をなしたるものにして、林道春の著なり。

たしま (田嶋)〔地〕備後國南方あり。周回四里余。

たしまじんじや (田嶋神社)〔地〕肥前國東松浦郡にあり。國幣中社にして、田心姫、端津姫、市杵嶋姫を祭り、稚武王、山祇命を合祀す。

たしらかひめ (田白香媛)〔人〕仁賢天皇の皇女にして、繼體天皇の后なり。欽明天皇を生む。欽明天皇位に即くに及びて、尊びて皇太后と云ふ。

たしろじま (田代嶋)〔地〕陸前國大

原灣の西南方にあり。周回三里余。

たしろせいぢゑもん (田代清治右衛門)〔人〕相馬焼陶器の創製者なり。嘗て、陶法を習得せんを欲し、京都に出でて研究するに三年、悉く其秘法を曉り、歸りて相馬焼を製出す。名聲一時に高く、諸侯競ひて之を求む。維新前まで、藩の官業として傳はれり。

たしろやま (田代山)〔地〕羽後國北秋田郡の北部に位す。高さ二三八六尺。

たすけかろ (田助港)〔地〕肥前國平戸嶋の北端にあり。港内廣からざれども、船舶の輻湊に便にして、平戸へ寄航する遠船は、多く、此港に碇泊す。

たろがれのうら (黄昏浦)〔地〕肥

前國平戸町の東北海面の稱なり。

たががたけ (多太岳)〔地〕一に太田ヶ嶽に作る。若狹國遠敷郡の中央北部に位す。高さ二二六七尺。

たがくは (忠國)〔人〕○信濃大掾と稱す。有名なる京都の刀匠なり。寛永六年、因幡國鳥取に没す。○播磨大掾と稱し、晩年播磨入道休鐵と號す。有名なる肥前國小城の刀匠なり。寛文頃の人。

たがくまぐわうざん (忠隈鑛山)

〔地〕筑前國嘉穂郡にあり。石炭を産出す。産出高凡そ一万五千噸。

たがくわうざん (多田鑛山)〔地〕○攝津國川邊郡にあり。銀、銅を産出す。製出高凡そ銀四万五千匁、銅九千斤。○同國豐能郡にあり。銀、銅を産出す。製出高凡そ銀三千五百

匁、銅七千斤。

たがじんじや (多田神社)〔地〕攝津國川邊郡にあり。縣社にして、源義仲、源頼光、源頼義、源義家を祭る。即ち攝津源氏の廟なり。天祿元年、圓融天皇勅して之を建つ。

たがじんじや (多太神社)〔地〕加賀國小松町にあり。縣社にして、衝杵等乎而留比古命を祭る。

たがずのもり (糺森)〔地〕一に川合森と稱す。山城國愛宕郡にあり。太平記に、延元元年、此地の林中に陣し、足利の兵と戦ひたることを載す。又、新古今平貞文の歌に「いつはりを糺の杜のゆふたすきかけつつ響へ我を思はば」

たがためりのり (多田爲詮)〔人〕和歌山の人なり。もこ、毛利氏、出で

て、多田家を嗣ぐ。通稱は、忠次郎
さいひ、世々紀伊公に仕ふ。幼より、
よく、水を泳ぎ水神と稱せらる。能
嶋流游泳術の蘊奥を極め、水中を行
くこと、坦途を歩むが如し。また、
軍螺を能くし、別に、若干祿を賜は
る。明治五年兵學寮に出仕し、六年
教導團の師範を命ぜらる。三十三年
十月歿す、年八十四。

たたのーちみ (忠海)〔地〕安藝國豊田
郡の南端に位し、黒瀧山の麓にある
名邑なり。

たたのーまんぢゆう (多田満仲)〔人〕
「みなもまんどちゆう」にあり。

たたのーせん (多田野温泉)
〔地〕岩代國安積郡にあり、休石湯、
ペンカラノ湯、源太湯等の總稱にし
て、泉質各硫黄泉なり。

ぐ。時人其反覆を惡む。後、源義經
に欺附し、却て殺さる。

たたのーしとし (多田義俊)〔人〕字
は政仲、兵部と稱す。攝津國の人な
り。有職、故實を修め、傍ら、古典
に精通し、博識を以て、世に稱せら
る。八文字屋自笑のために、戯作の
代作をなせり云ふ。寛延三年九月
歿す。年五十三。

たたらはま (多々良濱)〔地〕筑前
國箱崎町附近の海濱を云ふ。弘安の
役、大に元軍を破りし所にして、後、
建仁三年三月、足利尊氏西奔の時、
菊池武敏と戦ひし所なり。

たたらぬま (多田良沼)〔地〕上野
國邑樂郡にあり。周回凡そ三里。

たたらひがは (太刀洗川)〔地〕
筑後國三井郡にあり。筑前國朝倉郡

たたひら (忠廣)〔人〕姓は藤原氏、
新左衛門尉と稱す。有名なる肥前の
刀匠にして、元和元年、武藏大掾に
拜す。寛永九年歿す。年六十一。

たたみがは (只見川)〔地〕岩代國に
あり。源を南會津郡の西南境尾瀬沼
に發し、北流して河沼郡に至りて、
日橋川に會す。長さ三十七里半。

たたみしふ (忠見集)〔書〕壬生忠見
の和歌の集なり。

たたみつ (忠光)〔人〕有名なる備前
國の刀匠なり。正應年間の人。

たたゆきつな (多田行綱)〔人〕伯
耆守に任せられ、藏人となる。世々
攝津國多田莊に居る。故に多田藏人
と稱す。後白河法皇平氏を滅さんと
欲し、成親をして、密旨を傳へしむ
行綱許諾す。後、意變つて清盛に告

の山脈に發源し、西南流して筑後川
に入る。長さ五里余。

たちいりむね (立入宗繼)
〔人〕元尾張の人、朝に仕へて左京亮
となり、禁裡御用の供御を勤む。夙
に皇室の振ばざるを歎き、中納言藤
原惟房に説て、織田信長を薦め、以
て天下を平定せんすとす。遂に密勅を
信長に傳へ、王事に竭さしめたり。

たちからのかみ (手力雄命)
〔人〕天孫の岩戸に隠れさせ給ひし時
岩戸を開きて、大神を出し奉りし神
なり。

たちくさのさけい (立久恵奇景)
〔地〕出雲國簸川郡にあり。神田川の
河口より溯ること四里、奇岩屹立し、
老樹之を點綴す。風景赤壁に似たり
と稱し、文人の來遊するもの多し。

たちばなうちらから (橋浦港) [地] 阿波國那賀郡の東海岸にあり。辨天嶋長嶋、小勝嶋等に據て港口を擁せらる。頗る海運の利あり。

たちばなかちと (橋智子) [人] 内舍人清友の女にして、嵯峨天皇の后なり。仁明天皇、淳和皇后、其他の皇子女を生む。淳和天皇立つに及びて、尊びて皇太后と云ひ、仁明天皇即位の初め、大皇太后と云ふ。嘉祥三年三月崩す。

たちばなじんしや (橋神社) [地] 上総國帆丘町にあり。縣社にして、弟橋姫命を祭る。

たちばなちかび (橋千蔭) [人] 通稱は加藤又左衛門、芳宜園と號す。江戸の人にして、徳川幕府の興力たり。最も、古語に精通し、和歌文章に巧

にして、又、書を能くす。文化五年九月歿す。年七十五。

たちばなつねき (橋常樹) [人] 土佐國の人、若年の時江戸に出て、加茂真淵の門に入り、古學を學ぶ。人となり磊落不羈、聞識甚だ多し。寶曆十二年十一月歿す。年五十九。

たちばなながやす (橋永愷) [人] 剃髮して、名を能因と改む。攝津國古曾部に居りしを以て、世に、古曾部入道と稱す。藤原長能に師事して、和歌を善くす。

たちばななんけい (橋南翁) [人] 名は春暈、字は東風、梅仙と號す。京都の名醫なり。人となり、爽快洒落にして、國學に通じ、和歌を能くす。曾て、諸國を遊歴して、東西遊記の著あり。文化二年四月歿す。

の一人と稱せらる。北陸道俳諧の祖なり。享保三年五月歿す。

たちばなむねしげ (立花宗茂) [人] 立齋と號す。筑後柳川の城主にして、豊臣秀吉に仕へ、驍勇を以て稱せらる。征韓の役、軍に従ひて、大功あり。慶長五年、石田三成に黨し、軍敗れて、家康に降る。元和十九年歿す。

たちばなありべ (橋守部) [人] 通稱は北垣源助、池菴と號す。伊勢國の人にして、江戸に住す。最も、和歌に巧にして、當時、平田篤胤、伴信友、香川景樹と共に、天保の四大家と稱せらる。嘉永二年五月歿す。年八十九。

たちばなもちね (橋諸兄) [人] 初め葛城と稱す。西院大臣、又、井手左

たちばなはやなり (橋逸勢) [人] 承和年間、從五位但馬權守となる。人となり、放縱にして、細節を顧みず。能書の名高し。平安城の宮門の傍に、此人の手に成りしものと云ふ。承和九年七月、皇太子を奉りて、亂をなすと讒せられ、伊豆國に流さるる道にて歿す。

たちばなひめ (橋姫) [人] 日本武尊の寵姫なり。尊、蝦夷を征するため、相摸より、東海に航する時、暴風起り、船覆らんす。姫、以て海神の祟となし、身を以て、尊に代らん。海に投じて歿す。暴風忽ち止みしと云ふ。

たちばなほくし (立花北枝) [人] 次郎右衛門と稱す。加賀國の人、俳諧を以て、其名頗る高し、蕉門十哲

大臣と云ふ。元明、元正、聖武、孝謙の四朝に歴仕し、聖武の朝、大臣に進み、正一位となり、朝臣の姓を賜はる。誠忠の譽高し。寶字元年歿す。年四十七。

たちばなやま (立花山) [地] 筑前國糟谷郡にあり。永祿十二年二月、吉川元春、小早川隆景と共に、戸次道雪と戦ひし處なり。

たちばらさやうしよ (立原杏所) [人] 名は萬、字は遠卿、甚太郎と稱す。水戸の人なり。有名なる畫家にして、又、書に巧なり。天保十一年五月歿す。年五十六。

たちばらするけん (立原翠軒) [人] 名は萬、字は白時、甚五郎と稱す。水戸の藩士にして、有名なる儒者なり。文公の侍讀となり、大日本史の

なりしを以て、香果を、陵前に供へ慟哭して、死せりと云ふ。

たぢみ (多治見) [地] 美濃國土岐郡の西端にある名邑なり。此地は元弘の忠臣多治見國長の出でし處にして其屋敷今尙存在せり。

たつかみざか (多津加見坂) [地] 伊勢國鈴鹿山の別稱なり。

たつかみざき (龍崎) [地] 一に立神崎に作る。壹岐國壹岐郡の東端にして、海に出づること五丁余。若宮崎と共に、蘆邊港を擁す。

たつさき (多津喜崎) [地] 肥前國福江嶋の北部、鷲嶽の山脚海中に斗出したる處を云ふ。

たつし (龍串奇景) [地] 土佐國幡多郡の南端海岸にあり。奇岩怪石起伏して半里の長きに亘る。

校勘、蝦夷地改正の建築等貢獻するまゝの跡からす。

たぢみつちつくり (多治比土作) [人] 萬葉作者の一人にして、和歌に巧なり。寶龜元年、參議に累進し、翌年歿す。

たちびのしばがきのみや (丹治比柴籬宮) [地] 大和國にありき。元正天皇のおはせし宮なり。

たちびのたかあしのはらのみさき (丹治比高鷲原陵) [地] 河内國南河内郡にあり。雄略天皇の御陵なり。

たぢまもり (田道間守) [人] 天之日槍の後裔にして、三宅氏の祖なり。垂仁天皇の十九年、勅を奉じて、常世國に渡り、非時香果を求め、景行天皇の元年に歸る。先帝、崩御の後

國內第一の絶勝にして、馬の鞍星石、秋の月石、根曳竹、男体山、女体山、龍門の瀧、坐頭晝寢石、蓬萊嶋、夢の浮橋、櫻の濱等其勝景一々記するに違あらず。

たつぢさんせん (辰口温泉) [地] 加賀國能美郡にあり。泉質鹽類泉なり。

たつこふぬま (地) 釧路國塘路沼の南方にあり。周囲一里余。

たつさうち (龍草蘆) [人] 名は公美字は君玉、彦二郎と稱す。山城國伏見の人、名高き儒者なり。最も詩に長じ、又、和歌、及び、書をよくす。中年出でて彦根藩に仕へ、後致仕して、専ら著述を業とす。寛政四年二月歿す。年七十九。著書草蘆詩集、其他頗る多し。

たつしま (辰嶋) [地] 豊岐國若宮嶋の西方にあり。周回一里。

たづた (鶴田) [地] 美作國にある市街にして、松平氏の舊藩地なり。

たつたがは (龍田川) [地] 大和國生駒郡なる生駒川の別稱なり。

たつたじんしや (龍田神社) [地] 大和國生駒郡にあり。官幣大社にして、天御柱命、國御柱命を祭る。崇神天皇の御宇の創建にして、二十二社の一たり。此二神を風神と云ふ。

たつたのはすいけ (龍田蓮池) [地] 尾張國海西郡立和村にあり。此地多く蓮根を産す。其味頗る美にして、毎年の産額數萬圓に上ると云ふ。又、夏時は翠蓋の佳人紅白の粧を凝らし、殘月曉風最も賞すべし。

たつたの (龍野) [地] 播磨國にある市街にして、脇坂氏の舊藩地なり。鹽油の名産地たり。

たつたの (龍山) [地] 播磨國印南郡の南部に位す。高さ三〇六尺。全山花崗石より成れり。

たつたのいせん (辰湯冷泉) [地] 羽後國飽海郡にあり。文政十二年の發見にして、泉質硫黄泉なり。

たつたをか (龍岡) [地] 信濃國にある市街にして、大給氏の舊藩地なり。舊稱を田野口と云ふ。

たつたの (龍野) [地] 播磨國にある市街にして、脇坂氏の舊藩地なり。鹽油の名産地たり。

たつたの (龍野) [地] 播磨國にある市街にして、脇坂氏の舊藩地なり。鹽油の名産地たり。

たつたの (龍野) [地] 播磨國にある市街にして、脇坂氏の舊藩地なり。鹽油の名産地たり。

たてあき (伊達安藝) [人] たてむねしげにおなと。

たていしぎ (立石崎) [地] 越前國敦賀灣の西北端にあり。岬頭には燈臺を設く。

たてかはねんば (立川焉馬) [人] 通稱は中村英祝、烏亭、又、談洲樓と號す。和泉屋和助と稱し、大工の棟梁たり。狂歌を善くし、又、芝居の事に精し。落し談中興の祖なり。文政五年六月歿す。年八十。

たてがみ (立神) [地] 大隅國大嶋の東北部、笠利灣に突出する岬角にして、今井崎に對す。

たてくはねば (伊達邦直) [人] 舊仙臺藩主の族、明治二年、書を上げて北海道開拓の策を陳し、嘉納せられて舊臣を率ゐ、幾多の辛慘を経て

産業を得るに至らしめ、地を開く一千余町、人を移すこと三千余人に至る。明治十四年、聖駕北海道に至るや、特に拜謁を賜ふ。二十四年一月歿す。

たてびんりう (館玄龍) [人] 名は成章、字は君慶、北洋と號す。越中國の人、名高き醫者なり。安政六年十一月歿す。年六十五。

たてとしじんじや (館腰神社) [地] 陸前國名取郡にあり。縣社にして、倉稻魂神外二神を祭る。

たてしなやま (立科山) [地] 一に蓼科山に作り、又、飯盛山とも云ふ。信濃國北佐久郡の西南境に位す。高さ八四二四尺余。

たてだにたき (楯谷澤) [地] 紀伊國東牟婁郡にあり。高さ二二〇尺、幅

五尺。熊野川に注ぐ。

たてつねむね (伊達綱宗) (人) 仙臺城主忠宗の第二子にして美作守と稱す。明曆四年家を繼ぎ、陸奥守と稱す。時に攝政伊達宗勝權を專にせんと欲し、奸佞の徒を結ひて綱宗に酒色を勸め、而して一面其失徳を暗らし、遂に蟄居せしむ。

たてぬひじんしや (楯縫神社) (地) 常陸國稻敷郡にあり。縣社にして、彦五十狹知命を祭る。和銅年中創建なり。

たてのねほさど (伊達大木戸) (地) 岩代國伊達郡にあり。東鑑に曰く「文治五年頼朝伊達郡に至る、泰衡之を聞き壘を厚檜山に築き、國見驛と此處との間に於て五丈の長壘を鑿ち、逢隈河流を堰き、西木戸太郎國

禁錮せられ、慶應元年十二月死を賜ふ。年四十六。

たてべりよりたい (建部綾岱) (人) 名は孟齋、綾岱は其號なり。陸奥國の人にして、江戸淺草に住す。和歌、俳諧、及び、書畫に名あり。安永三年三月歿す。年五十六。

たてまさむね (伊達政宗) (人) 天正十六年、初めて、信を徳川家康に通す。連年、四隣を征服して、威を東北に振へり。人となり、豪勇にして、膽力あり。同十八年、秀吉に属す。征韓の役、騎兵隊を率ゐて、各地に轉戦し、大功あり。常に、意を海外に注ぎ、嘗て、其臣某を、羅馬及び、南洋に遣し、大に、成す處あらんせしも、故ありて成らず。寛永十三年五月歿す。年七十。

たて

衛をして金剛別當秀綱已下二萬騎を率ゐて之を守らしむ」と即ち此地を云ふなり。又、附近に下組關址あり。往昔、阪上田村鷹、蝦夷を防がんが爲めに置きし處と稱す。

たてのさぶらう (館三郎) (人) 源義光におなり。

たてばやし (館林) (地) 上野國にある市街にして、秋元氏の舊藩地なり、たてばやしと云ふ (館林侯) (人) 徳川綱吉におなり。

たてべりたけひと (建部武彦) (人) 名は自強、孫左衛門と稱す。筑前侯に仕へて番頭たり。最も劍法をよくす。時に幕府尾張侯に命じて、征長の師を起す。黒田侯大に之を患へ、武彦をして長藩を説かしめ、遂に和を請せしむ。後、奸臣の讒に依り、

たてまつとらあり (立松東蒙) (人) 名は懷之、字は子玉、尾張國の人、江戸に住す。人となり學を好み、篤學を以て儒林に稱せらる。傍ら國學に通じ、和歌をよくす。後、狂歌師となり、其名一世に鳴れり。寛政元年三月歿す。年六十四。

たてむねかつ (伊達宗勝) (人) 兵部少輔と稱す。政宗の季子なり。初め政宗深く宗勝を寵す。宗勝密かに嗣たらんことを期して成らず。常に簒奪の志を懷き、原田甲斐と結びて綱宗に遊惰を勸め、退隱せしめて世子龜千代を立て、己攝政となりて權を専らにし、猶、龜千代を弑して一子市正を立てんとす。偶、忠臣伊達安藝、片倉小十郎のために幕府に訴へられ、惡事發覺して遂に自殺す。

たて

たてむねしげ (伊達宗重)〔人〕初め信濃を稱し、後、安藝を改む。伊達家の老臣として、幼主綱村の叔父たり。誠忠を以て稱せらる。同僚伊達宗勝、奸臣原田甲斐を謀りて、非望を企て、幼主を害せんとするや、片倉景康等と議し、事を幕府に訴ふ。辨論幾回、未だ決せず。寛文十一年三月、法廷に於て、原田のために、刺殺さる。

たてめさき (立目崎)〔地〕大隅國肝属郡遠見山の山脚突出したる處を云ふ。其最端には佐多岬あり。

たてやま (館山)〔地〕安房國にある市街にして、稻葉氏の舊藩地なり。たてやま (立山)〔地〕越中國にあり。國中第一の高山にして、高さ五〇七二尺。活火山なり。連峰中、最高峰

を雄山と云ひ、其他淨土山、別山、劍ヶ嶽等數十の支峰あり。俗に七十二峰と稱す。又、雄山の巔に雄山神社あり。夏日參詣するもの頗る多し。たてやまかち (館山港)〔地〕安房國館山町の沿岸にあり。國中第一の良港たり。

たてやまこちあん (館山公園)〔地〕安房國館山町の丘上にあり。俗に北下壑と稱す。園は人工を施さざるを以て却て風致あり。脚下は深碧を凝らし、菱花灣、又、遙かに富士の雪、洲崎の風光一眸の中に集り、地方有数の勝地なり。

たてやまあん (館山灣)〔地〕總房半島の西海岸にあり。浦賀海峽の末を受け、相模灘に臨む。一に鏡ヶ浦と云ひ、又、菱花灣の雅稱あり。

たてらさん (龍良山)〔地〕對馬國下縣郡の南部に位す。雌雄二峰あり。雄峰高さ一八二八尺、雌峰高さ一六九〇尺。

たてりうわん (館柳灣)〔人〕本姓は小山氏、名は機、字は樞、次郎と稱す。越後國の人にして、幕府の徒士たり。詩に巧にして、雷名、海内に鳴る。弘化元年四月歿す。年八十有三。

たてりくわろさん (立里鍛山)〔地〕大和國吉野郡にあり。銅を産出す。製出高凡そ一萬八千斤。

たてわれやま (堅破山)〔地〕一に立割山に作る。常陸國多賀郡の中央西端に位す。高さ一二五〇尺。

たてをか (館岡)〔地〕羽前國北村山郡の西南部に位する名邑なり。

たてをかいけ (立岡池)〔地〕一に瀧岡池に作る。肥後國宇土郡にあり。周囲一里。

たてをいじんむら (多度大神宮)〔地〕伊勢國桑名郡にあり。縣社にして、天津彦根命を祭る。

たどつ (多度津)〔地〕讃岐國にある市街にして、京極氏の舊藩地なり。たどつかち (多度津港)〔地〕讃岐國多度津町の沿岸にあり。前は、筆の海に臨み、盪飽諸嶋を扣へ、後には筆山を負ふ。四國沿岸、屈指の良港にして、和船の出入甚だ多く、貨物の集散頻繁なり。

たどやま (田跡山)〔地〕一に多度山に作る。美濃國養老山の別稱なり。たどやま (多度山)〔地〕一名箕山と云ふ。伊勢國桑名郡の北境に位し、

三十六峰に分る。高さ大約二二〇〇尺。

たなが (田中) [地] 駿河國にある市街にして、本多氏の舊藩地なり。

○大坂市南區にあり。天正三年四月、大坂一向城、織田氏と戦ひし處なり。

たながかりざり (田中耕造) [人] 名は信雅、江戸の人、初め業を昌平校に修め、後、佛蘭西語を學び、博識を以て名あり。維新後、職を大學校、司法省、文部省等に奉じ、明治

十二年、大警視川路利良に隨て佛國に差遣せられ、翌年歸朝す。十五年

東京府會議員に選ばれ、又、自由新聞に記者たり。十六年十一月歿す。

年三十三。

たながくわらせん (田中鐵泉) [地] 上野國前橋市にあり。泉質炭酸泉なり。

たながせたき (棚瀬) [地] 一名不動澤と云ふ。備中國阿哲郡にあり。高さ一五〇尺、幅一五〇尺。

たながたいくわん (田中大觀) [人] 名は瓊、字は文恭、與三郎と稱す。京部の人にして、名高き儒者なり。

最も、文章、及び、音韻學に精しく、特に、吳音に精し。初めて、小説、院本の類を翻譯す。享保二十年十月歿す。年五十六。

たなかとつげん (田中訥言) [人] 名は痴、字は虎頭、大孝齋と號す。尾張國の人にして、京都に住す。有名なる畫家にして、特に、衣冠、東帶の人物を善くす。文政六年三月歿す。

たながみさしげ (田中久重) [人] れたり。明治十六年八月歿す。年五十一。

たながまさを (田中正雄) [人] 廣嶋の藩士。人となり豪邁、文武に長じ、氣節あり。大和十津川の擧、及び、生野銀山の擧に加はり、太平山に據る。後、逃れて國に歸る。藩主江戸に遊學せしめ、昌平校に入らしむ。幕吏の怪む處となりて獄に繋かれ、慶應二年正月、獄中に毒殺せらる。

たながらんりより (田中蘭陵) [人] 名は良暢、字は子舒、武助と稱す。武藏國の人なり。幼にして、物徂徠の門に學ぶ。少年四傑の一人と稱せらる。慷慨烈士の名、一時に高し。享保十九年十二月歿す。年三十九。

たなくら (棚倉) [地] 磐城國東白川郡の西隅に位する名邑にして、阿部

通稱は儀右衛門、後、近江と改む。筑後久留米の人。人となり慧敏、機巧を好み、無蓋燈、防火の排水器雲龍水、萬年時計等を發明し、其名海内に鳴れり。後、佐賀の製練所に聘せられ、又、久留米藩の器械製造に従事す。明治六年、東京に上り、製造業に従事し、業務日に盛大に赴けり。十四年十一月歿す。年八十五。

たなかいはいはち (田中平八) [人] 信濃國伊那郡の人、安政六年、横濱の開港あるや、生絲、製茶の輸出をなし巨利を博せり。維新前國事に奔走して幾度か其資金を蕩盡したるも更に屈せずして、慶應元年横濱に兩

換店を出して以來、日に巨利を博し、銀行、會社、取引所の重職を帯び、實業界の雄將として一般に重視せら

り。

たながら (棚倉) [地] 磐城國東白川郡の西隅に位する名邑にして、阿部

たり。

たながら (棚倉) [地] 磐城國東白川郡の西隅に位する名邑にして、阿部

たり。

たながら (棚倉) [地] 磐城國東白川郡の西隅に位する名邑にして、阿部

たり。

たながら (棚倉) [地] 磐城國東白川郡の西隅に位する名邑にして、阿部

氏の舊藩地なり。

たなざはたさ (棚澤) [地] 相模國足柄上郡にあり。高さ三〇〇尺、幅一五尺。

たなはしじよりん (棚橋松村) [人] 名は嘉忠、字は伯真、大作と稱す。美濃國の人、幼より讀書を好み、最も詩に通ず。中年明を失ひしが、改々として倦まず、其名遠近に傳ふ。後、東京に出て、中村敬宇、長三州、重浦重剛等と名を等うせり。明治二十六年五月歿す。年六十七。

たなはしりくろく (棚橋録々) [人] 美濃國の人、有名なる俳人なり。獅々庵を承繼す。明治二十九年七月歿す。年七十九。

たなはたから (七夕考) [書] 七夕の故事を説明したるものにして、跡部

光海の著なり。

たなぶ (田名部) [地] 陸奥國下北郡の東部南端に位し、大湊灣に臨み、田名部川の河口にある名邑なり。

たなべ (田邊) [地] ①紀伊國にある市街にして、安藤氏の舊藩地なり。②丹後國舞鶴市の別稱なり。

たなべじよりん (田邊城址) [地] 紀伊國田邊町にあり。慶長年間、淺野氏の築く處にして、後、徳川頼宣此地を領するに當り、老臣安藤直次に賜ひ、世襲して維新に至る。

たなべせきあん (田邊石菴) [人] 名は誨輔、字は季徳、新次郎と稱す。尾張國の人。名高き儒者なり。昌平校教授となり、又、甲府敎典館學頭となる。安政三年十二月歿す。年七十六。

たなべはちぎるもん (田邊八左衛門) [人] 小笠原貞信の門人にして、有名なる槍術の達人なり。田邊流槍術の祖なり。元和、寛永頃の人なり。

たなべわん (田邊灣) [地] 紀伊國西牟婁郡の西海岸にあり。灣口は瀬戸崎と、他の一岬角とに擁せらる。沿岸中、田邊港最も著はれ、海運の便大なり。

たなやけいん (棚谷桂陰) [人] 名は元善、字は元卿、笠間藩の儒醫なり。藩侯の侍醫となり、兼て政務の顧問たり。最も詩に長ず。國史攬要十六卷を著す。明治十五年十月歿す。年七十。

たなかせかぢのすけ (谷風梶之助) [人] 本姓は増田氏、幼名は興四郎、

陸前國の人にして、相模の名手たり。十九歳にして、力士となり、秀の山と云ふ。安永五年二月、谷風梶之助守胤と改め、寛政元年十一月、日の下開山となりて、横綱を許さる。同七年七月歿す。年四十八。

たながはしせい (谷川士清) [人] 名は昇、淡齋と號す。伊勢國の人なり。有名なる國學者にして、特に語學に精通す。和訓栞を著はす。安永五年十月歿す。年七十。

たながはせん (谷川温泉) [地] ①上野國利根郡にあり。康暦年間の發見にして、泉質鹽類泉なり。②磐城國東白河郡にあり。泉質單純泉なり。

たなちけいこう (谷口鶏口) [人] 水戸庵と號す。江戸の人、有名なる

俳人なり。人となり慷慨にして、氣節あり。享和二年七月歿す。年八十五。

たにしんぢちぶらん (谷口蕪村) (人)

名は信章、字は春星、夜半亭と號す。大坂天王寺の人。京都に住す。俳諧をよくし、又、畫に巧なり。天明三年十二月歿す。年六十七。

たにしんぢちぶらん (谷秋香) (人) 通稱はしんぢ、名は舜英、字は小香、文晁の妹にして、中田榮堂の妻たり。有名なる畫工にして、最も山水に長す。天保三年五月歿す。年六十一。

たにしんぢちぶらん (谷時中) (人) 名は素有、大學と稱す。初め、僧なりしが、後、朱元の學を修め、大に、其學を唱道す。山崎闇齋、野中兼山等、其門に出づ。慶安二年十二月歿す。年

陸奥國上北郡にあり。上湯、下湯の總稱にして、泉質各異類泉なり。たにふんてり (谷文晁) (人) 初めの名は文朝、文五郎と稱し、寫山樓、講學齋等の號あり。有名なる諸伯にして、特に、水墨の山水に妙なり。天保十二年十二月歿す。年七十八。

炭酸泉なり。

たにぢちぶらんせん (谷地温泉) (地) 陸奥國上北郡にあり。上湯、下湯の總稱にして、泉質各異類泉なり。

たにふんてり (谷文晁) (人) 初めの名は文朝、文五郎と稱し、寫山樓、講學齋等の號あり。有名なる諸伯にして、特に、水墨の山水に妙なり。

天保十二年十二月歿す。年七十八。たにむらびいすけ (谷村計介) (人) 日向國の人なり。明治十年の役、徵せられて、歩卒となり、小倉、熊本等に勤務す。性、沈勇にして、義を重んず。其熊本城にあるの時、城軍に圍まれて、内外聯絡する能はず。時に、計介、司令官谷干城の内命を受け、潛かに城を出で、身を農夫に扮して、艱苦を嘗め、遂に、任

務を全うす。同年三月、田原坂の激戦に於て、敵丸に中りて死す。年二十五。後人、稱して、軍人の龜鑑とす。

五十二。

たにすゐせき (谷水石) (人) 初め右京と稱す。丹波國の人。世々柏原侯に仕ふ。人となり、慷慨にして氣節あり。安政年間、外國と互市を開かんとするや、上書して其不可を論じたるも用ゐられず、依て海防に意を注ぎ、遂に銃を創製し、奇巧人を驚かす。後又、銃丸を妨ぐの一器を創製す。之を車楯と云ふ。加賀、仙臺、森川、田安等の諸侯に聘せらる。明治十年歿す。年七十七。

たにだき (谷瀑) (地) 備後國比婆郡にあり。三層に落下す。一の瀑高さ一〇三尺、二の瀑高さ一〇〇尺、三の瀑高さ二三〇尺。幅各一三尺。

たにぢちぶらんせん (谷地頭温泉) (地) 渡嶋國函館區にあり。泉質

たにぢちぶらん (田沼意次) (人) 父を意行と云ふ。初め紀州藩の小吏なり。吉宗將軍職を繼ぐに及びて、意行近侍たり。意次父の職を繼ぎ、家重、家治に仕へて甚だ寵あり。遂に累進して老中たり。人となり、詰詐、猾智に富む。子意知と共に權を專にし、密に不軌を圖る。水野越中起つに及びて、之を幽す。天明八年十月歿す。年七十。

たにぢちぶらん (田沼意知) (人) 意次の子、天明三年、若年寄に進む。父と共に顯職にありて權を弄し、横暴を極む。同四年三月、殿中に於て、

たにぢちぶらん (田沼意知) (人) 意次の子、天明三年、若年寄に進む。父と共に顯職にありて權を弄し、横暴を極む。同四年三月、殿中に於て、

新番隊士佐野政言のために傷けられ翌月歿す。

たねがしま (種子嶋) [地] 大隅國大泊港の東南方にあり。周回三十七里半余。

たねがしまかいげふ (種子嶋海峡) [地] 大隅國屋久嶋と、種子嶋との中間を云ふ。距離四里余。

たねがしまとさな (種子嶋時勢) [人] 種子嶋の人、天明年中、外船嶋に來りて互市を求む。時勢嶋人と共に、船に至り、其齎らす所の鐵砲を見、未曾有の珍器なりとして之を購ひ、遂に砲術を我國に傳へたり。

たねひこ (種彦) [人] 柳亭種彦におなり。

たねまじ (種間寺) [地] 土佐國吾川郡にあり。本尊藥師如來、四國遍路

第三十四番の札所なり。

たねやまがはら (種山原) [地] 陸中國江刺郡、及び、陸前國氣仙郡に亘る間にあり。東西二里余、南北二里半余。

たのちら (田野浦) [地] ①備前國兒嶋郡田野浦村の海濱を云ふ。②土佐國安藝郡の西北海面を云ふ。

たのちらから (田野浦港) [地] 豊前國企救郡北海岸の東に偏す。西には下關、門司港あり、東端は部崎にして、周防灘に瀕す。頗る良港にして、泊舟に便なれども、地僻なるに依り、輻湊するに至らず。

たのちらせと (田浦瀬戸) [地] 肥前國福江嶋の東北端と、久賀嶋の間を云ふ。

たのくわらざん (田野嶺山) [地]

豊後國玖珠郡にあり。九重山嶺山、焼山嶺山の両所あり。硫黃を産出す。製出高凡そ八十萬斤。

たのしりくわらざん (田尻嶺山) [地] 一名草生水淵嶺山と云ふ。越後國尼瀨町にあり。石油を産出す。産出高凡そ三百石。

たのむらちくでん (田能村竹田) [人] 名は孝憲、字は君彥、行藏と稱す。豊後國の人なり。有名なる畫家にして、又、詩、及び、書を能くす。天保六年八月歿す。年五十九。

たはとじんじや (多嶋神社) [地] 石見國那賀郡にあり。縣社にして、事代主神を祭る。貞觀三年九月、大和高市神社の神を奉祀す。

たはら (田原) [地] 三河國にある市街にして、三宅氏の舊藩地なり。

たはらてんわら (田原天皇) [人] 施某皇子におなり。

たはらにしのみささぎ (田原西陵) [地] 大和國添上郡にあり。光仁天皇御父春日天皇の御陵なり。

たはらひがしのみささぎ (田原東陵) [地] 大和國添上郡にあり。光仁

天皇の御陵なり。

たはららと (田原本) [地] 大和國にある市街にして、平野氏の舊藩地なり。

たはららきんせん (田原温泉) [地] 肥後國阿蘇郡にあり。泉質塩類泉なり。文化年間の發見なり。

たはららき (戲草) [書] 雨森芳洲がなり。ふれて、かき記したる隨筆なり。

たひかはらららるるん (旅川彌右衛門) [人] 政羽と稱す。有名なる槍術家にして、旅川流槍術の祖なり。延寶頃の人なり。

たひのら (鯛浦) [地] ①肥前國中通嶋の東南部海濱を云ふ。②同國大村灣の別名なり。

たひのらら (鯛浦港) [地] 肥

の役、源氏の將、箕尾谷國俊と搏撃し、其兇のしころを相引して、そを斷てり云ふ。世に、悪七兵衛と云ふ。

たひらのかぬもり (平兼盛) [人] 村上天皇に仕へて、駿河守に進む。

最も、和歌に巧なり。正暦元年歿す。

たひらのきよもり (平清盛) [人] 淨海と號す。世、稱して、太政入道と云ふ。刑部卿忠盛の長子なり。保元

の亂に鳥羽天皇に屬し、軍功を以て、播磨守に任せられ、累進して、太政大臣に進む。外戚を頼みて、惡逆無道至らざるなく、一族、皆、高官に昇り、采邑天下に半するに至る

養和元年、熱病を患へて歿す。年六十四。

たひらのこれひら (平維衡) [人]

前國中通嶋の東沿岸、鯛浦の北部にありて、奥浦と相對す。港内水深く、大船を泊するに適す。

たひら (平) [地] 磐城國にある市街にして、安藤氏の舊藩地なり。

たひらら (平嶋) [地] 大隅國諏訪瀬嶋の西北方にあり。周囲二里。

たひららら (平東海) [人] 江戸の儒者なり。維章、又、維翰と號す。博覽強記にて、當時の大儒物徂徠にも尊ばれたり。元文五年七月歿す。年五十四。

たひらのあつもり (平敦盛) [人] 世に、無官太夫と稱す。壽永三年二月一の谷落城の時、單騎、熊谷直實と戦ひて討たる。年十六。

たひらのかびきよ (平景清) [人] 平家の侍大將にして、膂力あり。八嶋

貞盛の孫にして、武勇あり。源頼信、藤原保昌、平致頼と共に四天王と稱せらる。下野守たり。役、致頼と私闘して淡路に流さる。

たひらのこれもち (平維茂) [人] 世に餘五將軍と稱す。貞盛の玄孫、鎮守府將軍繁盛の孫なり。少にして勇略あり。其陸奥にあるや、國の榮族藤原師種と田を争ひ、遂に之を殺して威名關東に著はる。後、出羽介となり、鎮守府將軍に任せらる。年八十にして歿す。

たひらのこれもり (平維盛) [人] 重盛の長子にして、父の後を襲けり。源頼朝の兵を關東に擧ぐるや、追討使として、富士川に陣す。一夜、水禽の驚き立つを見て、源氏の大軍到るをなし、戰はずして、逃げ還る。

壽永三年、源義仲を討たんとして、大に敗られ、遁れて、紀伊國に至りて歿す。

たひらのさだもり (平貞盛) (人) 國香の子なり。常平太と稱す。國香の、將門に殺さるるや、官を捨てて、常陸に歸り、天慶元年、官に請ひて、藤原秀郷と、共に、將軍を猿嶋に攻めて、之を射殺す。

たひらのしげと (平繁子) (人) 建春門院と號す。兵部少輔時信の女にして、後白河天皇の后なり。高倉天皇を生む。高倉天皇位に即くに及びて、尊びて皇太后と云ふ。安元二年七月崩す。年三十五。

たひらのしげひら (平重衡) (人) 清盛の子にして、近衛中將たり。壽永の役、須磨浦に於て、源氏の將、

たひらのたかむね (平高棟) (人) 葛原親王の長子なり。幼にして聰悟讀書を好む。天長二年、姓平朝臣を賜ふ。參議より大納言に累進す。天安九年薨す。年六十四。

たひらのたけのり (平忠度) (人) 忠盛の子にして、膂力あり。驍勇を以て稱せらる。藤原俊成に學びて、和歌に堪能なり。壽永の役、平氏利あらず、鎮西に赴かんとし、潛かに、俊成を訪ひ、詠歌一卷を託して去れり。世傳へて、美談とす。壽永三年、一の谷の役に戦死す。

たひらのたけもり (平忠盛) (人) 白河、堀河、鳥羽の三朝に歷仕し、刑部卿に拜し、昇殿を許さる。特に、鳥羽上皇に寵せられければ、遂に、群僚の嫉む處となり、潛かに除かれんとす。

莊家長に擒へられ、遂に、鎌倉に送らる。此より先、重衡、嘗て、奈良の寺院を燒きたる事あり。それを怨める僧徒、重衡の身を下渡されんと請ふ。賴朝之を許す。壽永四年、木津川の上にて、斬らる。年二十九。

たひらのしげもり (平重盛) (人) 世に、小松殿、又は、燈籠大臣と稱せらる。清盛の長子なり。人となり、謹直、忠誠、温厚にして、勇武比なし。内大臣に拜す。常に、父の惡逆を坐視するに忍びず、忠孝両全を計るため、死を熊野社に祈り、疾で歿す。年四十二。

たひらのすゑなが (平季長) (人) 高棟の子、元慶中、兵部少輔となり、累進して從四位下右大辨に至る。寛平九年歿す。

忠盛、之を推知し、豐明節曾に木刀を帯びて會し、群僚の膽を奪ひしは、其用意の周到なるにあり。又、一夜、白河上皇に從ひて、微行する時、怪僧を捕ふ。人々、其膽略に服せりと云ふ。仁平三年歿す。年五十八。

たひらのつねまさ (平經正) (人) 參議經盛の子、和歌をよくし、巧に琵琶を彈す。少にして仁和寺に入り、守覺法親王に給仕す。親王甚た之を寵し、其愛する處の琵琶青山を賜ふ。安徳天皇西狩に及びて、親王に謁し、戦歿と共に名器の廢れんことを恐れ、前に賜ひし所の琵琶を奉還す。壽永三年、一谷陷落の後、源軍に迫られて自殺す。

たひらのとくと (平徳子) (人) 太政大臣清盛の女。高倉天皇の中宮な

り。建禮門院と云ふ。安徳天皇を生む。壽永二年、安徳天皇に侍して西海に赴き、平軍敗るるに及びて、天皇を抱て海に投ず。源軍の救ふ處となり、京師に送らる。後、尼となりて眞如覺と云ひ、大原寂光院に居る。建保元年十二月薨す。年五十七。

たひらのとむもり (平知盛) (人) 清盛の子にして、武勇の聞えあり。大納言に拜す。壽永四年、榎浦の戦、自ら、船頭に立ち、將士を指揮して、奮闘す。後、叔父教盛と共に、自殺す。年三十四。

たひらのりのりつね (平教經) (人) 世に、能登守教經と稱せらる。脊力衆に秀て、驍勇の聞えあり。壽永四年、屋嶋の戦に、源義經と死を決せんことを欲し、單身、敵船に突入す。従士に

妨げられて、海に投て殺す、年二十六。

たひらのりのりもり (平教盛) (人) 忠盛の子にして、清盛の弟なり。世に門脇殿と稱す。平治の亂、弟頼盛と官兵を率めて奮戦大に功あり。養和元年、榎中納言に累進す。壽永の役、安徳天皇壇浦に崩するに及び、自刃して歿す。年五十七。

たひらのまさかど (平將門) (人) 相馬小二郎と稱す。勇敢にして、騎射を巧にす。天慶二年、非望を抱き、偽宮を下總國猿嶋に建て、大臣以下文武百官を置き、自ら、新皇と稱し、彌、剽掠を極む。同三年、藤原忠文を征討大將軍となし、以て、討伐せしむ。未だ到らざるに先ち、平貞盛のために殺さる。

たひらののみや (平安宮) (地) 又、へいあんの宮とも云ふ。恒武天皇の延暦三年、大和國奈良より、今の京都に遷らせ給ひしわりの皇后にして、維新前迄、二千有餘年間、代々の皇居たり。

たひらのむねさよ (平宗清) (人) 平頼盛に仕へて目代たり。源義朝誅に伏するの後、頼朝等を捕へて清盛に致す。清盛、頼朝を宗清に送りて刑を行はしむ。宗清之を憐み、ために池尼に説ひて頼朝を助く。後、頼朝兵を擧ぐるに及び、召せども義を重んじて應ぜず。平氏西奔に従ひ、終る處を知らず。

たひらのむねと (平棟子) (人) 宰相三位と稱し、後、大納言の局と稱せらる。木工頭棟基の女、初め四條

天皇の掌侍たり。後醍醐天皇密かに之に幸し、宗尊親王を生む。後醍醐天皇位に即くに及びて龍幸日に遅く寛元三年、典侍となり、後、三宮に准せらる。

たひらのむねもり (平宗盛) (人) 清盛の子なり。優柔怯懦にして父に似す。壽永年間、太政大臣に拜せられ、隨身兵杖を賜ふ。華麗自ら驕り、時人の譏る處となる。時に源軍京師を侵す。宗盛倉卒西奔し、屋嶋の役、舟中に彷徨して決する能はず、遂に源軍のために捕へられ、近江國篠原に斬らる。年三十九。

たひらのゆきもり (平行盛) (人) 清盛の孫、其盛の子なり。初め藤原定家に就て和歌を學ぶ。平氏西奔の時、その歌稿一卷を定家に遺して留

別す。屋嶋の役、敵舟に入り、奮戦して死す。

たひらのよりもり (平頼盛) (人) 忠盛の子、清盛の異母弟なり。世に池大納言と稱せらる。壽永二年、權大納言に拜す。平氏の西奔するや、頼盛京師を去るの意なく、鳥羽に至り、赤旗を徹して密かに京師に還る。後、頼朝に招致せられて、官職采地を復せらる。人其仇家に倚頼するを譏る。頼盛愧ぢて剃髪し、名を重蓮と改む。文治二年歿す。年五十五。

たひらのちろくたい (平六代) (人) 維盛の長子なり。文治元年、北條高時に捕へられ、將に刑せられんとす。僧文覺ために頼朝に請ひて其死を宥し、僧となして名を妙覺と改む。世に三位禪師と稱す。頼朝の歿後、文

たまあらね (玉篋) (書) 二十一代集以後の和歌、又は、文章の詞のあやまれる、助辞のたがへるなどを正したるもの。本居宣長の著なり。

たまあらねまど (玉篋) (書) 中嶋廣足の著。

たまがき (玉垣) (人) 肥前國嶋原の人。人となり勇悍にして、義氣あり。江戸に出て角抵長玉垣の弟子となり、力士となる。技大に進み、雷名天下に聞ゆ。遂に玉垣の後繼となり。天下の角抵長となる。

たまがきのうちつ (玉垣内)

たふの事に坐して、相摸田越川に斬らる。年二十六。

たふがたけ (塔嶽) (地) 一名、孫佛と云ふ。相摸國足柄上郡の東北境に位す。高さ四九〇七尺。

たふししま (答志嶋) (地) 志摩國島羽瀨を擁する嶋。周囲六里余。

たふのさはのせん (塔澤温泉) (地) 相摸國足柄下郡にあり。福住の湯、元湯、關口の湯、藤屋の湯等の總稱にして、箱根七湯の一なり。泉質、各、塩類泉なり。

たふののみさき (塔尾陵) (地) 大和國吉野郡にあり。後醍醐天皇の御陵なり。

たへのちら (妙浦) (地) 安房國安房郡にあり。今訛りて鯛の浦と稱す。昔時、蓮如上人此浦に漁獵するを禁

たふかぢ (玉楮象谷) (人) 名は爲三、敬藏と稱す。讃岐國高松藩の漆工にして、讚岐塗 (一名象谷塗) の發明者なり。明治二年二月歿す。年六十四。

たまがつま (玉勝間) (書) 本居宣長の隨筆なり。

たまがは (多摩川) (地) 一に、玉川に作る。武藏國にあり。日本六玉川中第一の大河にして、源を甲斐國東山梨郡の東北隅に發し、東京灣に注ぐ。長さ三十八里。

たまがは (玉川) (地) ①相摸國大山の東溪に發源し、國中を環流して、漸く西南に轉じ、鈴川を合せて金目川に會す。日本六玉川の一。②多摩川におなす。③陸中國玉川畑山に發

たまがは (玉川) (地) ①相摸國大山の東溪に發源し、國中を環流して、漸く西南に轉じ、鈴川を合せて金目川に會す。日本六玉川の一。②多摩川におなす。③陸中國玉川畑山に發

源し、東北流して海に入る。所謂、陸奥の野田玉川にして、日本六玉川の一。◎羽前國にあり。源を越後の飯豊山に發し、北流して、國中の諸水を併せ、荒川に會す。◎古名を副川と稱す。羽後國なる大深嶽に發源し、國中の諸水を集めて御物川に入る。長さ、二十七里十八町。◎備中國川上郡の東南隅、玉川村より出て、成羽川に入る。

たまがはから (多摩川考)【書】水道の淵源たる武蔵の玉川の考證なり。小山田與清の著作。

たまさく (玉菊)【人】江戸芳原万字屋の妓なり。容姿艶麗、多能にして、仁慈を好む。特に絲竹管絃をよくし、香茶俳諧に通ず。享保十一年三月歿す。年二十五。俵屋虎文等之を愍み、

燈を廊中に掲げて其靈を吊ふ。これ芳原に燈籠を掲ぐるの初なりと云ふ。たまさくじやうさい (玉置讓齋)【人】名は直雄、環一郎と稱す。肥前松浦侯の老臣たり。幼にして敏捷、學を好み、經史、及び、詩歌に長ず。晩年、私塾を開きて平戸藩の子弟を教授せり。明治二十二年九月歿す。年六十二。

たまさくやま (玉置山)【地】◎大和國吉野郡の南部に位す。高さ三二〇〇尺。山中に玉置神社あり。◎紀伊國東牟婁郡の北部に位す。高さ三六四〇尺。

たまさくあさい (玉木葦齋)【人】名は正英、五十膳湖翁と號す。有名な神道家なり。元文元年八月歿す。たまくしげ (玉くしげ)【書】本居宣

長の著。當時の人の、心得となるべき道の大要を示したるもの。

たまくららのけんから (手枕兼好)【人】吉田兼好におなり。

たまさきじんじや (玉前神社)【地】上總國長生郡にあり。國幣中社にして、玉前神を祭る。

たましま (玉嶋)【地】備中國淺口郡の東部南邊、玉嶋灣頭に位する名邑なり。

たましまから (玉嶋港)【地】備中國玉嶋町の海岸にありて、水嶋灘に臨む。港内廣く、船舶常に幅濶し、帆檣林立、一繁華をなす。汽船の、瀬戸内海に往來するものは、概れ寄港し海運至便、縣下第一の要港なり。たまなれじんじや (玉垂神社)【地】筑後國三井郡にあり。縣社にして、

八幡大神、住吉大神、武内宿禰を祭る。白鳳年間の創建なり。

たまつくりせんせん (玉造温泉)【地】出雲國八束郡にあり。養老年間の發見にして、泉質塩類泉なり。

たまつしまみやうじん (玉津嶋明神)【地】紀伊國和歌浦町にあり。和歌浦靈神に衣通姫(和歌三神の一)を祭る。

たまでのをかのへのみささき (玉手岡上陵)【地】大和國南葛城郡にあり。孝安天皇の御陵なり。

たまのうらわん (玉浦灣)【地】肥前國五嶋の最南端西海岸にあり。膳棚崎、山浦崎との二岬角にて灣口をなす。

たまのべ (玉江)【地】伊豆七嶋の一なる八丈嶋の西部、赤石山南端の海

瀧を云ふ。

たまのねやのじんじや (玉祖神社) [地] 周防國佐波郡にあり。國幣小社にして、玉祖命、外一座を祭る。創建年月未詳。建久六年九月再建す。たまのねやのみこと(玉祖命) [人] 伊弉諾尊の御子にして、始めて、八坂瓊勾玉を造り給ひし神、玉祖連の祖なり。

たまのがは (玉野川) [地] 尾張國にあり。美濃國なる土岐川の支流にして、東春日井郡の東北境より西南流して、海に入る。長さ二十二里。本川の上流に於て、奇巖水中に起伏し、奔湍甚だ急激なり。

たまのせいり (玉乃世履) [人] 名は泰吉郎、字は公素、五龍と號す。周防岩國の藩士、頼三樹、僧月照、

吉田松隆等と交りて國事に奔走す。維新後、多く、司法官に歴任し、大山綱吉事件、福嶋高田國事犯事件等の審問をなし、裁決流るるが如く、名判官を以て稱せらる。明治十九年、大審院長に任ぜらる。同年八月自殺す。たまのみはしら (靈能眞柱) [書] 天地開闢の事、及び、神代の事を記述したるものにして、平田篤胤の著なり。

たまのゆをんせん (玉湯温泉) [地] 磐城國雙葉郡にあり。泉質單純泉なり。

たまのををし (玉小櫛) [書] 源氏物語を註釋したるものにして、本居宣長の著なり。

たまほこひやくしゆ (玉鉾百首) [書] 古學の大意を、萬葉體の古風に

よみたる歌、百首を集めたるものにして、本居宣長の作なり。

たままつみさを (玉松操) [人] 京都の人、幼にして僧となり、猶覺と號し、大僧都法印に叙せらる。僧律を整革せんとして、衆僧に憎まれ、還俗して玉松毅軒と稱す。最も勤王の志あり。嘗て、倉岩具視と相識り、具視を輔けて維新の大業を完成して功あり。明治三年、侍讀に任ず。後、具視と議合はずして絶つ。五年二月歿す。年六十三。

たまやまのいせん (玉山冷泉) [地] 磐城國石城郡にあり。泉質亞爾加里性炭酸泉なり。

たまゆのいせん (玉湯冷泉) [地] 磐城國石城郡にあり。泉質鹽類泉なり。

たまよりひめ (玉依姬) [人] 又、活玉依姬とも申す。たぐはたちはた姫の御子にして、天國主尊の妃なり。たまる (田丸) [地] 伊勢國にある市街にして、徳川氏の舊藩地なり。

たまわかすのみことじんじや (玉若酢命神社) [地] 隱岐國周吉郡にあり。縣社にして、玉若酢命を祭る。天武天皇御宇の創建なり。

たまるじんじや (玉井神社) [地] 備前國岡山市にあり。縣社にして、彦火々出見命、豊玉姬命を祭る。

たまやこたらち (田宮小太郎) [人] 俗に坊太郎と云ふ。讃岐國の人なり。その幼少の頃、父源八、同藩士のために殺さる。小太郎、其仇を報せんを欲し、江戸に來りて、劍法を學び、大に、熟達す。後、國に歸

りて、遂に、志を遂ぐ、壯年に到ら
ずして、歿す。

たみやへいへいへい(田宮平兵衛)〔人〕
名は重正、後、對馬を改む。林崎重
臣の門弟にして、上流の劍を善くす。
田宮流抜刀の祖なり。

たむけのせつ (手向之説)〔書〕「た
むけ」さいへる語の由来を考證論述
したるもの。若林強齋の著。

たむげやま (手向山)〔地〕大和國
添上郡にあり。三笠山の西北部に位
す。

たむげやまじんじや(手向山神社)
〔地〕一名手向山八幡宮と云ふ。大和
國奈良市にあり。縣社にして、應神
天皇、姫神、哀仲天皇、神功皇后を
祭る。天平勝寶二年の創建なり。
たむげれいせん (手向冷泉)〔地〕

羽前國東山郡にあり。明治十二年
の發見にして、泉質酸性泉なり。

たむらいたよざり (田村怡興蔵)
〔人〕舊長州の藩士、明治二十七八年
の役、陸軍歩兵大佐として軍に隨ひ
功あり。功四級に叙せらる。後、陸
軍少將に進み、參謀本部第一部長、
總務部長、東部都督參謀長等に歴任
し、尋で參謀次長たり。明治三十六
年十月歿す。年四十八。

たむらじんじや (田村神社)〔地〕
讃岐國香川郡にあり。國幣中社にし
て、田村神を祭る。

たむらちやうびん (田村長元)〔人〕
丹波國の人。京都千本に住し、御醫
に擢でらる。世に千本典藥と稱せら
る。
たむらのみかど (田邑帝)〔人〕文

徳天皇を申す。

たむらのみささぎ (田邑陵)〔地〕
山城國葛野郡にあり。文徳天皇の御
陵なり。

たむらのありじ (田村皇子)〔人〕
仁明天皇を申す。

たむららんする (田村藍水)〔人〕
名は登、字は玄壺、元雄と稱す。江
戸の名醫なり。最も本草學に長す。
寶曆中、幕府、擧げて、醫官となす。
安永五年三月歿す。著書、甚だ、多
し。

たむいら (探幽)〔人〕狩野守信にお
なり。

たむかいこ (淡海公)〔人〕藤原不
比等におなり。

たむかじま (男鹿嶋)〔地〕播磨國
飾磨郡の西南方にあり。周回二里半

余。

たむらりやくせいさくべん
〔單騎要界製作辨〕〔書〕甲冑をば
め、その他、あらゆる武器の製作に
つきて、諸家の秘法を示し、その利
害、得失を論じたるものなり。伊勢
の人、村井昌弘の編輯したるもの
にして、享保十六年の刊行なり。

たむらざか (國子坂)〔地〕東京市本
郷區にあり。菊の名所として、世に
著はる。

たむらやま (丹澤山)〔地〕相模國
足柄上郡の東北隅に位す。高さ五一
七七尺。

たむざんじんじや (談山神社)〔地〕
一名多武峰神社と稱す。大和國磯城
郡にあり。別格官幣社にして、藤原
鎌足を祭る。延長四年の創建なり。

天下に變災ある時は、神像自ら破裂すべし傳ふ。

たんじやうじ (誕生寺) [地] ①安房國安房郡にあり。日蓮上人の誕生地として名高し。小湊山と號す。法華宗にして、建治二年の創建なり。②美作國久米郡にあり。淨土宗にして、圓光大師誕生の地なり。建久四年、熊谷蓮生の創建する處なり。

たんするか (淡水港) [地] 又、滬尾と云ふ。臺灣嶋臺北市の北方にして、淡水河の河口にあり。港は水淺くして、大船を容るる能はずと雖も、臺北市に通ずるの要衝にあたり、殊に製茶の輸出は、多く此港によるを以て、基隆と共に本嶋北部の要港たり。

たんするかは (淡水川) [地] 「きい

るんかは」にちなむ。

たんするけい (淡水溪) [地] 臺灣嶋南部に於ける第一の大河にして、源を新高山の南方山脈に發し、南流して、諸水を容れ、東港に至りて海に入る。蕃薯寮まで十五里の間舟楫を通ず。

たんちよりざん (丹頂山) [地] 臺灣嶋嘉義の東方にあり。高さ三二〇〇尺。

たんなみ (丹南) [地] 河内國にある市街にして、高木氏の舊藩地なり。

たんねとふぬま (畝間沼) [地] 根室國根室郡にあり。周回七里。

だんのうら (擅浦) [地] ①長門國下之關市擅浦町の海濱を云ふ。壽永三年三月、平氏讃岐の屋嶋に合戦せしと利あらず、退て、引嶋(今の彦島)

藤原爲家の和歌の集なり。

ためいへせんしゆ (爲家千首) [書] 藤原爲家の千首のよみ歌を集めたるもの。

ためながしゆんする (爲永春水)

〔人〕名は貞高、通稱は佐々木正輔、有名なる小説家にして、初め、書賣を業とす。而して、極めて文才あり。文政十年、狂訓亭春水と號し、専ら、人情本を著す。天保十三年、幕府の忌諱に觸るる事あり。絶版を命ぜられ、獄に繋がる。幾もなくして獄中に歿す。

たものひであき (田母野秀顯)

〔人〕陸奥國三春の藩士なり。人となり慷慨にして、勤王の志に富む。明治戊辰、河野廣中(眞二郎)等と斷金隊に投じ、各所に轉戦して功あり。

を保ち、已にして、筑前箱崎に往かんとす。時に、源範頼、大兵を擁して、豊後にあり、且、阿波の豪族、田口重義の義經に降るあり。進退、維谷まりて、茲に、源平最後の決戦をなし、平氏覆滅せし所なり。③讃岐國屋嶋の東方海濱の總稱にして、源平の古戰場なり。

たんばいち (丹波市) [地] 大和國山邊郡の西部にある名邑なり。

たんばやま (丹波山) [地] 甲斐國北都留郡の西北端に位す。高さ二五二尺。

だんりんじつひやくるん (談林十百韻) [書] 宗因の立句を以て、談林風の百韻を集めたるもの。延寶三年成る。

ためいへかしふ (爲家歌集) [書]

ためいへかしふ (爲家歌集) [書]

維新後、三師社を三春町に設け、大に民権論、國會論を主唱す。遂に若松帝政黨のために襲はれ、重傷を蒙るも屈せず、各所に遊説す。後、河野等と内乱の企圖をなし、事露はれて石川嶋の獄に下さる。明治十六年十一月、獄中に歿す。年三十四。

たーやーのーいはや (田谷窟)【地】相模國鎌倉郡にあり。田谷山定泉寺の後園にあり。里長佐藤某、靈夢に感して開鑿せし洞窟にして、長さ三丁余、其天井、壁には佛林、鳥獸、花卉を彫刻して頗る、奇觀たり。

たーらうーらうーらうーらうーざん (太郎浦鑛山)【地】肥前國北松浦郡にあり。石炭を産出す。産出高凡そ二千噸。たーらーがーたび (多良嶽)【地】肥前國藤津郡の西北隅に位す。熾火山に

下流、沓川に入る。

たるーたまーせんーせん (垂玉温泉)【地】肥後國阿蘇郡にあり。古湯、新湯の總稱にして、泉質各塩類泉なり。享保五年の發見たり。

たるーのーたき (樽嶽)【地】土佐國高岡郡東樽山にあり。高さ一〇〇尺、幅二〇尺。

たるーみとーしんーわう (熾仁親王)【人】有柄川熾仁親王の第一の御子なり。人となり、威儀端正にして、大度あり。夙に力を國事に致し、明治中興の元勳たり。孝明天皇、及び、今上天皇に歴事し、陸軍大將、參謀本部長に進む。明治二十七年夏、清國と戦を開くや、奏して、大計を定め、廣嶋に扈從し、日夜、帷幕に侍す。二十八年一月、功を以て、大勳位菊

て、高さ三〇七九尺。

たーらうーくーじま (多羅久嶋)【地】根室國花咲郡の東北方にあり。周回五里余。

たーらうーちーぬーき (足土根記)【書】父母の事を「たらちね」といへることを考證し、且、その語の起原を論定したるもの。若林強齋の著なり。

たーらうーまーしま (多羅間嶋)【地】琉球國古宮の西方にあり。周回三里余。たーらうーをーせんーせん (田良尾温泉)

【地】岩代國岩瀬郡にあり。泉質弱塩類泉なり。

たるーじたーせんーせん (樽下温泉)【地】上野國勢多郡にあり。泉質炭酸泉なり。

たるーたき (多留嶽)【地】伊豫國喜多郡にあり。高さ二四〇尺、幅二〇尺、

花笠頭飾を賜ひ、功二級に叙し、金鷄勳章を賜はる。同月二十四日、病を以て薨す。年六十一。

たるーまへーやま (樽前山)【地】膽振國勇拂郡の西隅に位す。高さ三二〇〇尺。

たるーまーやーこーいち (達磨屋吾一)

【人】本名は岩本伊三郎、無物老人と號す。江戸日本橋の書肆なり。人となり風流を好み、和歌、俳諧等に名あり。慶應四年七月歿す。年五十二。

たるーまーやま (達磨山)【地】伊豆國田方郡の中央西部に位す。高さ三一〇二尺。

たるーみーたき (樽見嶽)【地】能登國寶達山にあり。高さ六〇尺、幅九尺余。

たるーみづーたけ (垂水岳)【地】大隅國

たる。たれ。ちり

垂水町の東南に峙立す。高さ二三六三尺。

たる。るとん。さうし。 (垂井頼宮址)

〔地〕美濃國垂井町にあり。市街の北裏御幸町と稱する地は、即ち、これなり。後光嚴天皇文和三年、南軍に襲はれ、此處に行宮を建て給ひしことありきとぞ。

たれ。がいへ。 (誰家)〔書〕其角三十才の時に、集めたる俳書なり。

ちぢ

ちりし。ないしん。わり。 (疇子内親王)

〔人〕室町院と申す。後堀河天皇の第一皇女にして、寛元元年、三宮に准ぜられ、同四年、尼となる。正安二年五月薨す。年七十三。

ちね。ちか

八四二

ちねほし。しま。 (地大嶋)〔地〕伊豫國の西方にあり。周回一里半。

ちねんじ。 (知恩寺)〔地〕○山城國愛宕郡にあり。俗に百萬遍と云ふ。淨土宗鎮西の一本山たり。建久中、京都に創建す。僧源空の開基なり。○丹後國興謝郡にあり。臨濟宗にして、大同三年、平城天皇勅願に依り建立す。

ちねん。みん。 (智恩院)〔地〕京都市下京區にあり。淨土宗鎮西派の總本寺にして、華頂山大谷寺と號す。建暦元年僧慈鎮、此寺を、僧源空に寄附して栖止せしむ。承安四年開基、吉水禪房と號し、後、今の稱に改む。洛東第一の巨刹にして、近年淨土一宗管長の本所たり。

ちか。あつしん。わり。 (周敦親王)〔人〕

豊宮と稱す。後水尾天皇第五の皇子にして、正保四年、仁和寺に入り、剃髮して承法と云ふ。延寶六年二月薨す。年四十二。

ちか。かたしん。わり。 (周賢親王)〔人〕

玲瓏宮と申す。後水尾天皇第十三の皇子なり。薙髮して、名を尊澄と改め、再度、天台座主となる。元祿七年五月薨す。年四十四。

ちか。たか。しん。わり。 (周翰親王)〔人〕
桃園天皇の猶子なり。天明二年六月、一身、阿闍梨に補せられ、天台座主となる。文化二年八月薨す。年三十八。

ちか。く。 (智覺)〔人〕大甘兵庫と稱す。世々小倉侯に仕ふ。時に藩中國庫洗ふが如し。藩主忠苗大に愛へ、智覺の才を愛し、擢てて國老となりて、

ちか

委ぬるに財政を以てす。智覺感奮日夜精勵、遂に府庫充實す。然れども之がために、多くの怨を買ひ、忠苗侯の歿後、讒せられて獄に繋かれ、遂に獄中に歿す。

ちか。つ。あす。か。のみ。や。 (近飛鳥宮)

〔地〕大和國にありき。顯宗天皇のおはせし宮なり。

ちか。つ。じん。じ。や。 (近津神社)〔地〕

磐城國東白川郡にあり。國幣中社にして、味耜高彥根命を祭り、日本武尊を配祀す。

ちか。の。しま。 (千賀嶋)〔地〕筑前國志賀嶋の別稱なり。

ちか。まつ。とく。ざう。 (近松徳三)〔人〕
通稱は大榭屋藤助、司馬芝叟、又、芝屋徳叟と號す。大坂の人、近松半二の門人にして、有名なる淨瑠璃作

ちか

八四三

者となり。後、狂言作者となり。文
化七年八月歿す。年五十七。

ちかまつはんにし (近松半二) (人)

有名なる大坂の浄瑠璃作者にして、
又、竹本座の立作者となる。天明三
年二月歿す。年九十九。

ちかまつもんざゑもん (近松門
左衛門) (人) 本姓は杉森氏、名は信
盛、葉林子、又、平安堂などの號あ
り。有名なる浄瑠璃作者にして、又、
古學に精し。著す處、靈妙巧緻、能
く、人心を感動せしむ。享保九年十
一月歿す。年七十二。

ちかまつゆきしげ (近松行重) (人)

通稱は勘六、淺野長矩に仕ふ。赤穂
四十七士の一人にして、國難起るの
後、森清介、田口三介等と變名す。
元禄十六年二月死を賜ふ。年三十四。

ちかよししんわり (周慶親王) (人)

六の宮と申す。靈元天皇第五の皇子
にして、薙髮して、曉延と號し、三
たび、天台座主となる。享保三年十
一月薨す。年四十三。

ちからさくらたん (千柄菊旦) (人)

仙右衛門と稱し、觀立庵と號す。江
戸日本橋の人、有名なる茶人なり。
寛政十三年二月歿す。

ちきりりたりかたまる (地形堂堅
丸) (人) 姓は山崎氏、名は春方、又
次郎と稱し、栗園と號す。徳川幕府
の士にして、有名なる狂歌師なり。
傍ら藩に長す。文政六年四月歿す。

ちくら (癡空) (人) 字は慧澄、愚谷
と號す。近江國の高僧なり。比叡山
安樂院に住す。文久二年三月寂す。
年八十三。

ちくごがは (筑後川) (地) 一名千年

川、又、筑紫二郡の稱あり。蓋し、
筑紫二郡とは、利根川の坂東太郎、
吉野川の四國三郎に對しての稱なら
ん。本邦三名河の一。又、九州第一
の巨流にして、其水源二あり。一は
肥後國嶽師岳に發し、一は豊後國直
入、玖珠の二郡境に發し、豊後國日
田郡に到りて合す。筑後、筑前兩國の
間を西流して、筑紫海に注ぐ。流程
三十五里、舟運の便あること二十八
里。

ちくごがはとせんぢやう (筑後
河古戰場) (地) 筑後河の流域、三井
郡をいふ。正平十四年七月、菊池武
光、其子武政等、懷良親王を奉り、
少貳頼尚と激戦したる所なり。

ちくさあん (千種庵) (人) 〇初代。

名は恒海、通稱は山口要助、常陸國
の人、江戸に住す。有名なる狂歌師
なり。文化八年四月歿す。年五十一。

〇二代。姓は勝田氏、雄輔と稱す。
江戸の人。國學、及び、俳諧をよく
し、特に狂歌を以て鳴る。安政五年
二月歿す。年六十八。 〇三代。通稱
は東屋林太郎、磐樹と號す。江戸の
人、青物商を業とす。性讀書を好み、
傍ら、歌、俳諧をよくす。安政七年
三月歿す。年五十。 〇四代。通稱は
佐野恒七、東京の人。書屋を業とす。
性狂歌を好み、遂に斯道の上手とな
り、近代の長と稱せらる。人となり
酒を好み、一度酔ふ時は、平素の寡
言に似ず、大氣焰を吐きて屢々人を
驚かすことありと云ふ。明治三十二
年六月歿す。年六十二。

ちくさありこと (千種有功) (人) 千千廻舎と號す。有名なる歌人なり。安政元年八月歿す。年五十八。

ちくさかは (千種川) (地) 一に千草川に作る。一名啼川、又、中村川と云ふ。播磨國にあり。源を兵庫郡の西北隅に發し、南流して諸水を合せ、赤穂町の東方に至りて海に注ぐ。流程十八里。舟楫を通ずること八里余。

ちくさのはな (千草之花) (書) 高崎正風の編輯。明治十一年、今上天皇北陸東海の二道へ御幸のをり、諸縣に於いて、祝歌、祝詩を奉りたるを、あつめたるもの。

ちくせんくわろせん (筑前嶺山) (地) 一名美徳嶺山と云ふ。筑前國鞍手郡にあり。石炭を産出す。産出高凡そ六萬噸。

ちくせんくわろせん (竺仙公) (人) 來禪子、又、梵仙と號す。支那元の僧。元徳元年六月、我國に歸化す。執權北條高時深く歸依す。曆應四年、南禪寺に住す。貞和四年歿す。年五十七。

ちくせんくわろせん (竺仙公) (人) 竺仙 (筑前國嶺風土記) (書) 風土記に倣ひて、筑前國の事を記述したるものにして、貝原益軒の著なり。

ちくふしま (竹生嶋) (地) 近江國琵琶湖の北部にあり。全嶋岩石を以て成る。周回十九丁、斷崖峭立、神鑿鬼鑿の趣あり。僅かに、東方の小灣によりて舟を入るを得べし。嶋上に都久夫須摩神社、辨天堂、觀音堂あり。本朝五奇異の一なり。傳に云ふ。孝靈天皇四年、江州地拆げ、湖

水初めて溢へ、駿州富士山忽ち出づ。此嶋は景行天皇十年、初めて湧出すと見ゆ。

ちくふしまくわんねん (竹生嶋觀音堂) (地) 近江國竹生嶋にあり。眞言宗にして、一に大神宮寺と號す。天平三年、行基僧正の草創なり。西國巡禮第三十番の札所とす。ちくふしまべんてん (竹生嶋辨天堂) (地) 近江國竹生嶋にあり。辨財天女を祭る。我國三辨財天の一なり。

ちくまがは (筑摩川) (地) 一に千曲川、又、千隈川に作る。信濃國にあり。源を三國山、及び、國師岳に發し、更級郡の東北端に於て、犀川と相會し、更に、越後國に入り、信濃川となる。長さ、水源より海口に至

るまで凡そ百里余、國境迄凡そ六十里余。十九里の間舟運の便あり。ちくりんじ (竹林寺) (地) 〇大坂市西區にあり。淨土宗にして、教譽上人の開基、寛永年間の創建なり。〇土佐國長岡郡にあり。眞言宗にして、神龜元年、聖武天皇の勅を奉りて、僧行基の創建なり。

ちくべん (千軒嶽) (地) 渡嶋國松前郡の中央北部に位す。高さ三三五〇尺。ちくくさき (地獄嶽) (地) 大和國吉野郡にあり。高さ一八〇尺、幅一二尺。

ちくくさきは (地獄谷) (地) 信濃國下高井郡にあり。笛吹地獄、小鍋地獄、鍛冶地獄、紺屋地獄、小便地獄、大地獄等と云ふ。温泉あり。岩石の間、

け噴出す。其響恰も雷の如く、晴天のとき、蒸汽の騰上するこゝ四五丈、煙霧となりて飛散す。甚だ奇観なり。

ちんちんちんちんちん (地獄谷温泉)

【地】一名延命温泉と云ふ。信濃國地獄谷にあり。泉質塩類泉なり。

ちんちんちんちんちん (地獄温泉)

【地】肥後國阿蘇郡にあり。泉質、炭酸泉なり。

ちんちんちんちんちん (地獄嶽) 【地】甲斐國北巨摩郡の南境にあり。高さ八八五七尺。○豊後國日田の西境に位す。高さ三二四〇尺。

ちんちんちんちんちん (地蔵鼻) 【地】駿河國三保崎の別稱なり。

ちんちんちんちんちん (地蔵崎) 【地】○出雲國美保瀨港の東北に斗出するこゝ凡そ十町、國の極東にして、巖崖峙立、

遠敷郡の南端、丹波國北桑田郡境に峙立す。遠敷郡堂本より、丹波國に越ゆる道路あり。

ちんちんちん (地崎) 【地】肥前國彼杵半嶋の北部、虎空藏山の山脚正面に斗出するものを云ふ。西南には呼子嶋あり。

ちんちんちんちん (千里山) 【地】一名嶺山と云ふ。攝津國豐能郡の南部なる山を云ふ。山嶽甚だ峻高ならずと雖も、脉絡三里に亘り、待兼、嶋熊、遷返等著名の峰嶽あり。

ちんちんちんちん (知止小解) 【書】中江藤樹が陽明學の蘊奥を探りて、述べたる知止歌を、門生の解釋したるものなり。

ちんちんちん (地嶋) 【地】○紀伊國加太港口の西北にして、城ヶ崎を距る十八

風濤衝激す。東北十八町にして、地御前嶋、又、十八町にして、沖御前礁あり。○越前國敦賀灣西沿岸南部にあり。東に名子崎あり。共に小崎と相對して、小海湾をなす。

ちんちんちんちん (地蔵堂) 【地】伊勢國關町にあり。九關山と號す。眞言宗にして、天平十三年、僧行基の創建なり。

ちんちんちんちん (地蔵山) 【地】上野國赤城山群峰の一にして、高さ五五六〇尺。

ちんちんちんちんちん (地蔵温泉) 【地】○豊後國直入郡にあり。泉質炭酸泉なり。○同國速見郡にあり。泉質酸性泉なり。

ちんちんちんちんちん (千阪嶺) 【地】一に血阪嶺、又、知阪嶺に作る。若狹國町余にあり。周回一里半。○筑前國北方の海中にあり。周回一里半。

ちんちんちん (智證) 【人】名は圓珍、姓は和氣氏、讃岐の人、弘法大師の外甥にして、延暦寺第五世の座主なり。寛平七年四月寂す。年七十八。延長五年諡を智證大師と賜ふ。

ちんちんちんちん (知勝院) 【地】美濃國本巢郡にあり。曹洞宗にして、寛文元年、知勝院悟心理省尼(徳川家康の妹、松平忠光の母)の冥福を修めん爲に創建す。鐵心和尙の開山なり。

ちんちんちんちんちん (持世寺鑛泉) 【地】長門國厚狹郡にあり。延寶以前の發見にして、泉質單純泉なり。

ちんちんちんちんちん (千世宇志鑛泉) 【地】千嶋國紗那郡にあり。泉質硫黄泉なり。

ちしせき (知石)〔人〕鈴鹿才松堂と號す。京都の人、有名なる俳人なり。

ちしあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちししま (父嶋)〔地〕小笠原群嶋三主嶋の一にして、一を母嶋、一を聲嶋と云ふ。最南には火山列嶋あり。文祿年中、小笠原貞頼の發見する處にして、東京を距る五百三十六裡にあり。周回凡そ拾五里。小笠原嶋廳を置く。

ちしはなだ (千千岩灘)〔地〕一に千千輪に作る。肥前國嶋原半嶋の西海面、及び、北高來郡の南海面を云ふ。南は天草灘に連る。

ちしはなだ (千千岩灘)〔地〕一に千千輪に作る。肥前國嶋原半嶋の西海面、及び、北高來郡の南海面を云ふ。南は天草灘に連る。

ちしはなだ (千千岩灘)〔地〕一に千千輪に作る。肥前國嶋原半嶋の西海面、及び、北高來郡の南海面を云ふ。南は天草灘に連る。

ちしはなだ (千千岩灘)〔地〕一に千千輪に作る。肥前國嶋原半嶋の西海面、及び、北高來郡の南海面を云ふ。南は天草灘に連る。

ちしはなだ (千千岩灘)〔地〕一に千千輪に作る。肥前國嶋原半嶋の西海面、及び、北高來郡の南海面を云ふ。南は天草灘に連る。

ちしはなだ (千千岩灘)〔地〕一に千千輪に作る。肥前國嶋原半嶋の西海面、及び、北高來郡の南海面を云ふ。南は天草灘に連る。

ちしはなだ (千千岩灘)〔地〕一に千千輪に作る。肥前國嶋原半嶋の西海面、及び、北高來郡の南海面を云ふ。南は天草灘に連る。

らに殺さる。年五十二。

ちしあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちしはなだ (千千岩灘)〔地〕一に千千輪に作る。肥前國嶋原半嶋の西海面、及び、北高來郡の南海面を云ふ。南は天草灘に連る。

ちしはなだ (千千岩灘)〔地〕一に千千輪に作る。肥前國嶋原半嶋の西海面、及び、北高來郡の南海面を云ふ。南は天草灘に連る。

ちしはなだ (千千岩灘)〔地〕一に千千輪に作る。肥前國嶋原半嶋の西海面、及び、北高來郡の南海面を云ふ。南は天草灘に連る。

ちしはなだ (千千岩灘)〔地〕一に千千輪に作る。肥前國嶋原半嶋の西海面、及び、北高來郡の南海面を云ふ。南は天草灘に連る。

ちしはなだ (千千岩灘)〔地〕一に千千輪に作る。肥前國嶋原半嶋の西海面、及び、北高來郡の南海面を云ふ。南は天草灘に連る。

ちしはなだ (千千岩灘)〔地〕一に千千輪に作る。肥前國嶋原半嶋の西海面、及び、北高來郡の南海面を云ふ。南は天草灘に連る。

ちしはなだ (千千岩灘)〔地〕一に千千輪に作る。肥前國嶋原半嶋の西海面、及び、北高來郡の南海面を云ふ。南は天草灘に連る。

〔地〕北見國斜里郡にあり。硫黄を産す。

ちち。ちつ。ちと

ちちふじんじや (秩交神社)〔地〕武藏大宮町にあり。縣社にして、思兼神、知々夫彦命を祭る。崇神天皇御宇の創建なり。

ちちふしやうじ (秩父庄司)〔人〕島山重忠を云ふ。

ちちふやま (秩父山)〔地〕武藏國武甲山の別稱なり。

ちちみさき (千千見崎)〔地〕肥前國福江嶋北沿岸、京嶽の山脚海に斗出したる處を云ふ。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちちあて (知足)〔人〕姓は千代倉氏、勘左衛門と稱す。尾張國鳴海の人、有名なる俳人なり。寛永元年四月歿す。年六十六。

ちぬのいみよし (茅渚宮址)〔地〕和泉國泉南郡にあり。土俗に衣通姫の手習所と云ひ、享保の頃迄小祠ありしも、後、泯滅す。此宮は、衣通姫及び、元明女皇の離宮にて、當時宮監を置き、郡務を兼掌せしめられたり。又、東方日根野村に日根行宮址あり。

ちば (千葉)〔地〕下総國千葉郡の南部西海濱にある市街にして、古へ千葉氏累代の城市たりき。今、千葉縣廳の所在地なり。

ちばちんか (千葉芸閣)〔人〕名は支之、字は子支、茂右衛門と稱す。江戸の儒者なり。寶曆中、古河侯の儒官となり、世子の侍讀に擧げらる。後、讒に遇ひて致仕す。最も講説に秀づ。世稱して大家と云ふ。寛政四

功臣第一に位す。建仁元年歿す。年八十四。

ちばでら (千葉寺)〔地〕下総國千葉町にあり。海上觀音院と號す。坂東巡禮第二十九番の札所にして、寺域幽邃櫻樹多し。

ちばみつたね (千葉光忠)〔人〕三耶兵衛と稱す。後、姓名を變て、原之介と云ふ。淺野長矩の遺臣にして、赤穂四十七士の一人たり。元祿十六年二月死を賜ふ。年五十一。

ちばじやうし (千早城址)〔地〕河内國金剛山の半腹にあり。四面溪谷に臨み、東南の一路、僅に、山頂に達すべし。元弘二年楠正成の築きし所にして、河内十七城の根城と稱せられき。正成千余人を以て、この城に據るや、高時、八十萬の精銳を

年十一月歿す。年六十六。

ちばから (千葉港)〔地〕下総國千葉町の海濱を云ふ。東京灣に瀕す。交通頻繁、海運便なり。

ちばしうさく (千葉周作)〔人〕字は成政、陸前國の人にして、江戸に住す。近世、有名なる劍客にして、北辰一刀流の祖なり。安政二年十二月歿す。年六十三。

ちばじんじや (千葉神社)〔地〕下総國千葉町にあり。縣社にして、天御中主神を祭る。長保二年の創建なり。

ちばつねたね (千葉常胤)〔人〕下総國の人にして、關東の名族なり。治承四年源頼朝の兵を擧ぐるや、舉族之に屬し、各地の戦に功あり。深く、頼朝の信任する所となり、又、

集め、百方これを攻めしかども、終に抜く能はざりき。元中七年、足利義滿の將畠山義深のために、攻陥せらる。今尙、醜壁の址を存す。

ちばたうび (千早嶺)〔地〕河内國南河内郡の東南部に位し、大和國に跨る。

ちひろのたき (千尋瀑)〔地〕○越後國岩船郡にあり。高さ五〇〇尺、幅三尺。下流荒川に注ぐ。○大和國吉野郡にあり。高さ九〇〇尺、幅一五尺。北山川に注ぐ。○伊勢國多氣郡にあり。宮川の水源にして、土地峻險、人跡到らず。

ちひろのはま (千尋濱)〔地〕○一に千里濱と云ふ。紀伊國日高郡の海濱十數町の間稱なり。○伊勢國二見浦以東、志摩國小濱港迄の沿岸の

總稱なり。此邊海底の深遠なるを以てならん。

ぢふくじ (持福寺) [地] 周防國玖珂郡にあり。桓武天皇の御宇、傳教大師の創建なり。境内閑雅幽邃を以て名あり。

ぢふりしま (知夫里嶋) [地] 隱岐國嶋前の一にして、西北一海峡を隔てて、西嶋と相對す。周回七里弱。(中嶋、西嶋、及び、本嶋の三嶋を嶋前と稱す)。

ぢふりあん (知夫里灣) [地] 隱岐國知夫里嶋の南沿岸にあり。淺嶋、神嶋、嶋津嶋等によりて擁せらる。灣内廣からざれども、漁船の往來甚だ多し。

ぢみやうゐん (持明院) [人] 後深草天皇を申す。

清三郎と稱す。六樹園雅望の男にして、有名なる狂歌師なり。人となり大酒を好み、常に花街に遊興せり。天保十五年四月歿す。

ちんびんびん (陳元贊) [人] 明の歸化人にして、字は義都、既白山人と號す。天正五年、國難を避けて、我邦に歸化し、尾張侯に客たり。詩、及び、書に堪能なり。又、初めて、拳法を傳ふ。寛文十一年六月歿す。年八十五。

ちんざうじ (珍藏寺) [地] 羽前國東置賜郡にあり。鶴布山と號す。寛正元年創建す。

ちんじゆふし (鎮守府址) [地] 陸中國膽澤郡にある鎮守府八幡宮の境内に即ち其舊址なり。延暦二十一年坂上田村麿をして、始めて此に城を

ぢみやうゐんし (持明院址) [地] 京都市上京區安樂小路町にあり。光照院は其舊地とす。元、藤原基頼の邸宅たり。堀河天皇の康和中、廊内に持佛堂を建てて持明院と號す。後、高倉天皇皇子守貞親王の寄宿所となり、又、後嵯峨天皇以來、代々の仙居となる。文和二年二月、殿宇焼失して仙洞廢せり。當時、持明院宮と稱せり。

ぢむどろ (金武洞) [地] 琉球國國頭郡金武山下にして、俗に觀音洞と名く。洞壁は石灰石より成り、洞中暗黒にして、咫尺を辨せず。入るものは必ず炬火を携ふ。長さ五六丁、幅八間、高さ六間。

ぢんぐわいろうきよすみ (塵外樓清澄) [人] 本姓は石川氏、字は芝之

築かじめ、之を膽澤城と稱せり。弘仁三年、城を廢し、府を置きて初めて鎮守府と稱す。八幡宮の附近方八町の許の間は、昔時常備團兵五千人を置きし處と云ふ。

ちんせい (鎮西) [地] 九州の古稱なり。ちんせい (鎮西八郎) [人] 源為朝におなり。

ちんせいゆみはりづき (椿説弓張月) [書] 源為朝の事蹟を基礎として、結構したる小説にして、曲亭馬琴の著なり。

ちんたのたき (洗附瀑) [地] 豊後國大野郡にあり。高さ一〇〇尺、幅三六〇尺。直下十三條に分る。其中雌洗附瀑は、矢田川、田代川と合して、また、瀑をなす。高さ六〇尺、

幅八〇尺。

ちんちよりん (塵塚談) [書] 小川顯道の隨筆なり。諸般のこゝを記す。

ちんてんあいなりせり (塵添埃蕪抄) [書] 世俗の言語の出所、及び、俗間の古事を記述したるものにして著者詳ならず。

ちんぼくわろせん (陣場鑛泉) [地] 上野國碓氷郡にあり。泉質弱塩類泉なり。

ちんばちやま (陣鉢山) [地] 因幡國八頭郡の東北隅に位す。高さ二二九〇尺。

ちんばせんせん (陣場温泉) [地] 羽後國北秋田郡にあり。大湯、澤の湯、下内澤湯の總稱にして、泉質各硫黄泉なり。正徳以前の發見なりと

ちんちりきんせん (長久寺) [地] 尾張國名古屋市にあり。眞言宗にして、慶長六年、松平忠吉創建、僧重徹の開基なり。◎越中國西礪波郡にあり。曹洞宗にして、總持寺開祖瑩山二十五徹の内天叟和尚開山、寛永二年、舊領主前田利家の三男高島石見守の創建、當時長久院と號せしが、後世寺號に改む。明治十一年、今上陛下北陸御巡幸の際、御休憩所に充てさせらる。◎豊前國下毛郡にあり。眞宗にして、天正十六年、黒田長政福嶋を攻めし時、其城主佐渡守降参して僧となり、教如上人によりて此寺を創建す云ふ。

云ふ。

ちめいさ (知命記) [書] 哲理を説きたるものにして、中村成昌の著なり。知命は、五十知天命の謂にして、成昌の五十歳の時の作なり。

ちめりあ (丈阿) [人] 觀水堂と號す。有名なる江戸の戯作者にして、草双紙に戯名を署すること、此人に始まる云ふ。明和年中の人なり。

ちめりいら (長祐) [人] 長次郎と稱す。支那の歸化人宗慶の子なり、父の業を繼ぎて、陶器を製造す。曾て、茶家の宗匠たる千利休の意匠を用ひて、茶器を製し、大に、時機に投ず。樂焼の祖なり。天正頃の人。ちめりい (長英) [人] 高野長英におなり。

ちめりい (長榮寺) [地] 河内國

ちめりきんせん (定義温泉) [地] 陸前國宮城郡にあり。慶長、元和以前の發見なりと云ひ、泉質強類泉なり。

ちめりわんきん (貞觀格式) [書] 貞觀十三年に、奏進したる格式にして、右大臣氏宗の撰なり。

ちめりわんせい (貞觀政要) [書] 唐の太宗貞觀の政事を記したるものにして、唐吳兢の著なり。

ちめりけい (長慶天皇) [人] 御名は寛成、後村上天皇第一の皇子にして、人皇第九十八代の天皇たり。在位五年(紀元二〇二九-二〇三三)にして崩す。壽五十二。

ちめりけい (長慶天皇行宮址) [地] 陸奥國三戸郡名久井嶽の牛腹にあり。南北朝

の頃、八戸氏、長慶天皇を名久井の深山に奉じて恢復を謀る。新田、結城等の諸族之を聞き、奥州に下るもの三十餘名、其裔八戸氏に仕へ、或は他に轉せり。獨り佐藤春松と云ふもの此地に留まり、陵の香花を掌り、世々農夫たりしと云ふ。

ちやうびつしやまゆみ (張月舎眞弓) (人) 本姓は關口氏、勝馬と云ふ。有名なる東京の狂歌師なり。明治十六年十二月歿す。年七十二。

ちやうこくじ (長谷寺) (地) 〇東京市麻布區にあり。曹洞宗にして、江戸檀林の一なり。初め、龍雲院と號し。赤阪溜池にありしを、天正十二年此地に移せり。門庵和尚の開山なり。〇信濃國更級郡にあり。眞言宗にして、舒明天皇御宇、自助翁開基

眞海上人の中興なり。〇伯耆國倉吉町にあり。天台宗にして、養老五年草創、法道上人の開基なり。

ちやうこくじ (長國寺) (地) 美濃國犬井町にあり。曹洞宗にして、僧榮慶草創、僧體岩の開基なり。

ちやうこんか (長恨歌) (書) 唐の玄宗皇帝の、寵妃楊貴を失ひたる時の情を叙べたる詩篇にして、白樂天の著なり。

ちやうさう (丈草) (人) 俗稱は内藤林右衛門、尾張國の人にして、有名なる俳僧なり。元祿十七年二月歿す。年四十五。

ちやうざん (丈山) (人) 石川丈山におなし。ちやうざん (定山) (地) 石狩國札幌郡にあり。泉温泉

質鹽類泉なり。明治二年の發見なり。ちやうしういさう (長秋詠藻) (書) 藤原俊成の和歌を集めたる書。

ちやうがはら (長者原) (地) 〇伊豆國田方郡浮橋村外七箇簗村に亘る。東西二十町、南北一里余。〇出雲國大原、八束、能義の三郡に亘れる廣野なり。

ちやうくわろざん (長者嶺山) (地) 肥前國西松浦郡にあり。石炭を産出す。産出高凡そ二万噸。

ちやうくわろざん (長者原嶺) (地) 筑前國糟屋郡にあり。石炭を産出す。産出高凡そ七千噸。

ちやうばらざん (長者原崎) (地) 一名八幡崎と稱す。壹岐國壹岐郡の東方にありて立界灘に臨めり。

ちやうまさよし (丁字園雅) (地) 一名八幡崎と稱す。壹岐國壹岐郡の東方にありて立界灘に臨めり。

好) (人) 通稱は伊東昇吉、江戸の人にして、法衣庵を業とす。有名なる狂歌師なり。明治三十二年四月歿す。年六十一。

ちやうやま (茶白山) (地) 〇下野國那須郡の北部に位す。高さ六三〇尺。〇河内國北河内郡の東南部にあり。山の半腹には龍王寺あり。俗に茶白山觀音と云ふものこれなり。

〇大坂市の東南部に於て、茶白山町に屬す。一に茶密山に作り、一名勝山と云ふ。縹樹鬱然たる一丘岡にして、慶長の役、徳川家康の營所たり。山麓には舊塚の址あり。〇三河國南設樂郡の南部に位す。高さ二〇〇〇尺。

ちやうせん (長泉院) (地) 〇相模國足柄上郡にあり。禪宗にして、

文明二年、大森信濃守再建、太寧和尚の開山なり。◎武藏國荏原郡目黒にあり。浄土宗にして、寶曆年間、僧千如等、其師成譽上人の遺志を繼ぎ建立せり。

ちやうりーかーべーくひーちか (長曾我部國親) (人) 姓は秦氏、其先は秦始皇帝より出づ。土佐の人、小字は千王、元親の父なり。幼にして、父兼序、本山、吉良、大平等のために謀殺せられ、城陷る。遁れて國司一條房家に鞠養せられ、近侍たり。後、舊領を復し、四隣を征復し、雄名甚だ高し。晩年本山氏と兵を構へ、決戦せずして歿す。年五十四。

ちやうりーかーべーもとーちか (長曾我部元親) (人) 初め、彌三郎と稱し。宮内少輔と云ふ。驍勇にして、深謀

あり。父、國親、長濱を攻め、暴に卒す。士卒迷惘して、歸る。元親時に年十八、直ちに馳せ至りて、長濱城を抜く。爾後、連年兵を出して、四國を平定し、威を四國、中國に振ふ。天正十三年、豊臣秀吉に征討せられ、遂に、降る。土佐守となり、征韓の役に従ひて、大功あり。慶長四年五月歿す。年六十一。

ちやうりーづーまるーずるーひつ (長頭丸隨筆) (書) 和歌連歌に關したることを記したる隨筆にして、松永貞徳の著なり。

ちやうりーてう (定朝) (人) 京都七條の人にして、有名なる佛工なり。治安年中、京都法成寺の佛像を刻して、後一條天皇の敕感に入り、法橋に叙せらる。佛工を僧官に叙すること、

さ二二八〇尺。

此時に始まること云ふ。
ちやうりーのうーしふ (長能集) (書) 藤原長能の和歌を集めたるものなり。

ちやうりーばいーをわい (長梅外) (人) 名は允文、字は世文、豊後國日田の人、長三洲の父にして、有名なる儒者なり。維新前、二子と共に、尊王説を唱へ、大に成すあらんこと。遂に幕府の忌諱に觸れ、二子共に捕はる。梅外遁れて長州に入る。藩主聘して、賓師となし、藩學を督せしむ。維新後、東京に住し、學生を教授す。明治十八年、陛下伊藤博文の邸に幸するや、召されて書を御前に作り、恩賞を蒙れり。同年十月歿す。年七十六。

ちやうりーはうーじーやま (長寶寺山) (地) 周防國玖珂郡の東南部に峙立す。高

ちやうりーはちーだき (長八瀬) (地) 羽後國河邊郡にあり。岩見川の水源にして、高さ一〇〇尺余、幅一〇尺。

ちやうりーふ (長府) (地) 長門國豊浦の別稱なり。

ちやうりーふくーじ (長福寺) (地) ◎山城國葛野郡にあり。臨濟宗にして、仁安二年、眞理尼草創、後、普光大幢國師重興開山して大梅山と號し、足利尊氏の時、禪刹十寺の一に列せり。◎三河國赤阪町にあり。浄土宗にして、三頭山と號す。長保年間、當國の長者宮地彌太次郎の創建、惠心僧都の開山なり。

ちやうりーはうーかいーけふ (長豊海峽) (地) 一名馬關海峽と云ふ。長門國下關と、豊前國門司との間を云ふ。東

門には早瀬瀬戸あり。

ちやうぼりじ (長保寺) [地] 紀伊國

海草郡にあり、眞言宗の古刹にして、

一條天皇の勅願に依り、長保二年、

七堂伽藍創建、慈覺大師法孫、二品

親王沙彌、性空大和尚の開基なり。

ちやうめいかしふ (長明家集) [書]

鴨長明の歌の集なり。

ちやうめいじ (長命寺) [地] 近江

國奥嶋にあり。天台宗にして、豊聰

太子の開基なり。西國巡禮第三十一

番の札所なり。◎岩代國若松市にあ

り。眞宗大谷派にして、慶長十年、

僧光壽の開基なり。

ちやうめいひやくしゆ (長明百首)

【書】鴨長明が詠める百首の歌を集め

たるもの。

ちやうめいみつじ (長命密寺) [地]

武藏國北豐嶋郡にあり。俗に東高野

山と號す。眞言宗にして、慶安四年、

慶算阿闍梨の開基創建なり。

ちやうめいむみやうせう (長明無

名抄) [書] 鴨長明の和歌を集めたる

ものなり。

ちやうめうじ (頂妙寺) [地] 京都市

上京區にあり。法華宗にして、寶徳

元年、細川勝益創建、僧日祝の開基

なり。

ちやうもじ (長母寺) [地] 尾張國西

春日井郡にあり。禪宗臨濟派にして、

治承三年、山田重忠創建、當時天台

宗に屬せり。弘長三年、無住國師來

錫して今宗に改む。

ちやうらくじ (長樂寺) [地] 〇京都

市下京區にあり。延暦年間、桓武天

皇草創、傳教大師を以て、開基させ

たり。當時、天台宗なりしが、後、時

宗に改む。西國巡禮第十五番の札所

なり。◎上野國新田郡にあり。天台

宗にして、榮朝禪師の開基、後鳥羽

天皇の勅願所なり。◎周防國玖珂郡

彌山の絶頂にあり。黄檗宗にして、

享保年中、仰宗禪師の開山たり。古

來、靈場として名高く、風景亦佳な

り。◎下総國印旛郡にあり。雲冷

山寶泉院と號す。眞言宗にして、慈

覺大師の開基なり。

ちやうろじ (長瀧寺) [地] 美濃國

郡上郡にあり。天台宗にして、安置

の四天王は、皆運慶の作なりと云ふ。

ちやうしきとびつせう (茶式湖月抄)

【書】茶道具の製作、庭の構造等につ

きて、詳密に解説したるもの。湖月

老隱の編纂なり。

ちやちやたけ (爺嶽) [地] 千嶋國國

後嶋の東北部に位す。噴火山にして、

高さ五三〇〇尺。

ちやばんきやうびんはやがてん

(茶番狂言早合點) [書] 式亭三馬の著

作。雑書なり。

ちやんぼら (鐘鼓洞) [地] 常陸

國大津町の海濱にあり。往昔は、巨

浪常に洞口に激して、音響を發せし

を以て此名あり。古來、龍神の住居

とて入るものなかりしが、近年村民

某洞内を検せしに、中に井に似たる

穴ありて、其深さ測るべからず。

ちゆうあいてんあう (仲哀天皇)

【人】御名は足仲彦、日本武尊の御子

にして、入皇第十四代の天皇たり。

在位九年(紀元八五二―八六〇)にし

て崩す。壽五十二。

ちゆうりーいりーき (中右記)〔書〕堀河天皇の寛治元年より、崇徳天皇の保元元年迄の事を記したるものにして、藤原宗忠の記録なり。

ちゆうりーかい (中海)〔地〕一に、なかの海、又、錦の海と云ふ。伯耆の夜見ヶ濱に、嶋根半嶋に由りて包まれ、内は大根嶋、及び、江嶋の二嶋あり、半淡、半鹹の湖水にして、貝類、鰻、鰯、鯖、章魚等を産す。周回十六里余。

ちゆうりーかーじつろく (中家實録)〔書〕天文、地象其他事物の稱、及び、音訓を正したるものにして、著者詳ならず。

ちゆうりーきーづかーのひ (忠義塚碑)〔地〕播磨國赤穂町にあり。寛永年間、の建設に屬し、文は藤江忠庵の撰たり。

す。眞言宗にして、用明天皇の御宇

聖徳太子の創建なり。西國巡禮第二十四番の札所なり。○若狭國大飯郡にあり。眞言古義派にして、養老三年、泰澄大師開創、本尊は馬頭觀音なり。

ちゆうりーじ (忠次)〔人〕世に國定忠次と稱す。上野國定村の人、豪勇にして、機智あり。二十七歳の時、人を殺して、博徒河越榮五郎に投ず。遂に博徒となる。來り屬するもの多し。人となり、任俠、天保中、其名海内に鳴れり。後、抜刀して大度關を過ぎたる科により、捕へられて磔殺せらる。

ちゆうりーしんーむら (忠臣蔵)〔書〕播州赤穂の遺臣大石良雄以下四十七士の復讐の事蹟を詳記したるものにして

り。元祿十五年十二月十四日、大石良雄以下四十七士、主君長矩の仇を報したる顛末を記す。又、傍に淺野長矩、及び、義士の墓あり。

ちゆうりーきよーてんーわら (仲恭天皇)〔人〕御名は懷成、順徳天皇の皇子にして、人皇第八十五代の天皇たり。在位僅かに七十餘日(紀元一八八一)にして、文曆元年五月崩す。壽十七。

ちゆうりーとく (中國)〔地〕山陰道と山陽道との總稱なり。

ちゆうりーとくーかいーだろ (中國街道)〔地〕長門國下之關南に起り、攝津國大坂市に終る。此間百四十餘里。

ちゆうりーさんーとく (中山國)〔地〕琉球國の別稱なり。

ちゆうりーさんーじ (中山寺)〔地〕○攝津國河邊郡にあり。「なかでら」とも稱す。著者詳ならず。

ちゆうりーしんーころ (忠心公)〔人〕藤原良房の諡なり。

ちゆうりーじやうーひめ (中將姫)〔人〕右大臣横佩豐成の女なり。長谷觀音に祈りて生れたりと云ふ。生れて一歳、筆を採り、歌を書して、曰く、「初瀬寺救世の誓を現して女も法の國にむかへん」と、人大に驚く。長じて禁中に仕ふ。繼母某に惡まれ、遁れて雲雀山中に潛む。寶龜元年、遂に當麻寺に入りて落髮し、善心尼と號し、後、妙法と改む。天應元年三月歿す。年二十九。

ちゆうりーしよーわり (中書王)〔人〕醍醐天皇の皇子にして、兼明親王と申す。源の姓を賜はりて、御子左と稱す。博學非凡にして、才名一時に冠たり。

永延元年九月薨す。

ちゆりーせんじーと (中禪寺湖) [地] 一名南湖と云ふ。下野國日光山中にあり。周回八里。晚今、湖中に魚を放ち、頗る蕃殖せり。華嚴瀑の水源なり。

ちゆりーせんじーやま (中禪寺山) [地] 下野國黒髪山の別稱なり。

ちゆりーせんじーせん (中禪寺温泉) [地] 下野國日光山寺にあり。

ちゆりーあんじ (中尊寺) [地] 陸中國西磐井郡にあり。天台宗にして、嘉祥三年、慈覺大師の開基なり。寺城宏壯にして、奥羽地方無比の一大古刹なり。

ちゆりーたいの (中臺野) [地] 丹波國船井郡にあり。東西十八町余。今は田圃村落となれり。

す。後奈良天皇に仕へて、侍従たり。後、聖旨に違ひて、丹後國に出奔し、細川幽齋につきて、歌道を學び、遂に、其奥旨を究む。慶長四年、許され、京都に遷り、同十五年三月歿す。年五十三。

ちゆりーあんみちみ (中院通躬) [人] 通茂の子にして、累進して右大臣に至る。家世々和歌をよくし、兼て、令徳の聞えあり。又、畫をよくす。元文四年十二月歿す。年七十二。正徳五年、播州曾根松の記を書して、之を廟前に奉納せり。

ちよ (千代) [人] 姓は福嶋氏、晩年尼となりて、素因と號す。加賀國の人にして、有名なる俳人なり。又、畫を好みて、特に、百合を畫くに妙を得たりと云ふ。安永四年九月歿す。

ちゆりーでりーとーでんじ (中條小傳次) [人] 慶長中、弟半九郎と共に分部侯に仕へ、關原其他の諸役に従ひ、兄弟共に勇名あり。人稱して鬼小傳次と云へり。

ちゆりーでりーひやうとーのすけ (中條兵庫介) [人] 名は長秀、鎌倉の人にして、有名なる劍客なり。中條流劍術の祖なり。

ちゆりーぶーしよーたう (中部諸嶋) [地] 琉球の北部に位する群嶋の總稱なり。ちゆりーべつがは (忠別川) [地] 石狩國上川郡にあり。源を大雪山に發し、西北流して、石狩川に合す。長さ十八里。上流十里の間、鮭、鱒の類沂遊せり。

ちゆりーあんみちかつ (中院通勝) [人] 也足軒と號し、晩年、素然と稱

年七十四。

ちよらーゆつ (澄月) [人] 醉夢菴、又、醉雪軒と號す。備中國の人にして、有名なる歌僧なり。後、京都に住して専ら、學生を教授せり。京都和歌四天王の一人たり。寛政十一年五月寂す。年八十五。

ちよらーびん (重源) [人] 姓は紀氏、有名なる高僧にして、又、醫術に妙あり。仁安年中、宋に遊びて、大に、得る處ありて歸朝す。偶々、東大寺火災に遇ふ。六條天皇の勅を奉じて、諸國を勸化し、十年にして、工成る。天皇、百官を率ゐて、寺に幸し、之を慶せらる。元文二年六月寂す。年八十六。

ちよらーたう (鳥嶋) [地] 澎湖列嶋中白沙嶋の北嶋にあり。周回凡そ五里

余。

ちよりへんねりへんき (重篤應仁記) [書] 應仁亂より、織田信長の足利義昭を京都に遷住せしむる迄の事蹟を記したるものなり。

ちよくせんさくしやぶるる (勅撰作者部類) [書] 古今集より、新千載集に至る迄の、作者の官位、世系等を記したるものなり。

ちよくせんあまん (勅撰和訓) [書] 事物の名稱を漢字にて書き、之に和訓を施したるものなり。

ちよざき (千代崎) [地] 相模國三浦郡の東海岸、浦賀港の東南に斗出し、嶋崎と共に、港口を扼して、浦賀海峡に臨めり。

ちよざくらだらいつせきばなし (著作堂一夕話) [書] 古人の傳記、莖

誌、奇説を記したるもの。曲亭馬琴の編著。

ちよのたき (千代瀑) [地] 阿波國三好郡にあり。二層となりて落下す。上層高さ一〇〇尺、下層八〇尺、幅各一八尺。下流吉野川に入る。

ちよのためし (千代の例) [書] 徳川家康將軍宣下の儀式を記して、その儀式の故實義解を作りしもの。作者詳ならず。

ちよのまつばら (千代松原) [地] 筑前國糟屋郡の海濱にあり。白砂里餘、小松叢立す。多々良濱、箱崎八幡等の古蹟名勝あり。風景最も佳なり。

ちよらうたき (女郎瀑) [地] 加賀國江沼郡千束瀑の上流にあり。高さ一二〇尺、幅一〇尺。

ちよりやう (櫻良) [人] 通稱は三浦勘兵衛、別に、無爲菴と號す。伊勢國の人にして、有名なる俳人なり。

安永五年五月歿す。

ちりつ (知立) [地] 三河國碧海郡の西北部に位し、東海道五十三次の一驛たる名邑なり。舊、池鯉鮒と稱せしを、町村制實施の際今の字に改めたり。

ちりつじんじや (知立神社) [地] 三河國知立町にあり。縣社にして、吉備武彦命を祭る。仲哀天皇元年の創建なり。

ちりつふのぼりやま (散粒登山) [地] 千嶋國紗那郡の中央北端に峙立す。高さ五〇三九尺。

ちりんしま (知林嶋) [地] 薩摩國東南方の海中にあり。周回一里弱。

ちよ。ちり

ちり。ちろ。ちろ

八六九

ちりやま (塵山) [地] 駿河國富士の山の別稱なり。

ちちがた (千路湯) [地] 又、千路沼とも云ふ。能登國羽咋湯の別稱なり。

ちちいづのかみ (智恵伊豆守) [人] 松平信綱の異稱なり。

ちちくわらん (智慧光院) [地] 京都市下京區にあり。淨土宗にして、攝政鷹司家の由緒寺なるを以て著はる。藤原兼平の創建、僧如一の開基なり。

ちちのないし (知恵内子) [人] 狂歌師元奎綱の妻なり。狂歌をよくし、夫妻共に著はる。文化四年六月、夫に先つて歿す。

つ

つ (津) [地] 又、安濃津とも云ふ。伊勢國にある市街にして、藤堂氏の舊藩地にして、三重縣廳の所在地なり。
 つらくわん (通観) [人] 萬葉集中の一人にして、天平勝寶の頃、和歌を以て其名を知られたる僧なり。
 つらと (通語) [書] 保元元年より、南北朝の際迄の治亂興敗を記述したるものなり。
 つらししま (通詞嶋) [地] 肥後國天草下嶋の北方にあり。周回一里許。
 つらちぢべ (津打治兵衛) [人] 幼名は治三郎、英子と號す。大坂の人にして、江戸狂言作者の祖なり。寶曆十年正月歿す。年七十八。

つらてんけり (通天橋) [地] 京都市下京區東福寺の境内にあり。古來、紅葉の勝を以て名高し。現在の橋は慶長年間の架設に係る。
 つらてんのたき (通天瀑) [地] 一名紅葉瀑と云ふ。筑前國早良郡にあり。高さ八五尺、幅二五尺。下流早良川に入る。雨後水漲る時は、福岡より遠望するを得べし。
 つらほふじ (通法寺) [地] 河内國南河内郡にあり。一に壺井寺と稱す。眞言宗にして、長久四年、源頼義創建、寺中に源氏三代の墓あり。
 つらやうもん (通陽門院) [人] 藤原殿子におなし。
 つかり (津港) [地] 伊勢國津市贊崎町の前面にある贊崎港の別稱なり。
 つかさき (柄崎温泉) [地]

一名武雄温泉と云ふ。肥前國杵嶋郡にあり。泉質炭酸泉なり。
 つかたきよ (塚田旭嶺) [人] 名は行宣、字は延美、梅翁と稱す。信濃國の人、室鳩巢、新井白石、雨森芳洲等に學び、博覽強記、名高き儒者となれり。明和四年歿す。年七十。

和歌に長し、兼れて武技に達す、享和元年十二月歿す。年七十五。
 つかのき (繼鹿尾山) [地] 尾張國丹羽郡の東北境にあり。高さ三三四〇尺。國中第一の高嶺なり。
 つかはら (塚原鑛山) [地] 豊後國速見郡にあり。硫黄を産出す。製出高凡そ一万二千斤。

つかてい (都賀庭鐘) [人] 字は公啓、大江漁人、又、千路行者と號す。浪華の人、博學を以て著はる。寛延の頃、賣卜を業とし、狂詩選、大江漁唱、繁々夜話等の著あり。寛政中歿す。
 つかね (津金胤臣) [人] 字は子隣、文左衛門と稱し、鷗洲、又、默齋と號す。名古屋藩の世臣にして、熱田奉行たり。博學にして、

つかはら (塚原野) [地] 越前國荒嶋嶽の西北にあり。東西五里半余、南北五里余。
 つかはら (塚原卜傳) [人] 常陸國塚原の人にして、有名なる劍客なり。初め、飯篠長意に學び、後、上泉伊勢に學び、劍を杖いて、諸國を漫遊し、自ら一派をなして、無手勝流と云ふ。嘗て、京都に入る時、將軍足利義輝延ひて其術を試み、大

に喜びて業を受けたりと云ふ。天文
天正頃の人なり。

つかまじんじや (筑摩神社) [地]
信濃國松本町にあり。縣社にして、
應神天皇、神功皇后、田心姫、湍津
姫、市杵嶋姫を祭る。

つかん (通鑑) [書] 支那戰國より、
五代までの間の歴史にして、宋の司
馬溫公の著なり。

つかんかうもく (通鑑綱目) [書]
司馬溫公の通鑑につきて、其綱目を
分ちたるものにして、宋の朱子の著
なり。

つかんらんぬう (通鑑覽要) [書]
司馬溫公の通鑑を節略して、其大要
を記したるものなり。清の姚培謙の
著なり。

つかもとないかい (塚本寧海) [人]

く鮭を産出す。

つかるとめのお (津輕爲信) [人]
姓は藤原氏、奥州の人、右京亮と稱
す。初め南部氏の臣、後、兵を擧げ
て津輕三郡を領し、秀吉に倚りて津輕
氏を稱す。証明の役、名古屋の行營
に従ひ、關原の役、家康に屬す。慶長
十二年十二月歿す。

つかるとのおまさ (津輕信政) [人]
字は法正、養生軒と號す。陸奥弘前
の城主なり。資性聰明、果決にして
能く文武の業に達す。山鹿素行を師
とし、經義、及び、軍學の蘊奥を究
め、又、理學、神道に精通す。津輕
家中興の祖にして、最も力を植林に
致せり。寶永七年十月歿す。年六十
五。

つかるとふじ (津輕富士) [地] 陸奥

名は明殺、字は桓甫、金太郎と稱す。
嘉永三年、昌平殿に入り、秀才の譽
高し。偶々、米艦浦賀に來り、國內
騷擾す。寧海深く感ずる處あり、關
學を修め、又、幕府の命を奉りて、關
海軍術を學ぶ。文久、元治の頃、軍
艦に職を奉り、重く用ゐらる。明治
維新後、陸軍大學大教授、陸軍少丞、
權大外史、法制課長、一等編修官等
を歴て、十八年二月、内務少書記官
に任ぜらる。在職中、貢獻する處甚
だ多く、地理、地圖等の著皆世に用
ゐらる。十八年二月歿す。年五十三。

つかるといしかは (津輕石川) [地]
陸中國下閉伊郡の南端より發源し、
東北流して宮古灣に注ぐ。本川は多
稱なり。

國岩城山の別稱なり。

つかるとかいけふ (津輕海峽) [地]
陸奥國の北端と、對岸北海道渡嶋國
との中間の海面を云ふ。距離五里よ
り、十三里に至る。潮流駁急にして、
波濤險惡なり。

つかるとせ (月瀬) [地] 大和國添上郡
月瀬村なり。文政年中、齋藤拙堂月
瀬紀勝を草して、其絶勝を激賞せし
より、名愈著はる。有名なる梅花の
名所にして、世人の月瀬と稱するは、
梅樹を植て業とする附近數村の稱な
り。

つかるとせやま (月瀬山) [地] 大和
國添上郡の東北部に位す。山中梅花
を以て其名著はる。梅林凡そ三十町
步。

つかるとせんざう (月形洗蔵) [人]

名は詳、字は伯安、駒之助と稱す。弘の長子にして、慷慨家なり。万治元年、上書して時事を論じ、忌諱に觸れて御笠郡に牢居す。後、赦されて七卿を長州に迎ふ。慶應元年また罪を得て、同志と共に死刑に處せらる。年三十八。

つぎがたひろし (月形弘) (人) 字は伯重、三太郎と稱し、瀟嵐と號す。筑前國福岡の藩士なり。少年の時、古賀精里に學ぶ。人となり樸直にして、氣節あり。時に幕府政を失ひ、天下騷擾す。弘父子大に尊攘説を主張し、志士を鼓吹す。遂に藩政を妨害するの罪に問はれ、獄に繋がる。文久二年四月、獄中に歿す。年六十五。

つぎさかきいづののみたまあま

(桃花鳥田丘山上陵) (地) 大和國高市郡にあり。綏靖天皇の御陵なり。

つぎたるをんせん (次樽温泉) (地) 美作國眞庭郡にあり。泉質塩類泉なり。

つぎぢ (築地) (地) 大坂市東區今橋西詰の北突角を云ふ。

つぎでやま (月出山) (地) 俗に關東山と云ふ。豊後國玖珠郡の西北隅に位す。高さ二二八七尺。

つぎのいさな (調伊企灘) (人) 百濟の歸化人、督理の後裔にして、難波に住す。人となり、忠烈勇武なり。欽明天皇の朝、紀男鷹の副使として、新羅の罪を問ふ。軍利あらずして、捕へらる。新羅王、逼りて、醫を露はして、日本國王を罵らしむ。伊企灘、却りて、新羅王我醫を喰へさ大

ぎかるむつかひめのみこと (撞賢木殿之御魂天疎向津比賣尊) (人) 天照大御神の御自ら名のらせ給ひし御名なり。

つぎしま (築嶋) (地) 一名經嶋と云ふ。攝津國兵庫港を云ふ。平清盛、兵庫の浦にて、上下の船難破多きを憂ひ、應保元年、初めて嶋を築きしも、風浪のため成効せず。同三年、再び起工して再び失敗す。遂に博士阿部泰氏の言を以て、人柱を入れんとし、生田の小野に關を設けて旅人を掬め捕へんさす。清盛の家童松王之を憐み、自ら海中に投じ、遂に成就したりと云ふ。建武の頃、脇屋義助の陣所となり、又、足利尊氏西遊の時の乗船場たりき。

つぎたのをかへののみささぎ 呼し、遂に殺さる。

つぎのいはかみやま (月陰岩神山) (地) 陸前國名取郡の西南隅に位し、東北二口峠の街道を挟みて、日陽岩神山と相對す。

つぎのたき (次瀑) (地) 紀伊國有田郡にあり。高さ二七六尺、幅二五尺。下流有田川に入る。

つぎのみや (筒城宮) (地) 山城國にあり。繼體天皇のおはせし宮なり。

つぎのもとるざん (月本爲山) (人) 本姓は關氏、江戸の人、名高き俳人なり。明治十一年一月歿す。年七十五。

つぎのゆくへ (月行方) (書) 高倉天皇より、安徳天皇までのことを記したるものにして、荒木田麗の著なり。

つぎのわくわんばく (月輪關白)

〔人〕藤原兼實を云ふ。

つぎのわののみさぎ (月輪陵)〔地〕

①四條天皇の御陵。②後水尾天皇の御陵。③明正天皇の御陵。④光明天皇の御陵。⑤後西院天皇の御陵。⑥靈元天皇の御陵。⑦東山天皇の御陵。⑧中御門天皇の御陵。⑨櫻町天皇の御陵。⑩桃園天皇の御陵。⑪後櫻町天皇の御陵。⑫後桃園天皇の御陵。⑬後陽成天皇の御父、陽光院太上天皇の御陵。⑭後水尾天皇中宮東福門院源和子の御陵。⑮靈元天皇中宮新上西院藤原房子の御陵。⑯東山天皇中宮承秋門院幸子女王の御陵。⑰中御門天皇皇后新中和門院藤原尚子の御陵。⑱櫻町天皇皇后清綺門院藤原舎子の御陵。⑲桃園天皇皇后恭禮門

院藤原富子の御陵。⑳後桃園皇后盛花門院藤原維子の御陵。以上二十陵を、後月輪陵を合せて、泉涌寺御陵と云ひ、京都市下京區にあり。

つぎのわののみなみののみさぎ (月輪南陵)〔地〕山城國紀伊郡にあり

崇徳天皇中宮皇嘉門院藤原聖子の御陵なり。

つぎのゑ (月野柄)〔人〕蝦夷の酋長なり。寛政元年、松前の監吏、及び、南部の商九十餘人を殺す。初め、商人等、松前藩に請ひて、市を國後に開き、酒米煙草を賣り、監吏に賂して市利を網す。夷民忿恨す。月野柄乃ち五百人を率ゐて、市場を襲ひ、之を殺す。幕府之を聞き、松前藩に命じて討せしむ。未だ到らずして、賊、みな、逃れ去る。

つぎのひこ (月彦)〔人〕通稱は鈴木鐵

太郎、東京の人、舊幕臣にして、名高き俳人なり。明治二十五年三月歿す。年六十八。

つぎのひら (綱平)〔人〕姓は藤田氏、

與兵衛近江守と稱す。有名なる江戸の刀匠なり。寛文年間の人。

つぎのふま (月山)〔地〕①陸中國下閉

伊郡の東南端に位し、宮古灣に臨む。高さ一五〇〇尺。②陸奥國下北郡の東南極に位す。高さ一四五〇尺。

つぎのふまじんじや (月山神社)〔地〕

羽前國東田川郡にあり。官幣中社にして、月讀尊を祭る。

つぎのふまどの (築山殿)〔人〕關口氏

廣の女、今川義元養ひて徳川家康に配す。信康、及び、盛徳夫人(奥平信昌室)を生む。人となり嫉忌、婦徳修

らす、酷虐を極む。後、甲斐の醫藏

院と致し、密かに不軌を謀り、事露はれて、天正七年八月死を賜はる。

つぎのふみののみこと (月夜見尊)〔人〕

伊井諸尊の御子なり。

つぎのふみののみや (月夜見宮)〔地〕

豐受太神宮の後方にあり。外宮攝社十六座の一にして、月讀命、荒魂命を祭る。

つぎのふみののみり (月讀森)〔地〕伊

勢國度會郡にあり。

つぎのふま (月雄)〔人〕姓は朝日氏、養

仁叟と號す。武藏國我野神社の神官にして、有名なる俳人なり。明治二十年八月歿す。

つぎのふまかせつてい (月岡雪鼎)〔人〕

本姓は本田、名は昌信、信天翁と號す。近江國の人にして、有名なる畫人

なり。晩年、法橋に叙せらる。天保六年十二月歿す。年七十七。

つゝし (筑紫) [地] 古へ、筑前、筑後、及び其附近の稱なりしが、後に九州全體の稱となれり。

つゝしがた (筑紫湯) [地] 筑紫海、有明ノ沖とも云ふ。福岡、長崎、佐賀、熊本ノ四縣に及ぶ。即ち、筑後の西海岸、肥前の佐賀、小城、杵嶋、藤津、南、北高來ノ六郡、肥後ノ宇土、飽託、玉名、天草四郡ノ沿岸皆之に瀕す。

つゝしとわらざん (筑紫鐵山) [地] 筑前國嘉穂郡にあり。石炭を産出す。産出高凡そ一千百噸。

つゝしとせん (筑紫御前石) [地] 淡路國津名郡鳥飼村ノ海岸にあり。傳へ云ふ。往昔、太船此地

に漂着す。中に一美婦あり、其國を問へば筑紫とのみにて仔細を得ず。里人一石を建てて標となす。後、之を汚せば怪異ありと云ふ。

つゝしとれかど (筑紫惟門) [人] 姓は藤原氏、下野守と稱す。少貳氏の族なり。上野介左馬頭に任ぜらる。永正五年、將軍義植を奉じて京師に入り、大内氏に屬す。弘治三年七月、大友宗麟秋月城を攻む。城主文種戰死す。惟門九千部嶺に走り、また遁れて毛利元就に憑る。

つゝしのみちのち (筑紫路口) [地] 筑國前の古稱なり。

つゝしのみちのしり (筑紫路後) [地] 筑後國の古稱なり。

つゝしひろかど (筑紫廣門) [人] 惟門の子、上野介と稱す。肥前の人、

遂に一萬石を食む。寛永中歿す。年八十二。

つゝぞしま (仙嶋) [地] 武藏國隅田川の河口にあり。周回六町余。

つゝとじんじや (津久戸神社) [地] 東京市牛込區にあり。素盞鳴神を祭る。文明十年創建、太田道灌の勸請と云ふ。

つゝばあんしん (筑波庵紫陰) [人] 初代、通稱は君塚伊兵衛、江戸の人、質屋を業とす。有名なる狂歌師なり。天保三年十月歿す。

つゝばがは (筑波川) [地] 一名櫻川と云ふ。常陸國にあり。源を西茨城郡の西部に發し、霞ヶ浦に入る。長さ凡そ十一里。

つゝばやま (筑波山) [地] 一に筑波山に作る。常陸國筑波郡の東北隅に

(永祿十年、肥前に還り、三條城に據て大友の兵と戦ひ、苦戦して克たず、遂に降る。十五年秀吉に屬し、征韓の役、各地に轉戦して功あり。關原の役、西軍に屬し、軍敗れて逃れ販り、剃髮して夢庵と號し、加藤清正に仕ふ。元和元年四月歿す。年六十八。

つゝしとふじ (筑紫富士) [地] 筑前國糸嶋郡なる浮嶽の別稱。豊後國速見郡なる由布嶽の別稱。筑前國糸嶋郡なる可也山の別稱。

つゝたかすなり (佃十成) [人] 通稱は次郎兵衛、加藤嘉明の臣、驍勇の名あり。征韓の役、嘉明の先鋒となり、常に拔群の功あり。關原の役、居城伊豫松前の留守となり、寡兵を以て、よく其任を盡せり。大坂の陣、嘉明の子明成を輔けてまた軍功あり

位し、新治、眞壁の二郡に跨れる高嶺にして、陰陽双峰相對峙す。即ち、西を男體山、東を女體山と云ふ。高さ三二八六尺。

つぐみまじんじや (筑波山神社) 【地】常陸國筑波山にあり。縣社にして、陽峰に伊井諾尊、陰峰に伊井册尊を祭る。之を筑波男神、筑波女神と稱す。

つぐまじんじや (筑摩神社) 【地】近江國阪田郡にあり。縣社にして、御食津姫神、大歳神、食稻魂神を祭る。

つぐみあん (津久見灣) 【地】豊後國北海部郡の東南海にして、西北白杵灣に隣す。灣内には幾多の群嶋、又、津久見見港あり。

つぐみ (逗子) 【地】相模國三浦郡にあるの南端に燈臺あり。

つじさはしうあん (辻澤就庵) 【人】名は泰、字は一守、觀察堂主人と號す。越後新發田の醫、幼にして詩文をよくし、新發田藩の三秀才と稱せらる。最も眼科手術に長ず。後、新發田醫會の長となる。明治二十七年十二月歿す。年六十二。

つじちかたふ (辻近任) 【人】近元の孫、笙、舞に堪能なるを以て有名なり。命を奉じて萩生徂徠等と共に、雅樂曲十五曲、琴曲百余曲を再興せり。寶曆七年十月歿す。年八十二。

つじちかひろ (辻近弘) 【人】本姓は狛氏、有名なる奈良の樂人なり。後陽成天皇召して禁裡の樂人となす。

十九嶺と云ふ。紀伊國の海濱を総稱して云ふ。

つぐみあみものがり (江漏草髮物語) 【書】續世繼の別名なり。

つぐみあみ (九十九峰) 【地】筑後國三井、八女、浮羽の三郡に連亘せる耳納山の別稱なり。

つぐみあん (九十九灣) 【地】能登國の南沿岸にあり。幾多の岬角、宛も犬牙の相交るが如く、九十九曲をなす云ふ。故に此名あり。灣内に小木港あり。

つぐみの (團鷗野) 【地】又、菟飯野と云ふ。攝津國東成郡にあり。仁徳天皇の時、始めて、氷室を造れる處なり。

つぐみんじま (津堅嶋) 【地】琉球國中頭郡の東南方にあり。周回三里。嶋

最も笙をよくす。慶長中、伯耆守に任ず。又、彫刻に巧なり、日光廟陽明門の勅額に其刻する處と云ふ。寛永十二年八月歿す。年六十六。

つじちかひろ (辻近寛) 【人】近元の孫、笙、及び、舞に堪能なるを以て有名なり。僊、東山天皇の師範に候す。從四位上伯耆守に任ぜらる。享保五年十二月歿す。年五十三。

つじちかもと (辻近元) 【人】近弘の子、父業を襲ぎて禁裡の樂人たり、正四位上伯耆守に任ず。徳川家光初めて日光廟に樂府を置き、近元を擧げて之に教へしむ。寛文五年、近元幕府に請ひ、京都南都天王寺の樂人に新領地を賜はんことを以てし、遂に聽さる。之を三方樂所領と稱す。延寶九年六月歿す。年八十。

つじのーいしふみ (辻碑) [地] 攝津國伊丹町大字大鹿の東にあり。蓋し陸奥の壺碑に凝したるものにて、四境の里程を記す。文字は半は磨滅して讀むべからず。建設の年代詳ならず。

つじのりーまさ (辻則正) [人] 近元十二世の孫。初め則察と云ふ。嘉永年間、左近衛將監兼伯耆守となり、詩で從五位上に叙せらる。文久元年、孝明天皇筮の御師範たり。同二年正月歿す。年三十二。

つしま (津嶋) [地] 尾張國海東郡の西端に位し、佐屋川の東岸にある名邑なり。

つしまかいけふ (對馬海峡) [地] 對馬國下縣郡の東南海面と、壹岐國との中間を稱す。

つしまじんじや (津嶋神社) [地] 陸前國佐沼町にあり。縣社にして、素盞鳴尊を祭る。天平二年の創建なり。尾張國津嶋町にあり。縣社にして、素盞鳴尊、奇稻田姬、及び、天忍穗耳尊以下八神を祭る。弘仁九年の創建なり。

つじみつーまさ (辻充昌) [人] 通稱は丹治、臨川堂と號す。近江國の人に於て、有名なる彫工なり。奈良風の彫刻を善くし、殊に、黒繪様の象眼を巧にす。安永五年歿す。年五十六。

つしろーかり (津代港) [地] 大隅國大嶋の北部笠利灣内にあり。港内水深く、大船を泊すべく、鹿兒嶋地方、及び、附近群嶋との交通最も繁頻なり。

つじるーかく (辻維岳) [人] 安藝國廣

嶋藩の臣、慷慨家なり。夙に藩政の乱れたるを慨き、同志とともに大に整革せんを謀りて果さず。偶、尊主攘夷の論四方に起る。藩主維岳を擯でて執政をなし、尊王の事を行はしむ。後、小松帶刀、後藤象二郎等と大政奉還の事を議し、書を幕府に上り、遂に容れらる。明治維新後、參與となり、二十三年、元老院議員に任じ、男爵を授け、華族に列せらる。二十七年一月歿す。

つせーくわろーざん (津瀬鑛山) [地] 備前國赤磐郡にあり。銅、硫化鐵を産出す。製山高銅凡そ二万斤。

つたーいづーさい (津田逸齋) [人] 名は淑、字は令終、京都の人、有名な醫者なり。嘉永元年十月歿す。年六十二。

つたーいふ (津太夫) [人] 陸奥國石巻の漁夫、寛政五年十一月、同業者十數名と帆船若宮丸に乗じ、江戸に回航せんを志し、路暴風に遇ひて露領オシテレイツケに漂着し、露帝のために養はるること殆んど十年、享和三年九月、長崎硫黄島に送還せられたり。

つたーかり (津田港) [地] 阿波國名東郡の東海岸にありて、紀伊水道に臨む。西北に徳嶋あり、有名なる漁業地なるも。港内稍淺く、大船を納れ難し。

つたーけんーもつ (津田監物) [人] 名は寛長、紀伊國の人にして、種子嶋に渡り、砲術を學ぶこと十餘年、遂に、一家をなす。津田流砲術の祖なり。天文頃の人なり。

つちうちら (土浦)〔地〕常陸國にある市街にして、土屋氏の舊藩地なり。
 つちかはへいべゑ (土川平兵衛)〔人〕近江國野洲郡の人、里正となりて、守山驛助郷勤番たり。中江藤樹の人となりを慕ひ、躬行實踐を主とす。天保中、幕吏來りて檢地の事あり、地を測るに五尺八寸の尺度を用ゐ、餘田は官に沒收す。吏民大に怒り、平兵衛等主唱して哀訴す。集るもの一萬餘人、遂に十萬日間檢地延引の事を約して衆解散す。然れども上を犯すの罪を以て、平兵衛等捕へられて江戸に送られ、未決の間、天保十四年四月歿す。
 つちざさみなと (土崎港)〔地〕羽後國南秋田郡西海岸の南端、御物川の河口にあり。雄勝、平鹿、仙北三郎

の物産多く此地に輻湊するを以て、船舶の出入多しと雖も、港口淺く、且、西風を避くる能はざるを以て、海運甚だ便ならず。
 つちのせと (榎峽)〔地〕讃岐國綾歌郡と、香川郡界に斗出する尾崎と、小槌嶋との間を云ふ。距離六町。
 つちのみや (土宮)〔地〕豊受太神宮の別宮にして、地主神を祭る。
 つちみかどありと (土御門有世)〔人〕天文、卜筮の術に精しく、後小松天皇の朝に、陰陽頭に任ぜらる。占驗よく的中し、其名一世に高し。
 つちみかどしんわう (土御門親王)〔人〕久良親王におなり。
 つちみかどしやうばんやしきあ (土御門將軍邸址)〔地〕京都市上京區御所の北境なる一條伏見殿の

ならん云ふ。往昔、足利尊氏の邸なりき。貞和五年三月、火災に罹り、灰燼に歸せり。
 つちみかどちやうかうだうし (土御門長講堂址)〔地〕京都市上京區上長者町(舊土御門)東洞院にあり。中世、六條殿中なる六條長講堂を移されたるものなるも、幾もなくして廢絶せり。
 つちみかどてんわう (土御門天皇)〔人〕御名は爲仁、後鳥羽天皇の皇子にして、人皇第八十四代の天皇たり、在位十二年(紀元一八五九—一八七〇)にして、寶曆三年十月崩す。壽三十七。
 つちみかどひがしとらゐんど (土御門東洞院殿址)〔地〕京都市上京區上長者町(舊土御門)にあり

と山槐記に見ゆ。其他諸説混同して、辨難し。
 つちみかどふしみどのし (土御門伏見殿址)〔地〕京都市上京區御所の南境にあたる。康富記に曰く、文安五年二月、後花園天皇仙洞伏見殿(後崇光院即ち伏見宮)に行幸あり、當時皇居は、東一條洞院南東の角、舊伏見殿(一條伏見殿)なり、今の伏見殿は土御門高倉の西南角とす、前右府公光(三條家)の舊亭なり、嘉吉元年冬より以來、舊殿皇居となるを以て、此殿を伏見殿とす云云。
 つちみかどゐんし (土御門院址)〔地〕京都市上京區寺町の西、上長者町の南にあり。舊京極土御門殿に就き、承明門院源在子御所となしたるなり。即ち、土御門天皇の太后宮に

して、後嵯峨天皇の潛邸たりしなり。
つづみややすちか (土屋安親) (人)
通稱は彌五八、東雨と號す。羽前國
の人にして、有名なる金工なり。其
作る處、奇抜にして、雅致に富む。
奈良利壽、松浦垂意と共に、奈良風
の三傑と稱せらる。延享元年九月歿
す。年七十五。

つづみのはら (續之原) (書) 素堂、
調和、湖春、桃菁等の判りたる句合
なり。貞享四年成る。

つづみのみやし (筒城宮址) (地)
山城國綴喜郡にあり。都谷と稱す。
仁徳天皇皇后磐之姫在任韓人の家に
就き、初めて、官堂を興し給ふ。繼
體天皇も、また、修造せらる。共に、
一代にして廢す。後、普賢寺を建つ。
寺址を大御堂と云ふ。

一に榴岡に作る。往前躑躅多く、且、
其花を以て、衣帛を摺り、之をつつ
と摺り稱したり。今は只、孝勝寺の
庭前に一株を餘すのみ。此地は古の
所謂鞭建の壘址と云ふ。

つづみあさかぜ (堤朝風) (人) 通稱
は三五郎。不占と號す。徳川幕府の
賄組頭を勤仕す。有名なる江戸の和
學者なり。天保五年四月歿す。年七
十。

つづみがらら (鼓浦) (地) 伊勢國河
藝郡の海濱、中野川と、堀切川との間
を云ふ。

つづみがたき (鼓瀑) (地) 攝津國川
邊郡多田神社の南、多田川の流域に
あり。高さ一〇〇尺。

つづみがたけ (鼓岳) (地) 一名高原
山、又、前山と云ふ。伊勢國度會郡

つづこいわけじんじや (津都古別
神社) (地) 磐城國榎倉町にあり。國
幣中社にして、味耜高彥根命を祭る。
古、陸奥の一の官なり。

つづさき (豆酸崎) (地) 對馬國下縣
郡の西沿岸の南端にあり。岬頭には
コフノ瀬の階礁海底に連續せり。

つづしがさか (躑躅岡) (地) 和
泉國泉北郡にあり。縦十五町、横四
五町の丘阜にして、躑躅を栽うるこ
そ其數を知らず。初夏、花の盛りには
附近の老弱此に遊び、一觀樂地を
なす。①上野國邑樂郡にあり。城沼
に沿ひ、小阜をなす。満丘躑躅にし
て、樹の大き一丈餘、皆數百年前に
栽うる處なりと云ふ。花時には満目
燃るが如く、一大奇觀をなす。②陸
前國仙臺市の東、菅公廟の傍にあり。

の東北部なる宇治山田町の東南に位
し、宮川、五十鈴川の中間に屹立す。
其東部を林崎と稱し、元、文庫あり
て多く古今の典籍を藏せり。

つづみがは (堤川) (地) ①陸奥國東
津輕郡にあり。源を郡の南隅に發し、
北流して、青森市の東端を繞り、青
森灣に入る。長さ十五里。②山城國
加茂川の別稱なり。

つづみちゆうなこん (堤中納言)
〔人〕藤原兼輔におなり。

つづみちゆうなこんものゝがたり
(堤中納言物語) (書) 平安朝時代にな
れる數箇の短篇小説を蒐めたるもの
にして、著者詳ならず。一説には、
藤原兼輔の作なりと云ふも、確かな
らず。

つづみはらざん (堤寶山) (人) 山

城守と稱す。下野國の人にして、劍、槍、及び、捕術に熟達す。寶山流捕術の祖なり。貞享、元祿頃の人。
 つづらいし (葛籠石)〔地〕淡路國山田中村にあり。別に香合石。交合石、金剛石等の名あり。二石相重なりて孤山の頂上に東西に横れり。其二石間隙なく、眞に香合の蓋を合せたるが如し。其形また葛籠に似たるを以て名あり。石上よりは四方の峰巒を望むべく、風景甚だ佳なり。
 つづらやま (葛籠山)〔地〕土佐國幡多郡の南端に位す。高さ一五〇〇尺。
 つつらくわろざん (筒井嶺山)〔地〕肥前國北松浦郡にあり。石炭を産出す。産出高凡そ一千五百噸。
 つつらじゆんけい (筒井順慶)〔人〕

世に、日和順慶と稱せらる。詰智にして、機略あり。元龜六年十一月、織田信長に屬す。天正十年三月、本能寺の變、ひそかに兵を送りて、光秀を援く。後、秀吉の東上を聞き、遽に、兵を率ゐて、秀吉に屬す。秀吉其二心あるを觀破し、憎みて賞せず。同十二年五月歿す。年三十七。
 ついでら (津寺)〔地〕土佐國安藝郡にある律照寺の俗稱にして、四國遍路第二十五番の札所なり。
 つながぬふぬ (不繫舟)〔書〕滋野貞融の和歌文章をあつめたるもの。三卷あり。上中二巻は其文章、下巻は其和歌を載す。江戸隅田川邊に庵を作りて、不繫舟と名けたる、其庵號をされるなり。
 つなざかり (津奈木港)〔地〕肥後

國最北郡西海岸にして、不知火海に臨めり。南に水俣、北に佐敷の二港邑あり。共に三角港より涼船便あるを以て、百貨運輸に便なり。
 つなぎせんせん (繋温泉)〔地〕陸中國殿手郡にあり。泉質硫黄泉なり。承平三年の發見たり。
 つなこ (綱子)〔人〕若狹國三方郡小松原角左衛門の女なり。同郡刀禰茂太夫の家に仕ふ。明和六年六月、主家の幼兒を負ひて門外に遊ぶ、たまに狂狼ありて、幼兒を咬まん。綱子遽て、己の衣裾を以て、幼兒を蔽ひ、之を匿して自ら咬れて死す。時に年十四。時の守護酒井氏憐賞して、碑を建て、銘して忠烈綱女の墓と云ふ。
 つなとりくわろざん (綱取嶺山)

〔地〕陸中國和賀郡にあり。銅を産出す。製出高凡そ一万斤。
 つなとりのつ (綱取津)〔地〕琉球國西表嶋の西端にある津港にして、南に濱崎、北にサバ崎ありて船浮港の界をなす。
 つなひろ (綱廣)〔人〕姓は山村氏、有名なる相摸國の刀匠なり。天文年間の人。
 つなざしのみやし (角刺宮址)〔地〕大和國南葛城郡忍海村にありて小祠を存す。顯宗天皇登極の際、飯豐皇女朝政を聽き給へる古跡とす。
 つながのうら (角鹿浦)〔地〕越前國敦賀浦の別稱なり。
 つながのけひのみや (角鹿筒飯宮)〔地〕仲哀天皇のおはせし宮なり。越前國にありき。

つねあつしんあち (每敦親王)〔人〕
後陽成天皇の第五子にして、慶長十九年剃髪して義性法親王の法弟となり、名を尊性と改む。寛永十二年四月東寺の長吏となり、慶安四年三月薨す。年五十。

つねかたしんあち (常賢親王)〔人〕
後水尾天皇の第十二皇子にして、登美宮と稱す。萬治二年四月剃髪して、名を信敬と改め、後、また真敬に改む。寛文四年十一月、興福寺の別當に補せらる。寛永三年七月薨す。年五十八。

つねこないしんあち (常子内親王)〔人〕
後水尾天皇の皇女にして、級宮と稱す。寛文四年十一月、權大納言藤原基照に降嫁して、家照を生む。元祿十五年八月薨す。年六十一。

つねのふさやうき (經信卿記)〔書〕
後冷泉天皇より、堀河天皇に至る迄の事蹟を記したるものにして、藤原經信の記録なり。

つねのみやじんじや (常宮神社)〔地〕
越前 敦賀郡にあり。縣社にして、天八百萬比賣神、氣長足姫尊、足仲彦尊を祭る。天武天皇の大寶三年の創建なり。

つねひとしんあち (職仁親王)〔人〕
靈元天皇第十五の皇子にして、明宮と稱す。享保元年十月、有栖川宮を相繼し、同十三年三月元服して中務卿に任ぜらる。明和六年十月薨す。年五十七。

つねさだしんあち (恒貞親王)〔人〕
淳和天皇の皇太子にして、姿容端麗、閑雅にして、威風あり。詞藻に富み、草書、及び、隸書に巧なり。又、琴瑟をよくす。橘逸勢等の叛に預りて太子を廢せらる。後、僧となる。元慶八年九月薨す。年六十。

つねたねしんあち (常胤親王)〔人〕
邦輔親王の王子にして、正親町天皇の猶子となる。永祿七年四月、剃髪して業を堯尊法親王に受く。慶長二年四月天台座主となる。元和七年六月薨す。

つねなが (恒良)〔人〕
後醍醐天皇第六の皇子にして、建武元年建てて皇太子となす。延元元年、勅を奉じて越前に赴き、北國を經略す。幾もなくして金碕城陥り、敵手に捕へられ

つねやすしんあち (常康親王)〔人〕
仁明天皇の皇子にして、雲林院宮と稱す。天資沈敏、甚だ天皇の鐘愛を得たり。仁壽元年僧となり、貞觀十一年五月薨す。王子光勝は即ち空也上人なり。

つねよししんあち (常嘉親王)〔人〕
後陽成天皇第六の皇子にして、雍髪して、名を堯然と改め、三たび天台座主となる。寛文元年八月薨す。年六十一。

つねよしんあち (恒世親王)〔人〕
淳和天皇の皇子にして、三品中務卿となり、天長三年五月薨す。

つねちぢだき (角落瀑)〔地〕
肥後國阿蘇郡にあり。高さ一二〇尺、幅三五尺。下流杖立川に入る。
つねのくは (津國)〔地〕
攝津國の古稱

なり。

つの一のこほらみ (津國海) [地]攝津國なる難波海の別稱なり。

つの一のさくひんじや (角避比古神社) [地]遠江國濱名郡にあり。

國幣中社にして、素戔嗚鳴尊を祭る。宣化天皇元年奉祀す。

つの一のしま (角嶋) [地]長門國西方にあり。周回三里半余。其西北端に燈臺の設けあり。

つの一のしま (津嶋) [地]伊豫國越智郡に属す。周回一里半。

つの一のざありがく (角田櫻岳) [人]名は定經、與市と稱し、萬農養と號す。駿河國の人にして、常に、意を水利殖産の事に注ぐ。創めて、地球儀を製し、水戸烈公に獻して、嘉獎せらる。明治六年六月歿す。年五十。

つの一のざきりくわ (角田九華) [人]

名は簡、字は大可、才次郎と稱す。幼にして、角田東水の義子となり、中井竹山に學ぶ。由學館内監となり、待讀より班近習頭に進む。安政二年十二月歿す。近世叢語等の著書あり。

つの一のざとりする (角田東水) [人]

名は美利、字は一和、別號を交談庵と云ふ。豊後國岡藩の馬廻たり。後、家を義子九華に譲り、京師に遊びて醫を學び、遂に一家をたつ。諸國を周遊して、晩年大坂に住す。寛政九年歿す。年六十五。

つの一のてつりくわらざん (角鐵鑛山)

[地]薩摩國日置郡にあり。金、銀を産出す。製出高凡そ金六百五十匁、銀二千匁。

つの一のじんじや (都農神社) [地]

日向國兒嶋郡にあり。國幣中社にして、大己貴神を祭る。式内四座の一にして、本國の一の宮なり。

つの一のみあ (津峰) [地]阿波國那賀郡の東部に位す。山嶺に神廟あり。賀志波比賣命を祭る。而して、南面は、海灣を望み、灣内には、大小の嶋嶼點々散布し、各形勝を占め、眺望佳絶なり。

つの一のみあじんじや (津峰神社)

[地]阿波國津峰山上にあり。縣社にして、賀志波比賣命を祭る。

つばきくわらざん (椿鑛山) [地]羽後國山本郡にあり。銀を産出す。製出高凡そ四十七万匁。

つばきこのるせき (椿湖遺跡)

[地]下總國香取郡の東南境より、海上郡の西境、及び、匝瑳郡の北境に

亘る耕地の總稱なり。今、千瀉、八萬石と稱す。往古は廣大なる湖水にして、周回千里餘に亘る。寛文年間里人官命を奉じて新渠を今の海上、匝瑳郡界に開き、湖水を矢挿浦に疏通して耕田数千町を得、又、村落をなすこゝ十有七に及べり云ふ。

つばきざはくわらざん (椿澤鑛山)

[地]一名内山鑛山、又、大瀧鑛山と云ふ。石油を産出す。産出高凡そ一萬石余。

つばきちんざん (椿椿山) [人]名は

弼、字は篤甫、忠太郎と稱し、春松軒、琢華堂等の別號あり。有名なる畫工にして、傍ら、片山流の抜刀法、及び、兵法を善くす。安政元年七月歿す。年五十四。

つばきちゆうは (椿仲輔) [人]幼名

は千稔、四郎左衛門と稱し、常磐舎と號す。下総國香取郡の人、有名な和學者なり。四十二歳の時、佐倉侯に仕へしが、幾もなくして致仕し、京都に遊ぶ。弘化三年二月歿す。年四十四。

つばさーとまりーみなと (椿泊港)〔地〕阿波國那賀郡東海岸にありて、舞子嶋に扼せられ、三面山を負ふ。港内廣く、船舶に便なり。徳嶋、甲浦間に往復す汽船便あり。

つばさーのーはらーくわらーざん (椿原嶺山)〔地〕肥前國東松浦郡にあり。石炭を産出す。産出高凡そ一千二百噸。

つばさーはちーまんーしや (椿八幡社)〔地〕長門國阿武郡にあり。縣社にして、應神天皇を祭る、文治年中、佐佐木高綱の創建なり。

つばさーを祭る。推古天皇二年勸請す。

つばさーさき (圓崎)〔地〕薩摩國下飯嶋の最北端にして、狹長斗出する。こさ一里半余、東は中飯嶋の馬乘崎と相望み、南牟田瀬戸の北門たり。

つばさーらーしま (津武羅嶋)〔地〕肥前國樺嶋の西北方にあり。周回二里余。つばさーかーでら (壺阪寺)〔地〕大和國高取町にあり。一に南法華寺と號す。大寶三年、道基上人の開基なり。西國巡禮第六番の札所たり。

つばさーがーなけ (局嶽)〔地〕一名局山と云ふ。伊勢國飯南郡の中央北端に位す。高さ二二一七尺。

つばさーこみーうら (局込浦)〔地〕薩摩國上飯嶋の南部海面を云ふ。

つばさーのーいしーふみ (壺石文)〔書〕古歌など引用して、女子の教訓となる

つばさーをんーせん (椿温泉)〔地〕紀伊國西牟婁郡にあり。文化三年の發見にして、泉質單純泉なり。

つばさ (津幡)〔地〕加賀國河北郡の北部中央に位し、津幡川の兩岸に跨れる名邑なり。

つばさーぎはーのーひ (燕澤碑)〔地〕蒙古之碑におなり。

つばさーのーたき (燕澤)〔地〕羽前國南置賜郡にあり。松川の水源にして、高さ三〇〇尺、幅五四尺。

つばさーやーへーことーしろぬしーのかみ (都波八重事代主神)〔人〕單に事代主神とも、又、葛城一言主神とも申す。大國主神の長子なり。

つばさーはーましますーあまーてらすーじん (粒坐天照神社)〔地〕播磨國龍野町にあり。縣社にして、天照彦火

へきものを記したるものなり。

つばさーのーいしーふみーのーこせき (壺碑古蹟)〔地〕陸奥國上北郡七戸村の北一里許なる、千曳神社のある處ならんといふ。碑は、往古、坂上田村麿東征の時、此地を日本の中央として、建設せしものなりとぞ。碑は、土中に埋没せられて、今、所在を詳にせず。源頼朝の歌に「陸奥のいはて忍ぶは之ぞ知らぬ書つくしてよ壺のいしふみ」に、世に、陸前國多賀城の古碑を壺碑とすは非なり。

つばさーのーゆーせんーせん (壺湯温泉)〔地〕大隅國始良郡にあり。泉質鹽類泉なり。文政六年の發見たり。

つばさーるーくわらーざん (坪井嶺山)〔地〕美作國久米郡にあり。銅を産出す。製出高凡そ十二万斤。

つぼるしんたり (壺井信道) (人) 名は道、誠軒と號す。美濃國の人にして、有名なる蘭醫なり。長門侯に仕へて、侍臣となる。當時、伊東玄得、戸塚静海と共に、三大洋醫と稱せらる。嘉永元年十一月歿す。年五十四。

つぼるしんりやう (坪井信良) (人) 初めの名は佐藤良益、後、蘭醫坪井信道に養はれて其後を繼ぎ、名醫の名四方に高し。後、幕府の侍醫となる。

つぼるよしとも (坪井義知) (人) 鶴翁、又は、温故軒と號す。大坂の人にして、有名なる有職家なり。特に、古典に通じ、著書多し。享保二十年十月歿す。年七十五。
つまがきじんじや (斐垣神社) (地)

豊前國宇佐郡にあり。縣社にして、祭神詳ならず。

つまぎせいへき (妻木樓碧) (人) 幕府旗下の士にして、少時昇平殿に入り、業大に進み、才名甚だ高し。擢られて甲府徵典館學頭、奥右筆、目付等を勤む。後、長州の志士と往來せしこゝ類はれ、有司の猜忌を招きたれども幾もなくして免れ、要職に用ゐらる。維新後、静岡、名古屋縣等他に歴仕し、又、横濱毎日新聞の主筆たり。明治二十八年二月、帝國博物館校正掛となり、本邦美術沿革の取調に従事す。同三十四年一月歿す。年七十六。

つまじんじや (都萬神社) (地) 日向國兒湯郡にあり。縣社にして、木花開耶姬を祭る。

つむらみなり (津村御堂) (地) 大坂市東區にあり。本願寺の懸所にして、俗に北の御堂と云ふ。堂宇宏壯、周回には塀を築き、溝を繞らし、一見城廓の趣きあり。南に難波御堂あり。之を南の御堂と云ふ。

つむりさつしやう (津守吉祥) (人) 齊明天皇の五年、遣唐副使となり、海中風に遇ひて大使坂合部石布と相失ふ。依て單身參朝す。高宗に請して辨論明拆、舉朝其風采に感ず。偶、客館に火を失して罪を得、抑留せられて幽居し、困苦年を経て遂に歿す。

つむりくはなつ (津守國夏) (人) 吉祥の後、攝津國住吉の神主なり。和歌に長じ、笛をよくす。後醍醐天皇北條氏を討ち給ふまき、國夏に勅して平定を祈らしむ。後、車駕、國

夏の邸に御するこゝ十餘日、正三位に進めらる。正平七年歿す。年七十五。

つむりくはもと (津守國基) (人) 住吉神社の神主にして、和歌を巧にし、又、筆の名手たり。津守氏中興の祖たり。康和五年七月歿す。年八十。

つむりのうら (津守浦) (地) 攝津國住吉浦の別稱。

つまぎさか (津屋崎港) (地) 筑前國宗像郡の西海岸にあり。東は勝浦に接し、支海灘に臨めり。小舟の泊繫に便なり。

つま (津山) (地) 美作國にある市街にして、松平氏の舊藩地なり。

つまがは (津山川) (地) 一名暮田川、又、東川と云ふ。美作國にあ

り。源を苦田郡の北隅に發し、東南流して下流吉井川となる。流程二十里余。

つゆのこらうべゑ (露五郎兵衛) 「人」江戸落語家の祖なり。元祿十六年、年六十一にして歿す。

つよしかり (津吉港) 「地」肥前國平戸嶋の南海岸にあり。近來早岐を起点とする漁船あるを以て、佐世保、平戸、五嶋列嶋諸港と交通海運の便あり。

つらしろたき (都良白瀑) 「地」伊豫國宇摩郡にあり。高さ二四〇尺、幅二二〇尺。斷崖に隨ひ、水脈分注して、津根川に入る。

つらたにくわうざん (面谷嶺山) 「地」越前國大野郡にあり。銀、銅を産出す。製出高凡そ銀三拾万匁、銅

の和歌の集なり。

つりかけさき (釣懸崎) 「地」薩摩國下飯嶋の西南端にあり。岬上に燈臺あり。

つりさき (釣崎) 「地」上總國宗良見の浦にあり。彦火火出見尊の釣を垂れ給ひし處と云ふ。

つりしまかいけふ (釣嶋海峡) 「地」伊豫國興居嶋の西北沿岸と、陸月嶋との間を云ふ。距離半里余。

つりはさき (釣葉崎) 「地」土佐國幡多郡の西沿岸泊浦部落の西端を云ふ。泊崎と相對して泊浦港をなす。

つりふねものがり (釣船物語) 「書」嘉永安政の頃、國家多故の際にありて、時事を痛論し、言を品川沖漁翁の談に托し、文辭婉約なり。著者は、深潛隱居なり。

四拾五万五千斤。

つらなまのしみ (頼那藝神) 「人」速秋津彦神の御子なり。

つらなみのかみ (頼那美神) 「人」速秋津彦神の御子なり。

つらゆき (貫之) 「人」紀貫之におなじ。

つらゆきちめ (貫之梅) 「地」大和國初瀬町なる長谷寺にあり。紀貫之幼少の時、初瀬に住ける伯父の雲井坊淨真の方にて學問し、拾四五歳にて都へ上り朝に仕ふ。後、再び初瀬を訪ひけるとき、幼少の頃植え置きし梅の枝を折て、斯定宿在に淨真が言ひて梅を見せけるに、人はいざ心もしらす古郷は花ぞむかし香に匂ひける」と答歌せり。

つらゆきしふ (貫之集) 「書」紀貫之つら (敦賀) 「地」古、角鹿と云ふ。越前國にある市街にして、酒井氏の舊藩地なり。

つらがか (敦賀港) 「地」越前國敦賀灣の南にあり。港口は松ヶ崎、鷺崎に擁せられ、之に臨むの市街は、金ヶ崎、從弟崎東西より相迫り、更に、小灣をなしたる東南岸にあり。港内、水深く、殊に、陸上鐵道の通するあり。海陸共に、集散至便なれば、船舶常に輻湊し、北海岸中風指の良港なり。

つらがしんない (鶴賀新内) 「人」初代、本姓は岡田五郎次、晩年、雜髮して、鶴賀齋と號す。江戸の住人にして、有名なる淨瑠璃家。新内節の始祖なり。安永三年八月歿す。年六十一。

つるがーつるまぢ (鶴賀鶴吉) [人] 若狭椽の女にして、新内節をよくし、妙手の聞え高く、傍ら狂歌に名あり。文政十年四月歿す。

つるがーのーち (敦賀浦) [地] 越前國敦賀港前面の海濱を云ふ。

つるかはーか (鶴川港) [地] 豊後國東國東郡の東海岸にありて、硫黄灘に臨む。國崎町此港に沿へり、附近多く、蘆を産し、船舶の出入絶えず。雖も風浪の患少からず。

つるがーわかーさーのーじよ (鶴賀若狭椽) [人] 宮古路加賀太夫の門下にして、淨瑠璃の名家なり。初め、師と絶して朝日鶴賀太夫と稱せしが、寶曆中、幕府命じて朝日の姓を停む。依て鶴賀と改め、若狭椽と改名せり。鶴賀節の祖。傍ら、狂歌に名あり。

天明六年三月歿す。年七十。

つるがーあん (敦賀灣) [地] 越前國敦賀郡の北海岸にあり。西北に斗出したる立岩崎より、東對岸南條郡界以南に向ひ、海水深く浸入して此灣をなす。敦賀港は其南隅にあり。周圍には浦底、外二十餘ヶ所の部落を有す。

つるがーをか (鶴岡) [地] 羽前國西田川郡の北部東境に位する市街にして、酒井氏の舊藩地なり。

つるがーをかーはちーまんーごう (鶴岡八幡宮) [地] 相模國鎌倉町にあり。國幣中社にして、應神天皇を祭る。康平六年八月、由井の濱郷鶴岡に創建、治承四年、源頼朝、之を現地に移す。

北部南境に位する名邑にして、白山登路、及び、白峰地方の要路にあたり。り。

つるがーがーみぬ (劍峰) [地] 加賀國能美郡の東南境に位す。白山五峰の一にして、高さ八五九尺。其山容五劍を列ね植うるが如く、望むべくして、攀づべからず。

つるがーさき (劍崎) [地] 相模國三浦半島の東南端にして、地角は、東に向ふ。北なる千駄崎との中間に金田灣を抱き、東は総房半島に對し、浦賀海峽に臨む。岬頭には、燈臺の設あり。 對馬國上縣郡西沿岸の南部にして、海中に斗出すること十二町余。小西南なる唐崎と相對して小海灣をなす。

つるがーざん (劍山) [人] 本名は文藏

後、二十山巽右衛門と改め、劍山と號す。有名なる力士にして、三十年間、大關の位置にありしと云ふ。嘉永五年正月歿す。年五十三。

つるがーたにーたき (劍谷嶽) [地] 伯耆國西伯郡にあり。高さ一四〇尺、幅六尺。下流阿彌陀川に注ぐ。

つるがーのーいけーのーしまーのーへーのーみさき (劍池嶋上陵) [地] 大和國高市郡にあり。孝元天皇の御陵なり。 つるがーのーみぬ (劍峰) [地] 信濃國下高井郡の東部に位す。高さ五九五〇尺。

つるがーやま (劍山) [地] 阿波國麻植郡の西南に峙立す。高さ六六六〇尺。草木を生ぜずして、巖石峭立す。又、山中に一小廟あり、劍ノ社と唱へ、安徳天皇の御劍を祀れると云ふ。

岩代國信夫郡にあり。中ノ湯、下ノ湯、新瀧湯、佐久間彌平内湯、齋藤幸四郎内湯等の総稱にして、泉質各硫黄泉なり。

つれづれをさ (徒然草) [書] 兼好法師が平常見聞せし事、又、思考せし事などを書きたるものにして、其内、多く訓誡を挿み、文中佛語を交へたる處尠からず。

つれづれをさかなづち (徒然草金槌) [書] 諸家の説を集め、なほ、自説を加へたるものにして、西道智の著なり。

つれづれをさしよせうたいせい (徒然草諸抄大成) [書] 徒然草の諸抄を集めて、大成したるものにして、淺香山井の著なり。

つれづれをさしよせうたいせい (徒然草直

郡の南端、室戸岬の西腹にありて、土佐灣に臨む。附近に捕鯨場あるを以て、船舶の出入常に絶えず。

つろのうら (津呂港) [地] 土佐國室戸崎の西南方に位する海を云ふ。

つわさき (津和崎) [地] 肥前國中通嶋の最北端にあり。地脉斗出するこゝ凡そ四里余。

つわさきかいけふ (津和崎海峡) [地] 肥前國中通嶋の津和崎と、野崎嶋との中間を云ふ。距離六丁余。

つわぢしま (津和知嶋) [地] 伊豫國怒和嶋の西方にあり。周囲三里余。

つわの (津和野) [地] 石見國にある市街にして、龜井氏の舊藩地なり。

つわのがは (津和野川) [地] 石見國鹿足郡の西北隅に發源し、南流して、津和野町を貫き、更に東流して

解) [書] 一名清談と云ふ。徒然草に頭書、傍訓を施し、及び、書中の人物の傳記等を記したるものにして、岡西樵中の著なり。

つれづれをさふんせう (徒然草文段抄) [書] 徒然草を註釋したるものにして、北村秀吟の著なり。

つれの (連野) [人] 江戸八町堀の同心大崎文平の女、毛利匡廣の夫人に仕へて中老たり。姿儀優艶、近侍多年倦まず、甚だ令名あり。時に局に横田と云ふものあり。常に猜忌を懷き、意に誣陥せんを欲す。一日連野横田の履を踏みたるを以て、横田大に怒り、履を以て、連野の面を撃つ。連野憤怨遂に自殺す。婢於三、直に横田を殺し、以て讐を報せり。

つろかろ (津呂港) [地] 土佐國安藝

高津川に入る。長さ凡そ七里。

つろしゆやうせい (堆朱楊成) [人]

◎初代。名は長充、足利氏の臣にして、有名なる漆工なり。延文五年、初めて堆朱彫を創造す。漆工堆朱の始祖なり。◎三代。名は長貞、足利義岐に殊寵せらる。多く茶器を製造せり。長享年中歿す。年七十。◎十代。名は長足、徳川綱吉將軍の比、堆朱御用を命ぜられ、これより代々徳川氏の御用を勤む。享保四年歿す。◎十八代。名は國平、後、平十郎と改む。文久元年三月、日光廟修繕の用を命ぜられ、大に其技を賞せらる。明治維新後、朝旨に依り、拜領屋敷を上納し、己むを得ずして廢業す。明治二十三年三月歿す。子經長、また、早く歿す。

つる。やま。しま (津居山嶋) [地] 但馬國朝來川の河口にあり。周回一里許。

つる。やま。わん (津井山灣) [地] 但馬國朝來川の河口、津井山嶋の東南面を云ふ。灣内に同名の港あり。

つる。たて。かは (杖立川) [地] 肥後國阿蘇郡にあり。水源二流にして、一は嶺師岳に、一は中原に發し、二水相合し、西南流して豊後國日田郡に入り、犬山川となる。即ち日田川の上流なり。長さ九里余。

つる。たて。せん。せん (杖立温泉) [地] 肥後國阿蘇郡にあり。上ノ湯、杖立湯の総稱にして、泉質各種類泉なり。つる。つき。ざか (杖突坂) [地] 伊勢國三重郡采女にあり。傳へ云ふ。上古日本武尊東征の時、佩ぶる所の劔を

大隅國始良郡にあり。天保二年の發見にして、泉質單純泉なり。

てい。ち (貞右) [人] 通稱は貞右衛門、大坂の人、有名なる俳人なり。鳥丸家より、玉雲齋の號を賜ふ。天明三年歿す。年五十。

てい。か (定家) [人] 「ふちはらていか」を見よ。

てい。か。か。な。づ。か。ひ (定家假名遣) [書] 藤原定家の定めたる假名遣法を後人の書き記したるものなり。

てい。きん。し。や。あ。やん。ど (庭訓舎綾人) [人] 姓は久野氏、與兵衛と稱す。有名なる江戸の狂歌師なり。初め筆の綾人と號し、後、今の號に改む。文化十年三月歿す。

てい。きん。わ。ら。い (庭訓往來) [書] 往復の書翰文を漢文めとして記した

杖きて此坂を攀ぢ給ひしき。側に古塚あり。血塚と云ふ。尊の足より出たる血を封じたる所と云ふ。芭蕉翁此坂を過ぎて句あり。「かちならばつえつき坂を落馬かな」近世碑を建てて此句を刻せり。

つる。の。つき。よし (津江月良) [人] 姓は津江氏、名は正政、林藏と稱す。徳川幕府の士にして、有名なる狂歌師なり。また書をよくす。明治三年六月歿す。年八十二。

てで

てあ。ひ。の。たき (出合瀑) [地] 大和國吉野郡にあり。高さ一二〇尺、幅一四尺。

てあ。ら。ひ。せん。せん (手洗温泉) [地]

るものにして、玄惠法師の著なり。てい。き。よく (貞極) [人] 俗姓は大西氏、京都の人、一蓮社立譽と號す。武州善應寺の住僧にして、高德の聞あり。寶曆六年六月歿す。年八十。

てい。ひ。つ。さい。い。さ。り (貞月齋一叟) [人] 姓は佐藤氏、江戸の人、正風遠州流の生花貞月齋の祖なり。天保元年六月歿す。

てい。けん (貞兼) [人] 通稱は藤谷甚吉、桂翁と號す。松永貞徳の門人にして、有名なる京都の俳人なり。元禄十四年十月歿す。年八十七。

てい。こ。く。ひ。や。く。わ。せん。し。よ (帝國百科全書) [書] 數十人の博士、學士等の合著にして、題名の如く、あらゆる科學を網羅したるもの。博文館の發行なり。

ていざ (貞佐)〔人〕 姓は中川氏、二十軒短頭翁と號す。有名なる京都の俳人なり。延享四年十二月歿す。年六十八。

ていざん (貞山)〔人〕 姓は相淵氏、蘆丸舎と號す。名高き京都の俳人なり。寛保元年歿す。年七十二。

ていし (定之)〔人〕 姓は神戸氏、林軒と號す。令徳の門人にして、有名なる京都の俳人なり。元祿十三年九月歿す。

ていし (禎子)〔人〕 三條天皇の皇女にして、後朱雀天皇の後なり。陽明門院と號す。後三條天皇、外二皇女を生む。永承六年、尊びて皇太后と云ふ。嘉保元年正月崩す。年八十二。

ていししよく (弟子職)〔書〕 管子の篇名なり。管子は管仲の著。のちに

漢の劉向八十六篇としたり。ていしのみかど (亭子帝)〔人〕 宇多天皇を申す。

ていしんころ (貞信公)〔人〕 藤原忠平の事なり。

ていしよりさいいちば (貞松齋一馬)〔人〕 初代、姓は米澤氏、名は寛篤、正風遠州流插花の祖なり。又、書、及び、俳諧に名あり。天保九年十月歿す。年七十五。

ていしあるん (亭子院)〔人〕 宅多天皇を申す。

ていせいころ (鄭成効)〔人〕 父は支那泉州の人にして、芝蘭と云ふ。芝龍、屢、我平戸港に往來し、松浦侯より、宅地を千里濱に賜はり、田川氏を娶りて、寛元元年七月、成効を生む。後、父子共に本國に歸りて明

又、插花を能くせらる、元祿八年四月薨す。年五十六。

ていふ (貞富)〔人〕 姓は榎並氏、花實庵と號す。安原貞室の門人にして、名高き大坂の俳人なり。正徳二年五月歿す。年七十二。

ていめいざき (丁名崎)〔地〕 陸前國桃生郡の東海岸半嶋の西部にあり。其東端には、雄勝灣の海門たる白銀崎あり。

ていりち (貞柳)〔人〕 通稱は善八、又、忠兵衛、油煙齋と號す。有名なる大坂の俳人にして、又、狂歌、及び、畫を善くす。享保二十年八月歿す。年八十一。

ていありへんいん (帝王編年記)〔書〕 神代より、後伏見天皇迄の歴代を記録したるものにして、釋永祐の

朝に仕へ、明の傾くに及び、成効は節を持って屈せず、臺灣に據つて清朝に抗せり。寛文三年五月歿す。年三十九。

ていせいざん (帝靜山)〔地〕 常陸國水戸市の北四里、白川街道の傍らにあり。山上には靜神社を鎮す。

ていぢやうざき (貞丈雜記)〔書〕 いろくの故實を集めたるものにして、伊勢貞丈の著なり。

ていあやま (手稻山)〔地〕 石狩國札幌郡の西北端に位す。高さ二六五三尺。

ていびんしんあり (定敏親王)〔人〕 後水尾天皇第八皇子にして、照宮と號す。薙髮して、名を、禪怨と改め、寛文三年、天台座主となる。天資、博學にして、特に、詩文に巧にして

著なり。

てりきんじ (潮音寺) [地] 周防國吉敷郡にあり。禪宗にして、大内盛見創建、僧慶頼の開基なり。

てりねんのたき (潮音瀑) [地] 筑後國浮羽郡妹川にあり。巨瀬川の水源にして、高さ一〇〇尺、幅一八尺。

てりかいざん (鳥海山) [地] 羽後國飽海郡の東北隅に位する高嶺にして高さ凡そ八〇〇〇尺。山嶺に大物神祠あり。

てりかふざん (鳥甲山) [地] 信濃國下高井郡の東部に位す。高さ七二六〇尺。

てりくわくしふ (調鶴集) [書] 井上文雄の歌文を集めたるものなり。

てりけい (兆溪) [人] 江戸の人、家もと寔察なりしが、一朝悟る處あり

〔地〕土佐國土佐郡にあり。高さ一〇〇尺、幅三〇尺。下流吉野川に注ぐ。てりしざき (銚子岬) [地] 渡嶋國茅部郡の東端にあり。

てりしのたき (銚子瀑) [地] ①上野國北甘樂郡にあり。高さ五〇〇尺、幅七尺。下流菊川に注ぐ。②岩代國安達太郎山中にあり。石筵川の水源にして、高さ二〇〇尺、幅一〇尺。

③陸中國鹿角郡にあり。大湯川の水源にして、高さ一六〇尺、幅二〇尺。④陸奥國上北郡にあり。十勝田湖の下流にして、高さ一六三尺、幅四〇尺。⑤紀伊國有田郡にあり。高さ四二〇尺。幅二尺。下流尾川に入る。

⑥讃岐國小豆郡にあり。瀑上巨石相疊み、斜に崖頭に突出す。水の直下する高さ六〇尺、宛も、銚子の口よ

て、弘福寺鐵牛に從て出家す。最も畫に巧にして、特に佛畫に長ぜり。

てりこくろくろんじ (朝護國孫子寺) [地] 大和國生駒郡信貴山上にあり。信貴山觀喜院と號す。明道上人の開基と云ふ。

てりし (銚子) [地] 下總國海上郡の東南端、利根川河口の南岸に位する名邑なり。

てりしから (銚子港) [地] 下總國利根川の河口にあり。港頭岩礁多く、大船の出入に便ならざるも、本州東海岸の一要津にして、百貨常に輻湊す。和船の外、小漁船は、利根川上流沿岸各地と往復し、港は其咽喉を占め、貨物集散の焼点たるを以て、大に繁華を極む。

てりしちのたき (銚子口瀑)

り酒を瀧ぐが如し、故に此名あり。

てりしやまのたき (銚子山瀑)

〔地〕石見國美濃郡にあり。高さ二七〇尺。幅五尺。

てりじちろう (朝次郎) [人] 父は朝鮮人にして、俗に館屋と稱す。足利義

頼の時日本に來り、近江の佐々木氏の臣某を娶りて京都に住し、樂焼を作る。然れども未だ樂焼と稱せず、京焼、或は今焼と稱せり。朝次郎に至り、千利休と交り善く、其姓田中氏

を譲り受けて初めて樂焼を稱せり。てりとうせい (趙陶齋) [人] 名は養

字は仲頤、清の趙氏の裔にして、歸化して、長崎に住す。有名なる書家なり。天明六年四月歿す。年七十四。

てりちわん (手打崎) [地] 薩摩國下飯嶋の南端にして、東に手打崎を推

へ、灣口には鼻瀬あり。附近漁業者多きを以て、船舶の出入甚だ多し。
 てらづばちいし (手洗鉢石) [地] 加賀國能美郡大汝、四塚の溪間にあリ。高さ七尺、長さ十八尺。石の上面に二尺許の凹あり。中には四時水盡きすと云ふ。三岩は牛首東、岩山谷川の中にあリ。各高さ十五間、横四十間許。立石は牛首川の傍ら桑嶋にあり。長十間、幅八間。石下より清泉噴出す。平石は宇大杉谷口の牛首川にあり。川底一面の磐石にして、壘を敷きたるが如し。劔刀の窟は市瀬より大御前に登る一里許にあり。高さ五間、幅二間余。同上方には仙人窟あり。
 てらでんじ (朝田寺) [地] 伊勢國飯南郡にあり。天台宗にして、延暦十

五年、僧空海創立、正應中、僧尊重伏見院の院宣を奉じ、七堂伽藍を創建す。
 てらでんす (兆殿司) (人) 名は明兆淡路國の人にして、東福寺の殿司たるを以て、世に、兆殿司と稱せらる。有名なる佛師工なり。
 てらばらかく (眺望閣) [地] 大坂府難波停車場の南にあり。明治二十一年の建築にして、五層造の高閣なり。樓上最高の處に至れど、大坂全市、大坂灣、淡路海、播磨紀河の連山一目の中に收まり、眺望最も住なり。
 てらやさうぶんはるか (朝野舊聞哀稿) [書] 徳川氏の遠祖より、元和年中に至る迄の事を詳記したるものにして、林衝の著なり。
 てらやんざい (朝野群載) [書]

専ら、官府に關せる文章を載せたるものにして、三善爲康の著なり。
 てらやざうき (朝野雜記) [書] 平維翰の隨筆なり。
 てられしま (手賣嶋) [地] 天壇國西方にあり。周回三里弱。
 てらわ (調和) (人) 姓は岸本氏、名は友正、猪右衛門と稱す。奥州の人、江戸に住す。有名なる俳人なり。正徳五年十月歿す。年八十二。
 てかさかぬなが (手搔包水) (人) 通稱は平三郎、大和國手搔鍛の始祖なり。正應頃の人。
 てがぬま (手賀沼) [地] 下總國東葛飾郡にあり。下流利根川に會す。東西三里。南北三十町余。
 てがらのさかもち (手柄岡持) (人) 通稱は平澤平格、有名なる狂歌

師にして、専ら、戯作を善くす。文化十年五月歿す。年七十九。
 てらぢのふつね (出口延經) (人) 帶刀と稱す。延佳の子、有名なる和學者なり。正徳四年八月歿す。年八十一。
 てらぢのふよし (出口延佳) (人) 本姓は度會氏、講古と號す。伊勢外宮の神官にして、神道の學に精しく故典に通す。宮崎文庫は此人の建てたるものなり。元祿三年二月歿す。著書甚だ多し。
 てらな (手古奈) (人) 下總國真間に生る。故に、真間の手兒奈と云ふ。容姿殊に美なるを以て、婚を求むるもの多し。手兒奈痛く之を厭ひ、自ら、真間の入江に沈みて死す。舒明天皇時代の人なり。或は云ふ。允恭

天皇の時の人なりと。

てこねのやしろ (手兒奈社) [地] 下総國鴻之峯真間にあり。真間の手兒奈を祭る。

てじないちぎゑもん (手品市左衛門) [人] 有名なる淨瑠璃家にして、遂に、一派を始む。手品節と云ふ。河東節は多く此派に出づと云ふ。

てしほがは (天塩川) [地] 又、西ノ母川と云ふ。天塩國にあり。源を天塩岳に發し、天塩郡に至りて海に注ぐ。長さ七十余里。

てしほがたけ (天塩岳) [地] 天塩國上川郡の東南端に位し、東方北見國に跨る。國中第一の高嶺なり。

てしま (手嶋) [地] 讃岐國鹽飽諸嶋の一にして、廣嶋の西北二十町余にあり。周回二里半余。

てしま (豊嶋) [地] 讃岐國小豆嶋の西方にあり。周回五里許。

てしまくわんじやていたくのこせき (豊嶋冠者邸宅古跡) [地] 攝津國豐能郡西市場にあり。東鑑云、元暦二年十一月五日甲申關東發遣御家人等入洛、二品忽怒之趣、先申ニ

左府ニ云云、今日豫州至三河尻之處、攝津國源氏多田藏人太夫行綱、豊嶋冠者等、遮ニ前途ニ聊發ニ矢石、豫州懸敗之間不能挑戰、然而豫州勢以零落、所レ殘勢不レ幾云云。

てしまとあん (手嶋堵菴) [人] 通稱は近江屋源右衛門、晩年嘉左衛門と改む。京都の人にして、有名なる心學者なり。天明六年二月歿す。年六十九。

てしやかじ (出釋迦寺) [地] 讃岐

國仲多度郡にある曼荼羅寺の奥の院なり。宗善道人の建立にして、四國遍路第七十三番の札所なり。

てつねう (鐵翁) [人] 俗姓は日高氏、長崎春徳寺の僧、祖門と號す。有名なる南宗畫家にして、清國人の從學するもの多し。明治四年十二月歿す。年八十一。

てつかいがたけ (鐵拐嶽) [地] 攝津國武庫郡の西南境に位し、播磨國に跨る。

てつがじやう (鐵城) [地] 岩代國安達郡の西北隅に位する山岳にして、高さ五二〇〇尺。其東南に安達太郎山、和尚山、南方に船明神山、勝軍山等あり。

てづかいたらう (手塚太郎) [人] 光盛と稱す。木曾義仲の將なり。越前

成合の戦に、平家の將齋藤實盛と搏して其首を獲たり。

てつがん (鐵眼) [人] 姓は佐伯氏名は道光、肥後國の人、初め一向宗の僧なりしが、後、去て黄檗山に入り、葉を木菴禪師に受け、其後を承く。天和二年寂す。年五十三。

てつぎやう (鐵牛) [人] 南都相國寺の僧。玉腕子につきて有名なる畫僧なり。特に蘭をよくす。

てつぎん (鐵山) [人] 甲斐の人、京都妙心寺の住僧なり。最も博學の名あり。徳川家康の信籠するところとなり、天正三年、天顏に咫尺す。寂年詳ならず。

てつしや (鐵舟) [人] 山岡鐵舟におなり。

てつちやう (鐵腸) [人] 末廣重恭に

おなど。

ていつる (鐵槌) 【書】徒然草を註釋したるものにして、青木宗湖の著なり。

ていつる (鐵槌増補) 【書】徒然草の註釋にして、槌鐵に基き、其他釋書の要を抄録したるものにして、山岡元隣の著なり。

ていつる (鐵砲崎) 【地】羽前國西田川郡加茂港の北西端にあり。南方なる荒崎と相對して港口を擁せりとどこら 【地】薩摩國上飯嶋の東南端沿岸の稱なり。

ていつる (手取川) 【地】加賀國にあり。國中第一の大河にして、源を白山脈に發し、西北流して諸水を入れ、美川町に至りて海に入る、長さ二十里。

てはてひ (手宮山) 【地】一名センシカ森と云ふ。土佐國土佐郡の西北隅に位し、山勢峻拔、遙かに伊豫の石植山と相對峙す。

てはてひ (出羽神社) 【地】羽前國東田川郡にあり。國幣小社にして、伊氏波神を祭る。推古天皇元年の創建なり。

てはてひ (出羽入道) 【人】二階堂定藤におなじ。

てはてひ (手結岬) 【地】土佐國香美郡の南沿岸東端にありて、手結港を擁せり。

てはてひ (あちせんせん) (帖佐岩淵温泉) 【地】大隅國始良郡にあり。明治九年の發見にして、泉質鹽類泉なり。

てはてひ (調生野嶺山) 山内提雲會て、石鏃、石劍、雷斧、及び、陶器、古燭燂を土中に掘り得たるを聞き、明治十一年來觀し、其時、亦、此石碑を發見したりと云ふ。碑文は今寫して東京大學にあり。

てはてひ (堀田正元の女にして、柱貫院(阿玉方)の侍女たり。將軍綱吉之を愛し、寵幸厚かりき。明信夫人、及び、淨徳公子を生む。綱吉の歿後落飾して瑞春院と稱す。元文三年六月歿す。年八十。

てはてひ (天祐) 【人】有名なる禪僧にして、嘗て、唐に學ぶこと十三年、歸朝して、京都に勝林寺を開き、専ら、講説につとめたり。

てはてひ (天一坊) 【人】名は改行、初めの名は玉之助、寶澤と稱す。紀伊國の人。幼にして、狩稽に長ず。

【地】豊後國日田郡にあり。金、銀を産出す。製出高、凡そ、金九千匁、銀六千五百匁。

てん (蝶夢) 【人】幼阿、五升庵等の別號あり、有名なる京都の俳人なり。寛政四年十二月歿す。年五十一

てん (出水川) 【地】出右衛門) 【人】御所が浦平太夫の弟子にして、有名なる江戸の力士なり。當時天下無双の力士と稱したる谷風と角して之に勝てり。後、天津風定右衛門と改む。寛政頃の人。

てん (出水濱) 【地】攝津國西成郡住吉公園の西端にある高燈籠の附近の稱なり。

てん (手宮石碑) 【地】後志國小樽區にあり。石を鏃りて發見せしものなり。初め榎本武揚、

八代將軍徳川吉宗の落胤なりと偽り諸所に於て、數萬金を騙取し、後、江戸に出て、將軍に謁せん。偶々、名奉行大岡忠相のために看破せられ、享保十四年、梟首せらる。年二十四。

てんかい (天海)〔人〕慈眼におなド。
てんかいじ (天界寺)〔地〕琉球國首里區金城にあり。臨濟宗にして、國王の子女幼沖者の木主を祀る。首里三大寺の一なり。

てんがぢやや (天下茶屋)〔地〕攝津國東成郡天王寺村にあり。地は、住吉街道に方り、道の西側に茶亭あり。即ち、天下茶屋と稱。相傳ふ。昔時、豊臣秀吉、堺の政所に往復の途次、屢々此茶店に入りて、風景を賞せり。故に此名あり。後、汽車の

宮とも云ふ。澎湖本嶋媽宮城内にあり。宮は道教に属し、宋代の女子林氏を祭るもの、所謂、天上聖母是なり。渡海の危険を保護すを稱せられ、臺灣各地に於いて、甚だ、尊崇せらる。

てんざん (天山)〔地〕加賀國白山の別稱なり。

てんしがたけ (天子嶽)〔地〕駿河國富士郡の西北隅に位し、甲斐國に跨る。

てんしくわん (天使館)〔地〕琉球國那覇區にあり。往古、支那冊封使を迎へし所なり。

てんじん (天神)〔人〕贈正一位太政大臣菅原道實を云ふ。

てんじんがは (天神川)〔地〕伯耆國東伯郡にあり。水源四あり。一を竹

通下てより次第に衰微し、今は、只其跡を存するのみなり。

てんいしやま (天狗石山)〔地〕一名天狗石橋山と云ふ。駿河國志太郡の北部に位す。高さ四一五八尺。
てんぐやま (天狗山)〔地〕伊豫國宇摩郡にあり。高さ五五〇〇尺。
てんびらだいし (傳教大師)〔人〕最澄におなド。

てんびじ (天華寺)〔地〕伊勢國一志郡にあり。曹洞宗にして、天智天皇勅建、(或は孝徳天皇御宇小山長圓創建す云ふ)、元和中、徳川頼宣の祈願所たり。

てんけんぎき (田檢崎)〔地〕大隅國大嶋の西方、焼内灣の南沿岸にある冠山の山脚突出したる所を云ふ。
てんこうさう (天后宮)〔地〕又媽祖

田川、一を三朝川、一を小嶋川、一を新村川と云ふ。四水相合し、北流して日本海に注ぐ。長さ九里余、國中第二の大河なり。

てんじんばし (天神橋)〔地〕大坂市にあり。淀川に架せる、大坂第一の長橋にして、長さ百三十一間余。明治十八年、流失の後、新に構造堅牢なる鐵橋をなし奇巧を極む。實に市内の壯觀たり。

てんじんばな (天神鼻)〔地〕播磨國家嶋の東北端にあり。西方尾崎鼻と相對して家嶋港を擁す。

てんじんやま (天神山)〔地〕備中國阿哲郡の西南隅に位す。高さ二七八二尺。伊勢國宇治山田町なる城山の西方に位す。往昔山下に菅廟ありしを以てかく名づく云ふ。備

前國和氣郡の西北端に位す。高さ一三五〇尺。

てんしやうじ (天性寺) [地] 和泉國岸和田町にあり。俗に蛤地藏と稱す。本尊地藏菩薩の像は、建武年間、蛤の背に乗りて岸和田の海中に出現したるものなりと云ふ。

てんじやうはらやま (天井原山) [地] 長門國豊浦郡の北端に位す。高さ二三六九尺。

てんじゆゑん (天樹院) [人] 毛利輝元の院號なり。

てんしゑん (傳編院) [地] 甲斐國中巨摩郡にあり。曹洞宗にして、祖繼和尚開山、文龜元年、三輪の神主今澤貞重佛法に歸依して建立す。

てんせうくわうだいじん (天照皇大神) [人] あまてらすおほみかみ

老後に及び、壯歲貿易のため、印度に渡りたる折、見聞したる事實を記したるものなり。これより自ら天竺徳兵衛と稱せり。

てんぢくといへる (天竺徳兵衛) [人] 攝津國の人なり。幼にして、印度に渡航す。後、雍髪して宗心と號す。貞享年中寂す。年六十九。

てんぢくらうじん (天竺浪人) [人] 平賀源内の別號なり。

てんぢくらうじん (天竺浪人) [人] 姓は藤枝氏、名は雷藏、江戸の人、徳川氏の徒士たり。人となり磊落多能、和歌、書畫、圍碁等に達し、特に、狂歌、川柳に名あり。常に、大酒を好み、奇行甚だ多し。

てんぢてんわう (天智天皇) [人] 御名は中大兄、舒明天皇の皇子にし

を申す。

てんぢとじやうべんべん (天祖都城辨辨) [書] 天照大神の都は高天原にありと云ふことを論じたるものにして、忌部濱成の著と云ふも、確かならず。

てんぢん (天孫) [人] 天照皇大神の御孫瓊杵尊を申す。

てんぢいざん (天台山) [地] 山城國比叡山の別稱なり。

てんたくじ (天澤寺) [地] 尾張國常滑町にあり。寶壺山と號す。曹洞宗にして、往昔常滑城主水野監物創建、周鼎和尚の開山なり。○甲斐國中巨摩郡にあり。曹洞宗にして、文明四年、僧道元の開基なり。

てんぢくといへるのがたり (天竺渡海物語) [書] 高砂の人、徳兵衛

て、御母は皇極天皇、人皇第三十八代の天皇たり。在位十年(紀元一三二二—一三三二)にして、白鳳二十二年十二月崩す。壽四十六。

てんぢゆうせき (天柱石) [地] 越中國東礪波郡にあり。高原中に一巨岩の天に冲するものにして、其形状巨魚の直立して、半身を顯すが如く、脊あり、腹あり、高さ二十丈余、幅二十間許、其頂には喬木を生すれども、其名を知らずと云ふ。

てんぢゆうせつ (轉註説) [書] 轉註につきて詳論したるものにして、狩谷掖齋の著なり。

てんぢうゑん (傳通院) [地] 東京市小石川區にあり。無量山壽經寺と號す。浄土宗にして、十八壇林の一に位す。應永十二年創建、了譽上人の

開基なり。

てん-どろ (天童)〔地〕羽前國にある市街にして、織田氏の舊藩地なり。

てん-とく-じ (傳燈寺)〔地〕加賀國河北郡にあり。臨濟宗の古刹にして、一國一寺の勅願所なり。元徳二年一宇を創建し、曆應二年、光明天皇勅を下し給ひ、長連を開山として、七堂の伽藍を造營せしめらる。

てん-とく-じ (天徳寺)〔地〕○羽後國南秋田郡にあり。曹洞宗にして、佐竹右京大夫義人夫人創建、僧伊莠の開基なり。○周防國佐波郡にあり。曹洞宗にして、萬年山と號す。源頼朝の開基なり。○東京市芝區にあり。浄土宗にして、僧縁譽開基す。天文二年の創建に係る。

てん-とく-じ-れう-はく (天徳寺了伯)

てん-はい-さん (天拜山)〔地〕筑前國

二日市町にあり。山上に天満神社ありて菅公の靈を祀る。但俗相傳ふ。菅公此山に登りて、冤を天に訴へ、天満自在天神の尊號を下し給ひぬ。山上に小祠あり。祠の傍に天拜石あり。

てん-ばり-さん (天保山)〔地〕一名、

目標山と云ひ、又、瑞軒山、波除山と云ふ。攝津國大坂市の西端、安治川河口の南岸に位し、西區天保町に屬する一岡丘にして、阜上に燈臺を設け、入津船舶の目標とす。又、傍に砲臺あり。

てん-び-さん (天妃山)〔地〕○一名辨

天山と云ふ。紀伊國和歌山市の中央に位する高丘なり。現今公園地にして、山上山下櫻樹を植う。山嶺は峻

〔人〕佐野了伯におなり。

てん-とく-ある (天徳院)〔人〕織田信長の院號なり。

てん-とく-ある (天徳院)〔地〕加賀國金澤市にあり。曹洞宗にして、元和九年、前田利常、其室天徳夫人のため創建し、寛永元年、將軍秀忠の命に依り、安房の長安寺泉滴和尚を以て開祖とす。

てん-ねん-じ (天然寺)〔地〕伊勢國安濃郡にあり。浄土宗にして、慶長元年、僧露牛創立、藤室高虎之に歸依し、封内の寺院を支配せしむ。故に時人総統大寺と稱せり。

てん-の-かは (天川)〔地〕一名、箕浦川と云ふ。近江國坂田郡にあり。源を伊吹山、彌高山等に發し、西南流して琵琶湖に注ぐ。長さ五里余。

嚴重疊し、巖上には、戦死者の紀念

碑あり。○常陸國多賀郡の東北端。大北川の河口水中にあり。古名を折藻山と云ふ。高さ凡そ五六十尺、周回三町許、翠巖峨々として聳え、山水相映し、附近有數の奇勝なり。

てん-ま-だき (天覽瀑)〔地〕美作國久

米郡にあり。弓削川の水源にして、高さ一二〇尺、幅三〇尺。

てん-ま-ばし (天満橋)〔地〕大坂市淀

川に架せり。此橋は、舊、木造にして、今の處よりは、半町許東に架せしを、明治十八年の洪水後、新に鐵橋となせり。構造は、稍、天神橋と同じく、長さ百十七間余、幅六間あり。大阪市第二の長橋とす。

てん-ま-べつ-ある (天満別院)〔地〕一名、佛生寺と號す。大阪市北區に

あり。眞宗大谷派の別院にして、見眞大師の開基なり。

てんまんじんじや (天満神社) [地]

◎大阪市北區にあり。府社なり。菅原道眞を祭り、蛭子、猿田彦、手力雄の諸神、及び、野見宿禰を合祀す。天曆年中の創建なり。◎近江國伊香郡にあり。縣社にして、菅原道眞を祭る。

てんみやうまち (天明町) [地] 下野國佐野の別稱なり。

てんむてんあう (天武天皇) [人]

御名は大湖人、舒明天皇第二の皇子にして、人皇第四十代の天皇たり。在位十五年 (紀元一三三二—一三四六)にして、朱鳥元年九月崩す。壽六十五。

てんむてんあうあんきゆうし

(天武天皇行宮址) [地] 美濃國關ヶ原大字野上附近にあり。往昔は桃配野と稱しき。また、野上は當時街道の一驛たりきとぞ。

てんめいひふらう (天明入道) [人]

俗稱は小切間甚五郎、下手内匠、飛騨山人等の號あり。有名なる江戸の狂歌師にして、當時、狂歌堂眞顔と名を等くす。文久元年五月歿す。年八十一。

てんもくざん (天目山) [地] 甲斐國北都留郡の西境に位す。高さ三五〇

〇尺。天正十年三月、武田勝頼、織田氏と戦ひ、敗れて自盡し、武田氏の滅びたる古戰場なり。

てんりうがは (天龍川) [地] 一名、

天中川と云ふ。信濃、及び、遠江の兩國を流通し、三河國北設樂郡境を

限れる大河にして、源を信濃國諏訪郡の西部、諏訪湖に發し、南下して、諸川を合せ、遠江國磐田郡に至りて、海に注ぐ。長さ凡そ六十里余。二十五里の間舟楫の便あり。

てんりうじ (天龍寺) [地] ◎山城國葛野郡にあり。靈龜山と稱し、禪宗の一本山なり。僧疎石開基、曆應二年、光嚴上皇の勅を奉り、足利尊氏創建す。◎武藏國秩父郡にあり。天台宗にして、長和元年草創、惠聖上人の開山なり。本尊聖太權現は、日本唯一の佛鉢と稱して、其名殊に高し。

てんりうじせん (天龍寺温泉) [地] 山城國葛野郡にあり。泉質炭酸泉なり。明治九年の發見たり。

てんあうざん (天王山) [地] 山城國

乙訓郡の南端にあり。高さ九九〇尺。

天正十年六月、明智光秀と羽柴秀吉と山崎に戦ひし時、此山を争ひ、遂に、秀吉の勝利に歸したるの地たり。

てんあうじ (天王寺) [地] ◎東京市下谷區にあり。天台宗にして、本尊毘沙門天は、傳教大師の作なりと云ふ。◎大坂府南區天王寺町なる四天王寺附近にあり。天文十五年七月、

島山高政、三好宗三と大に舍利寺に戦ひたる古戰場なり。◎琉球國首里區にあり。臨濟宗にして、殿堂の宏壯なること圓覺寺に彷彿たり。首里三大寺の一なり。

てんあうちはりきげん (田園地方紀原) [書] 我が國古來の田園の制度を考究したるものにして、朝川善庵の著なり。

てゆ。てら (出湯温泉)〔地〕越後國北蒲原郡にあり。大同二年、僧空海の發見にして、泉質鹽類泉なり。てら。かど。せい。けん (寺門靜軒)〔人〕名は良、彌五右衛門と稱す。有名な江戸の儒者なり。人となり、快濁洒落にして、諸國を周巡し、諷刺の文を善くす。天保十三年、江戸繁昌記を著して、幕府の忌諱に觸れ、江戸を逐はる。爾來、剃髮して、自ら無用の人と稱し、風流を樂む。明治元年二月歿す。年七十三。

てら。さか。の。ぶ。ゆき (寺坂信行)〔人〕吉右衛門と稱す。淺野長矩の臣吉田兼亮の部下にして、赤穂四十七士の一人たり。元祿十五年十二月、同志と共に、仇を復して、泉岳寺に到り、選ばれて事の由を長矩の弟、長廣に

報じ、再び、江戸に出でて、幕府に自首す。然れども、事の過ぎたるを以て、罪を問はれず。延享四年十月歿す。年八十三。

てら。さき (寺崎)〔地〕○周防國笠戸嶋の北部東北端にありて、笠戸港を擁す。○伊豫國北宇和郡の西南端にあり。地脉西方に斗出すること一里半余。最端を由良岬と云ふ。

てら。ざ。は。い。う。さい (寺澤友齋)〔人〕名は政長、友太夫と稱す。有名なる江戸の書家にして、寺澤流書法の祖なり。元文六年正月歿す。年七十一。

てら。しま (寺嶋)〔地〕○肥前國彼杵半嶋の西方にあり。周回一里半余。嶋上に燈臺あり。○肥前國宇久嶋の西南方にあり。周回二里許。

てら。じま。まさ。あき (寺嶋昌昭)〔人〕

字は子大、忠三郎と稱し、刀山と號す。長藩の士にして、勤王家なり。少うして吉田松蔭に學び、國事に奔走す。後、久阪通武等と共に、鷹司邸に自殺す。年二十三。

てら。じま。む。の。り (寺嶋宗則)〔人〕鹿兒嶋の藩士にして、蘭法の醫官たり。文久年間英國軍艦の鹿兒嶋に來襲せる時、藩主の命を受けて、軍艦に到り、大に説く處ありしが、遂に、艦中に幽せられ、率ゐて英國に皈る。留まること二年、其間、刻苦精勵、大に得る處あり。歸朝後、明治政府に仕へて、功勞多し。明治十七年、功を以て、華族に列せられ、伯爵を授けらる。同二十六年六月歿す。年六十一。

てら。じま。り。や。あ。ん (寺嶋良安)

〔人〕字は尙順、杏林堂と號す。大坂の名醫にして、法橋に叙せらる。最も、和漢の學に精通し、和漢三才圖繪等の著あり。

てら。な。まさ。し。げ (寺田正重)〔人〕勤右衛門と稱す。有名なる柔術家にして、起倒流柔術の祖たり。

てら。ざ。をん。せん (寺田温泉)〔地〕日向國宮崎郡にあり。泉質單純泉なり。

てら。ど。まり。の。みなと (寺泊港)〔地〕越後國三嶋郡西海岸の北端にして、港は二つに分る。西南に波止場を築く。長さ二町三十間。大船を泊すべからざるも、佐渡に航する要津にして、船舶の出入頻繁なり。

てら。の。く。あ。う。ざん (寺野鑛山)〔地〕伊豫國伊豫郡にあり。銅を産出す。

製出高凡そ二万斤。

てらべーのりみつ (寺部宣光) (人)

三河國八幡の人。寺部阿波守と稱せり。

てらもとしやうしーのすげ (寺本

生死之助) (人) 尼子十勇士の一人なり。

尼子十左衛門、毛利氏に通じ、

義久を殺さんと謀り、其家を圍む。

寺本、山中鹿之助と共に、十左衛門

討ちて之を平ぐ。其他軍功多く、常

に勇戦、人を驚かしたり。

てらやま (寺山) (地) 一名吐月峰と

云ふ。下野國壺谷郡の東北部に位し

壺原山群峰の一に属す。山麓に妙雲

寺あり。本尊釋迦如來は、毘首羯摩

の梅檀香水を以て刻みし靈像にして

小松内府重盛の歸仰せしもの、即ち

本朝三釋迦の一なり。

てらやまーれいせん (寺山冷泉) (地)

磐城國東白川郡にあり。泉質單純泉

なり。

てらるびんけい (寺井玄溪) (人)

赤穂侯淺野長矩の儒官たり。江戸に

あり。變作るに及びて京都に還り、

復讐の議に與る。然れども其醫官た

るも、仕官後日向淺きを以て、大石

其雄切諭して、京都に留め、以て後

事を託す。玄溪依て子玄達を道はし

て、義士の疾を護せしめたりと云ふ

正徳元年歿す。

てらるやうせつ (寺井養拙) (人)

名は子共、有名なる京都の書家にし

て、世に、養拙様と稱せらる。後、招

牌を書くもの、皆、此書風を用ゐる。

正徳元年七月歿す。年七十五。

てらをくわーざん (寺尾嶺山) (地)

安藝國廣嶋に在る。

てをのたき (手斧澤) (地) 薩摩國川

邊郡にあり。五條に落下す。高さ一

三〇尺。下流三町にして、又、小野

澤なる。

てら

とーあきぬま (斗阿佐沼) (地) 膽振

國にあり。周回一里余。

とーいしじんじや (遠石神社) (地)

一名遠石八幡宮、又、花岡八幡宮と

云ふ。周防國都濃郡にあり。縣社に

して、應神天皇、神功皇后、姫神を

祭る。和銅元年の創建なり。

とーいちせきこく (十市石谷) (人)

名は資、字は子元、恕輔と稱す。豊

後杵築藩の士にして、有名なる書家

てらをくわーざん (寺尾嶺山) (地)

泉なり。

てらをんせん (寺尾温泉) (地)

越後國三嶋郡にあり。天明以前の發

見にして、泉質單純泉なり。

てらくぼーじんじや (照國神社) (地)

薩摩國鹿兒嶋市にあり。別格官幣社

にして、嶋津齊彬を祭る。文久三年、

明彦神勳照國命の神號を賜ふ。元治

元年十二月の創建なり。

てらひろ (輝廣) (人) 姓は藤原氏、

藤四郎と稱す。有名なる美濃國關の

なり。嘉永六年歿す。年六十一。

とらいちとほたて (十市遠忠)〔人〕

大和國の人にして、有名なる歌人なり。兵部少輔に進み、能書の聞えあり。天文十四年三月歿す。年四十九。

とらいつらぬま (斗以斗宇沼)〔地〕

十勝國にあり。周回六里余。

とらいつらき (東遊記)〔書〕東方諸國を漫遊したる紀行文にして、橋南翁の著なり。

とらいつらでるん (東一條院)〔人〕

順徳天皇の中宮にして、藤原立子と申す。後、薙髮して、清淨觀と號す。高雅にして、算言、箏、及び、和歌に巧なり。嘉祿元年十二月薨す。年五十七。

とらいつらじ (洞雲寺)〔地〕陸前國宮城郡にあり。曹洞宗にして、有名な

る寺刹なり。應永七年七月の創建たり。

とらいつらやすちか (東雨安親)〔人〕

奈良の人、奈良辰政の弟子にして、有名なる彫工なり。延元元年歿す。

とらいつら (冬映)〔人〕

姓は牧氏、桂窓、紫陽館等の諸號あり。三世湖十の門人にして、有名なる江戸の俳人なり。

とらいつら (等悦)〔人〕

肥後の人、雪舟の門人にして、名高き畫人なり。最も山水人物に長ぜり。

とらいつら (東雅)〔書〕

言語を蒐集、分類し、及び、解釋したるものにして新井白石の著なり。

とらいつらじ (東海寺)〔地〕

武藏國品川町にあり。禪宗にして、寛永十二年、徳川家光創建、澤菴和尚の開山

なり。

とらいつら (東海道)〔地〕

我國本州中南方海に面したる國々、即ち、伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武藏、安房、上総、下総、常陸の十五ヶ國を云ふ。

とらいつら (東海道五十三次)〔地〕

徳川時代に定めたる、江戸、京都間にて、旅人の宿泊せし五十三の驛所。

とらいつら (東海)〔書〕

東海道名所記(地)淺井了意の著作。文章は滑稽にして、二百余年前の風俗手に取るが如し。

とらいつら (東海談)〔書〕

東海の談話集なり。東海は、江戸の儒者にして、維章、又、維翰と號す。

とらいつら (東海園鶴群)〔人〕

通稱は坂上甚兵衛、東京の人、東海園船唄の男にして、有名な狂歌師なり。明治二十八年九月歿す。年六十一。

とらいつら (東海園船唄)〔人〕

通稱は坂上甚兵衛、東京日本橋區の人、有名な狂歌師なり。明治三年正月歿す。年六十六。

とらいつら (東郷池)〔地〕

一に東江池に作る。伯耆國東伯郡にあり。周回二里半余。池中に温泉を湧出す。

とらいつら (豊前國京)〔地〕

都郡にあり。天台宗にして、天平六年、奈良東大寺の僧惠空の開基なり。

とらいつら (地金)〔地〕

上總國山武郡の東南部にあり。銅丸鑛

山)〔地〕石見國邑智郡にあり。銀、銅を産出す。製出高凡そ銀五十五万五千匁、銅五十二万斤。

とろさきうじよ (燕九如)〔人〕姓は井戸氏、名は弘梁、字は仲漁、徳川幕府の士にして、西丸扈從たり。畫法を宋紫石に學び、遂に一家をなし、其名大に顯はる。享和二年七月歿す。年五十九。

とろさきかねあき (東儀兼秋)〔人〕姓は秦氏、天王寺の樂人たり。元龜年中、正親町天皇に召されて京師の樂官となり、因幡守に任ぜらる。寛元二十一年四月歿す。年八十五。

とろさきかねより (東儀兼頼)〔人〕姓は秦氏、安倍季兼の孫にして、天王寺の樂人たり。元祿年中、辻高秀等と並び稱せられ、優に一方の泰斗

たり。正四位下越前守に任ぜらる。正徳二年四月歿す。年八十一。
とろさきやう (東京)〔地〕關東平原の南部、荒川、多摩川の流域、内海に濱する形勢無雙の地位を占め、人口百四十四萬を有する本邦の首府にして、東洋第一流の大都、又、世界第六位の大都會とす。市區は隅田川の兩岸に跨り、長さ、凡そ四里半、横四里に亘る。全市を十五區に別つ。則ち、麴町、神田、日本橋、京橋、芝、麻布、赤坂、四谷、牛込、小石川、本郷、下谷、淺草、本所、深川是なり。もこ江戸と稱せりしを、明治元年七月、今の名稱に改む。
とろさきやうじ (東行寺)〔地〕肥前國佐賀市にあり。日蓮宗にして、永正十五年十月創立、行學院日政上人の

開山なり。

とろさきやうわん (東京灣)〔地〕武藏上總の間に灣入せる内海にして、相模の觀音崎と、上總の富津崎と相對して、其口を扼せり。南北十三里、東西七里に及び、海濱は概ね淺洲なれども、西海岸には、二三の良港あり。

とろさきよりはる (東儀頼玄)〔人〕幼名を雄之助と云ふ。辻近敦の第七子にして、東儀如壽の養子となる。(如壽は兼頼五世の孫なり)、最も横笛に長ず。嘉永三年、伊勢守に任ぜられ、明治の初め中伶人に任ず、後、伶人長に進む。同十七年、更に雅樂師に任ぜらる。明治三十一年十二月歿す。年六十五。

とろさきりさき (銅切崎)〔地〕肥前國

中通嶋の南端にあり。若松嶋の白崎に對し、若松瀬戸の南門を扼す。
とろさきやうじやう (東宮城)〔地〕阿波國麻植郡にあり。土御門天皇の暫し坐しましたる跡にして、今なほ、御泉と稱する泉、御狩と稱する所などあり。宮城の名、また、之に因めるなりと云ふ。

とろさきやうやま (東宮山)〔地〕一名高倉山と云ふ。備前國赤磐郡の西南部に位す。高さ一四二二尺。
とろさきわらじ (東光寺)〔地〕○下總國酒井町にあり。大廣山と號す。

眞言宗にして、建長六年、知恩院俊譽上人の開基なり。○長門國阿武郡にあり。禪宗にして、元祿四年、毛利吉就造營、慧極道明和尚の開山なり。○紀伊國東牟婁郡にあり。天台

宗なり。往古、鳥羽天皇の勅願所として創建。天正十八年、豊臣秀吉、片桐且元を奉行として修繕せしめたり。

とろくわうじ (洞光寺) [地] 丹波國多紀郡にあり。曹洞宗にして、應安七年、天鷹和尚の開基なり。

とろくわしふ (東華集) [書] 支考が行脚到る處の句集なり。元祿十三年の刊行。

とろくわんきから (東關紀行) [書] 源親行が、京都より東國へ下る時の紀行文なり。

とろくわんきからしやうかい (東關紀行詳解) [書] 鳥野幸次の著作。一々語句に詳解を施したるもの。

とろけうざん (東教山) [地] 佐渡國佐渡郡の中央に位す。高さ二一三三

尺。

とろけひでん (東家秘傳) [書] 日本紀につきての秘説を擧げたるものにして、北畠親房の著なり。

とろこ (東湖) [人] 「ふちたさうこ」を見よ。

とろこくからうでん (東國高僧傳) [書] 高僧、教家の傳記を集めたるものにして、僧高泉の著なり。

とろこしよわ (東江書話) [書] 書道に關することを詳悉したるもの。澤田東江の著なり。

とろさいざるひつ (東齋隨筆) [書] 和漢の雜誌を記せるものにして、一條兼良の著なり。我國隨筆書の初めたり。

とろざんがは (銅山川) [地] 一名山城川、又、栗下川、金砂川と云ふ。

伊豫國宇摩郡の西南隅、別子銅山に發源し、東北流して、下流を伊豫川と云ひ、吉野川に會す。長さ凡そ十一里。

とろざんぢう (東山道) [地] 東海道の北部にある國々、即ち、近江、美濃、飛騨、信濃、上野、下野、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後の十三ヶ國を云ふ。

とろざんでうさいじん (東三條左大臣) [人] 源常を云ふ。

とろざんでうさいしん (東三條大臣) [人] 藤原兼家を云ふ。

とろざんでうのたいしやう (東三條大將) [人] 藤原兼家を云ふ。

とろざんにふぢう (東山入道) [人] 藤原道家を云ふ。

とろじ (東寺) [地] 京都市下京區の

南端にあり。一に教王護國寺と號す。眞言宗總本山にして、延暦十五年、桓武天皇、東瀟瀟を捨てて東寺となし、西瀟瀟を捨てて、西寺となす。僧空海唐より歸朝の後、勅して東寺に居らしむ。弘仁十四年、東寺長者職を以て、空海に賜ひ、灌頂道場となす。その五層大塔は天長三年に成りたりと云ふ。

とろじぢさき (童子瀧) [地] 越後國西頸城郡にあり。高さ二四〇尺、幅六尺。

とろじやうがは (東城川) [地] 一に東條川に作る。備後國比婆郡の東北境なる道後山に發源し、南流して下流備中國に入り成羽川となる。流程州界まで十三里余。

とろしやうじ (東聖寺) [地] 常陸國

那珂郡にあり。淨妙山徳定院と號す。眞言宗新義派にして、文安二年、法長宥僧正の開基なり。

とちじゆん (藤樹) (人) 中江藤樹におなす。

とちじゆん (洞授) (人) 俗姓は日下氏、三河の人、舜國と號す。有名なる禪僧なり。慶長七年八月、京師に遊び、詔を奉下て入内し、紫衣、及び、心月圓光禪師の號を賜ふ。幾もなくして寂す。

とちじゆん (藤樹書院)

〔地〕近江國高嶋郡青柳村にあり。中江藤樹の講堂たりし所にして、院畔に老藤あり。藤樹の號はこれより起ると云ふ。

とちしゆん (等春) (人) 備前國の人。初め周文に學び、後、雪舟の門に入

とちしゆん (東勝院) (人) 北條

義時の院號なり。

とちしちちよしみつ (藤四郎吉光)

〔人〕粟田口吉光におなす。

とちしちちん (桃子園) (地) 臺灣嶋臺北市の西南五里余の地にあり。臺北、新竹間の通路にあたり、多く茶を産す。

とちしちちん (洞水雲溪) (人)

肥後國の人、攝津國法嚴寺の僧なり。名聲甚だ高く、來り教を請ふもの多し。天和三年九月京都に寂す。

とちせち (登昭) (人) 有名なる高僧

にして、京都一條坊に住す。最も、觀相に妙を得、人の動作、言語、俯仰等を聞きて、直に、禍福、吉凶を知るに、皆、的中せざるなし、相を乞ふもの常に門に滿つと云ふ。正徳

り、齋法大に進む。永正の比、名譽を以て海内に鳴れり。

とちじゆん (東純) (人) 全殿と號す。長門國大寧寺の住僧なり。元、出羽の人。幼にして羽黒山に登りて出家す。高德の譽あり。明應四年十二月寂す。

とちじゆん (藤樹院厚澤寺) (地) 日高國様似郡にあり。歸嚮山と號す。天台宗にして、文化元年創立、東叡山の僧秀曉の開基なり。堂宇宏壯、北海道中有名なる巨刹なり。

とちしちち (東勝寺) (地) 三河國牛久保町にあり。南岸山と號す。曹洞宗なり。鎮守金比羅權現は、皇國、支那、印度三國の土を以て製したる靈像なりと云ふ。

長曆頃の人なり。

とちせちちち (東照宮) (地) 駿河

國安倍郡にあり。別格官幣社にして、徳川家康を祭る。この地は、家康を營葬せし處なり。後、日光山に遷す。①下野國日光山にあり。別格官幣社にして、徳川家康を祭る。元和三年四月創建、正保二年十一月宮號を賜ふ。②上野國前橋市にあり。縣社にして、徳川家康を祭り。菅原道眞を合祀す。③陸奥國弘前市にあり。縣社にして、徳川家康を祭る。④紀伊國和歌浦町にあり。縣社にして、徳川家康を祭る。元和七年十一月の創建なり。⑤尾張國名古屋市にあり。縣社にして、徳川家康を祭る。元和五年の創建なり。⑥東京市下谷區にあり。府社にして、徳川家康を

祭る。寛永三年の創建なり。

とらせうりむら (東照宮)〔人〕徳川家康の神號なり。

とらせうしんくん (東照神君)〔人〕徳川家康におなり。

とらせうたいごんびん (東照大権現)〔人〕徳川家康におなり。

とらせき (洞甕)〔人〕遠江國の人、尾張國福殿寺の住僧なり。永正年中寂す。年八十五。

とらせんざん (頭前山)〔地〕臺灣嶋雲林の南方にある山。高さ、五〇〇〇尺。

とらせんじ (等漸寺)〔地〕①京都市下京區にあり。日蓮宗なり。高く石階を溪間に築き、優に洛東の一幽境たり。②下総國小金町にあり。佛法山一乘院と號す。關東十八壇林の

とらちざん (東素山)〔人〕姓は平氏、名は常氏、剃髮して壽尚院と號す。有名なる歌人なり。永祿年間、大將軍足利義輝、祖先常縁の故例に依りて素山を召す。素山大に悦び、行装を整へ、將に京師に朝せんす。會、義輝弑殺に遇ひて止む。素山詠じて曰く、「大方の袖だにしぼる五月雨に雲井の外も暮方のよや」。

とらたい (東壑)〔地〕東京市上野公園の別稱なり。

とらたいじ (東大寺)〔地〕大和國奈良市にあり。華嚴宗の大本山す。天平十六年、僧良辨の開基なり。本寺の中堂に金佛盧舍那佛を置く、俗

柳々州、歐盧陵、玉臨川、會南豊、蘇老川、蘇東坡、蘇子由の文を輯めたるものなり。

とらちざん (東素山)〔人〕姓は平氏、名は常氏、剃髮して壽尚院と號す。有名なる歌人なり。永祿年間、大將軍足利義輝、祖先常縁の故例に依りて素山を召す。素山大に悦び、行装を整へ、將に京師に朝せんす。會、義輝弑殺に遇ひて止む。素山詠じて曰く、「大方の袖だにしぼる五月雨に雲井の外も暮方のよや」。

とらたい (東壑)〔地〕東京市上野公園の別稱なり。

とらたいじ (東大寺)〔地〕大和國奈良市にあり。華嚴宗の大本山す。天平十六年、僧良辨の開基なり。本寺の中堂に金佛盧舍那佛を置く、俗

柳々州、歐盧陵、玉臨川、會南豊、蘇老川、蘇東坡、蘇子由の文を輯めたるものなり。

とらちざん (東素山)〔人〕姓は平氏、名は常氏、剃髮して壽尚院と號す。有名なる歌人なり。永祿年間、大將軍足利義輝、祖先常縁の故例に依りて素山を召す。素山大に悦び、行装を整へ、將に京師に朝せんす。會、義輝弑殺に遇ひて止む。素山詠じて曰く、「大方の袖だにしぼる五月雨に雲井の外も暮方のよや」。

とらたい (東壑)〔地〕東京市上野公園の別稱なり。

とらたいじ (東大寺)〔地〕大和國奈良市にあり。華嚴宗の大本山す。天平十六年、僧良辨の開基なり。本寺の中堂に金佛盧舍那佛を置く、俗

柳々州、歐盧陵、玉臨川、會南豊、蘇老川、蘇東坡、蘇子由の文を輯めたるものなり。

とらちざん (東素山)〔人〕姓は平氏、名は常氏、剃髮して壽尚院と號す。有名なる歌人なり。永祿年間、大將軍足利義輝、祖先常縁の故例に依りて素山を召す。素山大に悦び、行装を整へ、將に京師に朝せんす。會、義輝弑殺に遇ひて止む。素山詠じて曰く、「大方の袖だにしぼる五月雨に雲井の外も暮方のよや」。

とらたい (東壑)〔地〕東京市上野公園の別稱なり。

とらたいじ (東大寺)〔地〕大和國奈良市にあり。華嚴宗の大本山す。天平十六年、僧良辨の開基なり。本寺の中堂に金佛盧舍那佛を置く、俗

柳々州、歐盧陵、玉臨川、會南豊、蘇老川、蘇東坡、蘇子由の文を輯めたるものなり。

一。浄土宗にして、文明十三年創建、行蓮社經譽上人の開基なり。

とらせんじ (東禪寺)〔地〕下總國香取郡にあり。土橋山と號す。眞言宗にして、天平三年創建、唐僧鑑真大僧正來朝の時開基せし古刹なり。

とらせんぶろん (東澗夫論)〔書〕王室、霸府、諸侯の三項に分ちて、天下の經綸を論じたるものなり。帆足杏雨の著作す。

とらせんまんひつ (燈前漫筆)〔書〕人君の學問躬行の事より、下情を知る必要等、二十餘節に分けて詳述したるものにして、松平樂翁の著なり。

とらちりはちたいかふん (唐東八大家文)〔書〕唐、及び、宋、兩朝の文章の大家八人、即ち、韓退之、

に大佛と云ひ、熟銅七千三萬九千五百六十斤、白錫一萬二千六百三十八斤、鍊金一萬四百三十六兩、銅五萬八千六百二十兩を以て鑄造す。高さ五丈三尺五寸。

とらちりかひめ (藤堂采女)〔人〕津藩の老臣なり。侯高次の時、藩士各祖先の功に倚り、訴訟して止まず。藤堂新七、藤堂仁右衛門、各黨の主となり、攻撃日に甚し、采女深く之を憂ひ、黨士を集め、一々説諭して和交するを得たり。時人其忠烈を賞せり。

とらちりかひめ (藤堂高芥)〔人〕字は蘭卿、藤堂侯の族にして、世々番頭に任ぜらる。父高周の後を繼ぎて出雲と稱す。人となり温雅、學を好み、武藝、兵法に熟達す。士

とらちりかひめ (藤堂高芥)〔人〕字は蘭卿、藤堂侯の族にして、世々番頭に任ぜらる。父高周の後を繼ぎて出雲と稱す。人となり温雅、學を好み、武藝、兵法に熟達す。士

とらちりかひめ (藤堂高芥)〔人〕字は蘭卿、藤堂侯の族にして、世々番頭に任ぜらる。父高周の後を繼ぎて出雲と稱す。人となり温雅、學を好み、武藝、兵法に熟達す。士

とらちりかひめ (藤堂高芥)〔人〕字は蘭卿、藤堂侯の族にして、世々番頭に任ぜらる。父高周の後を繼ぎて出雲と稱す。人となり温雅、學を好み、武藝、兵法に熟達す。士

とらちりかひめ (藤堂高芥)〔人〕字は蘭卿、藤堂侯の族にして、世々番頭に任ぜらる。父高周の後を繼ぎて出雲と稱す。人となり温雅、學を好み、武藝、兵法に熟達す。士

とらちりかひめ (藤堂高芥)〔人〕字は蘭卿、藤堂侯の族にして、世々番頭に任ぜらる。父高周の後を繼ぎて出雲と稱す。人となり温雅、學を好み、武藝、兵法に熟達す。士

とらちりかひめ (藤堂高芥)〔人〕字は蘭卿、藤堂侯の族にして、世々番頭に任ぜらる。父高周の後を繼ぎて出雲と稱す。人となり温雅、學を好み、武藝、兵法に熟達す。士

とらちりかひめ (藤堂高芥)〔人〕字は蘭卿、藤堂侯の族にして、世々番頭に任ぜらる。父高周の後を繼ぎて出雲と稱す。人となり温雅、學を好み、武藝、兵法に熟達す。士

とらちりかひめ (藤堂高芥)〔人〕字は蘭卿、藤堂侯の族にして、世々番頭に任ぜらる。父高周の後を繼ぎて出雲と稱す。人となり温雅、學を好み、武藝、兵法に熟達す。士

とらちりかひめ (藤堂高芥)〔人〕字は蘭卿、藤堂侯の族にして、世々番頭に任ぜらる。父高周の後を繼ぎて出雲と稱す。人となり温雅、學を好み、武藝、兵法に熟達す。士

とらちりかひめ (藤堂高芥)〔人〕字は蘭卿、藤堂侯の族にして、世々番頭に任ぜらる。父高周の後を繼ぎて出雲と稱す。人となり温雅、學を好み、武藝、兵法に熟達す。士

とらちりかひめ (藤堂高芥)〔人〕字は蘭卿、藤堂侯の族にして、世々番頭に任ぜらる。父高周の後を繼ぎて出雲と稱す。人となり温雅、學を好み、武藝、兵法に熟達す。士

民多く悦服す。天保十一年歿す。年五十六。

とら「たか」とら (藤堂高虎)〔人〕字は源助、後、薙髪して、白雲と號す。近江國の人にして、資性、敦厚にして、善く、士を待ち、且、武略あり。初め、淺井氏に仕へて、志を得ず、去て、羽柴秀長に仕ふ。秀長歿後、一たび、高野山に入りしが、秀吉に召されて、亦、秀吉に仕へ、征韓の役、大功あり。秀吉の歿後、家康に屬す、寛永七年十月歿す。年七十五。

とら「たか」とら (藤堂高基)

〔人〕字は業卿、觀瀾と號し、仁右衛門と稱す。藤堂の老臣なり。人さなり温恭、刀槍の術に長じ、博學にして、詩歌をよくす。閩國皆望を属す。

せらる。幾もなく赦されて舊職に復す。寛永六年歿す。年四十二。

とら「たか」とら (藤堂光信)〔人〕本姓は多羅尾氏、天溪と稱す。近江の人、四郎兵衛光俊の子なり。初め有馬直純に仕へ、嶋原の亂に従て大功あり。後、藤堂大通に仕へ、豪勇を以て稱せらる。累進して老中となり、姓藤堂を賜はれり。

とら「ちやうじ」 (東長寺)〔地〕筑前國福岡市にあり。一に博多大師堂と云ふ。眞言宗にして、大同二年、弘法大師唐より歸朝して當寺を草創せり

とら「ちるん」 (等持院)〔地〕山城國葛野郡にあり。臨濟宗にして、延文年中、足利義詮の創建なり。

文政七年歿す。年二十二。

とら「たつ」とら (藤堂立)〔人〕千葉縣千葉郡の人、陸軍騎兵一等軍曹たり。明治二十七八年の役、第一師團騎兵第一大隊第二中隊の牛小隊長として、二十七年清國盛京省に向ふ。十一月十九日、獨立斥候として五十里堡に向ひ、敵の騎兵百余騎と衝突し、勇戦奮闘、誤て泥中に陥り、進退谷まひて自刃す。

とら「たか」とら (藤堂正高)

〔人〕内匠助と稱す。高虎の令弟なり。幼にして江戸に實たり。長じて津藩に還り、上野城留守たり。會、大坂陣起るに及びて、正高留守居たり。其無事に苦み、潛かに兵を率ゐて軍に従ひ殊功あり。役畢りて、檀に職守を離れたるを以て南勢の山中に幽へたり。

應永二年、郡上城を掠奪せらるるに方り、和歌を以て、之を回復せりといふ。又、後土御門天皇の勅を奉じて、京都に朝し、歌道を、諸家に傳へたり。

とら「たか」とら (東條一堂)

〔人〕名は弘、字は子毅、文藏と稱す。上總國の豪農なり。幼にして學を好み、遂に父母に請ふて京都に遊び、苦學匪勉業大に進み、名譽京洛に高し。弘前侯聘して藩の督學とす。意に適せざるこゝありて致仕し、江戸に住して學生を教授す。諸侯争て師事す。安政四年七月歿す。年八十。

とら「たか」とら (東條琴堂)〔人〕名は耕、文右衛門と稱す。江戸の人にして、宏覽、博識、専ら、著作を業とす。文學を以て、越後高田藩に

聘せらる。其著、先哲叢談續編、尤も、世に顯はる。明治十一年九月歿す。年八十四。

とろいぞんいずるいひつ (楊嶋隨筆) [書] 本邦の故事、雜談、及び、支那、印度の事を記したるものにして、著者詳ならず。

とろいどろいのたき (百百瀑) [地] 信濃國上伊那郡天龍川の岸頭にあり。崑頭百尺の高きより天龍川に落下す。

とろいとろいやう (東東洋) [人] 字は大洋、儀藏と稱す。奥州栗原郡の人、滿法を狩野梅笑に學び、後、長崎に遊び、方西園に學び、遂に一家をなし、法眼に叙せらる。天保十年十一月歿す。年八十五。

とろいばういとるん (洞房語園) [書] 庄司勝富の著。雜書なり。

とろいふいへんいんいんいん (東武編年録) [書] 元和元年より、元祿十五年迄の事を記したるものにして、小野高尙の著なり。

とろいふんいつりかち (同文通考) [書] 和漢文を同トく爲むの意にて、文字、書體、音韻、假字等の事を論ぜらるるにして、新井白石の著なり。

とろいほくいん (東北院) [又] 京都市上京區眞如堂の西にあり。時宗にして、長元三年、上東門院一條京極に創建の後、永祿二年中興し、元祿六年此に移したり。

とろいみやうがさき (燈明岬) [地] 志摩國志摩郡の東海岸にある安乘崎の別名なり。

とろいみやうがたけ (燈明嶽) [地] 和泉國大嶋山の別稱なり。

とろいふくいじ (東福寺) [地] 京都市下京區にあり。禪宗にして、僧辨圓開基、建長七年、九條道家の建立なり。◎東京市高輪長岳寺の南にあり。佛日山と號す。妙心寺派禪林にして、江戸四個寺の一なり。本尊は釋迦如來、領南和尚開山、慶長の初め麻布嶺南坂に創建、寛永年中今の地に移せり。

とろいふくいんいん (東福門院) [人] 後水尾天皇の皇后にして、源和子と云ふ。徳川秀忠の女なり。元和六年六月入内して、明正天皇を生む。延寶六年六月崩す。壽七十五。

とろいふついけ (瀟泐池) [地] 北見國にあり。周回三里余。

とろいふついぬま (東泐沼) [地] 千嶋國國後郡にあり。周回四里。

とろいもといはる (東元治) [人] 有名な劍術家にして、神明無想東流の祖なり。

とろいやのいみづらみ (洞爺湖) [地] 膽振國有珠嶽の北麓にあり。周回十里余。

とろいりん (等琳) [人] 姓は堤氏、元祿の頃、最も、浮世繪に妙を得たる人にして、堤派の祖なり。

とろいりんていとろいぎよく (桃林亭東玉) [人] 本名は阿部桃治郎、江戸の人、有名なる軍談師なり。嘉永二年八月歿す。年六十四。

とろいあちやういへん (童話長篇) [書] 黒澤翁著、舌切雀、桃太郎、勝々山、猿蟹合戦、花咲爺、乙姫の童話六篇を、長歌に詠み出したるものなり。

とらゐん(さん)さだ(洞院公定)〔人〕
姓は藤原氏、左大臣に進む。人とな
り、博覽強識、諸家の流派を暗んじ、
尊卑分脈の著あり。應永六年歿す。
年六十。

とらゐん(さね)ひろ(洞院實熙)〔人〕
姓は藤原氏、世に、東山左府と稱せ
らる。博く、古今の書に通じ、拾介
抄等の著あり。

とらゐん(東苑)〔地〕琉球國首里區
崎山の山腹にあり。堂を設け、其下
には小方池あり、清泉石龍の唇より
落つ。苑前は萬竹叢をなし、堂後
には、古松數十株を植う。風景甚だ佳
なり。

とら(か)り(戸賀港)〔地〕羽後國南秋
田郡男鹿半嶋の西海岸にありて、戸
賀潟に關す。港口には舟嶋、宮嶋あ

り。港内廣く、往復の船舶少からず。
とら(く)し(じん)じや(戸隠神社)〔地〕
信濃國上水内郡にあり。國幣小社に
して、三社あり。奥社には、天手力
雄命、九頭龍神を祭る。孝元天皇五
年の創建なり。中社には、思兼命を
祭る。寛治元年奥社より分祀す。寶
光社には、表春命を祭る。康平元年
奥社より分祀す。

とら(く)し(や)ま(戸隠山)〔地〕信濃國
上水内郡の北部に位す。高さ八〇三
六尺。

とら(し)き(しま) (渡嘉敷嶋)〔地〕琉
球國那覇港の西方にあり。周回四里
半余。

とら(じん)じや(砥鹿神社)〔地〕三
河國寶飯郡にあり。國幣小社にして、
大己貴命を祭る。

と(か)ち(が)は(十勝川)〔地〕又、東の

父川と云ふ。十勝國にあり。源を、
十勝山派なる信滿山に發し、十勝郡
に到りて海に注ぐ。長さ五十余里、
北海道中第二の巨流なり。

と(か)ち(たけ) (十勝嶽)〔地〕十勝國上
川郡の西北境に位し、十勝川の水源
をなす。

と(か)の(を)やま(梅尾山)〔地〕山城
國葛野郡の北部にあり。半腹に梅尾
高山寺あり。山城三尾の一にして、
亦、近畿第一の楓の名所たり。晩秋
の候には、兩岸幾千の楓樹、錦を曝
すが如く、風景最も佳なり。

と(か)は(の)はま(戸川濱)〔地〕下總
國九十九里濱の東端なる名洗濱に相
接す。往時は有名なる漁場なりしも、
百餘年前海潮のため流失し、今は僅

かに其幾分を存するのみ。

と(か)は(やす)ま(戸川安清)〔人〕
字は興、蓬庵と號す。將軍徳川家齊
の時、年甫めて十六、擢られて小納
戸となり、累進して目付となり、鎮
臺に拜せらる。文化十三年、更に勘
定奉行に轉す。常に治蹟あり。重く
用ゐらる。家茂入て儲子となるや、
選ばれて、傳准小姓組番頭となる。
尋て大城留主となり、文久元年、命
を奉じて皇妹を京都に迎ふ。人とな
り端正和易にして、最も書をよくす。
慶應四年三月歿す。年八十二。

と(か)ま(土釜)〔地〕阿波國美馬郡一
宇山中鳴瀧の南數百歩の地にあり。
一字川の溪流此に至りて倒に懸り、
奔流岩石の間を穿ち、凹みて恰も釜
の形狀をなす。即ち土釜の稱起る所

以にして、大小碧潭三個、滴をなして水湧く。看る者をして毛髪を慄立せしむ。其狀釜中に水の沸騰するに似たるを以て、一に怒釜に作ると云ふ。

とがみかはら (砥上原)〔地〕相模國高坐郡にある平原なり。往昔鎌倉府の弓馬練習所にして、康正元年には、上杉定正、大に北條憲宣と此野に戦ふ。又、西行物語の「柴松のくすのしげみに妻をめて砥上ヶ原に小鹿なくなり」は此地の事なり。

とがみやま (渡神山)〔地〕豊後國日田郡の西部に位す。高さ三二二〇尺。とがみじ (渡岸寺)〔地〕近江國伊香郡にあり。天台宗の古刹にして、傳教大師の開創なりと云ふ。

とがきは (土器川)〔地〕一名、二村

の策に出るなりと。文祿二年、土岐氏に復し、從五位下に叙し、山城守と稱す。慶長二年三月歿す。年四十七。

とがしらぎやま (時不知山)〔地〕駿河國富士山の別稱なり。

とがつかう (時津港)〔地〕肥前國彼杵半嶋の東海岸南隅にありて、大村灣に瀕す。灣の沿岸各港、及び、佐世保等へ航する要津なるを以て、百貨湊輻し、船舶の往來常に絶えず。

とがとみかば (土岐富景)〔人〕美濃國土岐氏の一族なり。畫法を周文に學び、最も鷹を畫くに長ず。應仁中の人なり。

ときは (常磐)〔人〕源義朝の妾にして、容色あり。賴朝、範賴、義經を生む。平治元年、義朝の敗北するや、

川と云ふ。讃岐國綾歌郡にあり。源を郡の南隅大山嶽の北麓に發し、西北流して丸龜市の東方に至りて海に入る。長さ凡そ九里。

とがさき (斗喜崎)〔地〕備後國沼隈郡にあり。地脉西南に斗出するここ一里余。松永入江の口を扼す。

とがさだまさ (土岐定政)〔人〕美濃國の人、父を定明と云ふ。天文二十一年、美濃國亂れて定明戦死す。定政時に二歳、母懷て三河に奔り、菅沼定仙に倚る。永祿十七年、十四歳にして菅沼氏を討し、藤藏と字し、徳川家康に仕へ、大に寵を得たり。掛川、箕作、姉川の役を始めとし毎戰常に扈從し、先驅殿殿殊功あらざるはなし。家康の秀吉と小牧に戦ふや、寡を以て衆を制したる全く定政

三子を携へて、雪中、大和國に匿る。而して、母の清盛に捕へられたるを聞き、自ら六波羅に趣き、母に代らんと請ふ。遂に、清盛の妾となる。三子ために死を宥さる。後、寵衰ふるに及びて、出でて、藤原長成に嫁す。

ときはくわらざん (常磐嶺山)〔地〕備中國川上郡にあり。銅を産出す。製出高凡そ一万六千斤。

ときはじんじや (常磐神社)〔地〕常陸國水戸市にあり。別格官幣社にして、徳川義公(光圀)、徳川烈公(齊昭)を祭る。

ときはつむじたいふ (常磐津文字太夫)〔人〕文右衛門と稱し、文中と號す。京都の人にして、有名なる三絃の名手にて、常磐津節の祖なり。

安永十年二月歿す。年七十三。

ときは一のいけ (常磐池)〔地〕長門

國厚狹郡にあり。周回凡そ三里余。

下流西注して、海に注ぐ。

ときは一のあはせ (常磐屋之

句合)〔書〕芭蕉の三十七才の秋、杉

風撰の青物の句合廿五番に判詞を加

へたるもの。

ときは一のやま (常磐山)〔地〕駿河國富

土山の別稱なり。

ときは一のどの (常磐井殿)〔人〕後

深草天皇を申す。

ときは一のみや (常磐井宮)〔人〕

後深草天皇の皇子を申す。

とき一みづのいせん (時水冷泉)

〔地〕越後國北魚沼郡にあり。泉質炭

酸泉なり。

とき一しんわり (齊世親王)〔人〕

宇多天皇の皇子にして、三品兵部卿

たり。かつて上總の太守たりしが、

延喜元年、菅原道真の事に坐して出

家し、圓城寺宮と號す。延長五年九

月薨す。

とき一よりかぬ (土岐頼兼)〔人〕十

郎と稱す。頼貞の子、源頼光の後、

同族多治見國長と驍勇を以て著る。

二人共に京師に番直し、藤原資朝等

に引かれて、後醍醐天皇の北條氏を

滅さんとする謀に與る。正中元年、

事漏れて、國長と共に攻められて自

殺す。

とき一よりゆき (土岐頼行)〔人〕慶

安の頃、有名なる槍術家にして、自

得記流槍術の祖なり。

とき一いつ (徳一)〔人〕高僧なり。相

宗を僧圓に學ぶ。業大に進み、法弟

在職三年、正徳六年四月歿す。年僅

かに八歳。有章院と謚す。

とき一がはいへつね (徳川家綱)〔人〕

徳川家光の第一子にして、竹千代と

云ふ。徳川幕府第四代の將軍にして

在職三十年、延寶八年五月歿す。年

四十。殿有院と謚す。

とき一がはいへなり (徳川家齊)〔人〕

一橋治濟の子にして、豊千代と云ふ。

徳川幕府第十一代の將軍にして、在

職五十一年、天保七年、軍職を辞し

て、大御所と稱す。同十二年歿す。

とき一がはいへのぶ (徳川家宣)〔人〕

徳川家光の孫にして、綱重の第一子

たり。虎松丸と云ふ。徳川幕府第六

代の將軍にして、在職四年、正徳二

年十月歿す。年五十一。文照院と謚

安永十年二月歿す。年七十三。

ときは一のいけ (常磐池)〔地〕長門

國厚狹郡にあり。周回凡そ三里余。

下流西注して、海に注ぐ。

ときは一のあはせ (常磐屋之

句合)〔書〕芭蕉の三十七才の秋、杉

風撰の青物の句合廿五番に判詞を加

へたるもの。

ときは一のやま (常磐山)〔地〕駿河國富

土山の別稱なり。

ときは一のどの (常磐井殿)〔人〕後

深草天皇を申す。

ときは一のみや (常磐井宮)〔人〕

後深草天皇の皇子を申す。

とき一みづのいせん (時水冷泉)

〔地〕越後國北魚沼郡にあり。泉質炭

酸泉なり。

とき一しんわり (齊世親王)〔人〕

門に滿つ。嘗て、本宗に依て新疏を

作り、傳教大師を難破す。時人争ふ

て之を傳へたり。慧日寺に寂す。

とき一がはいせんしふ (讀耕全集)〔書〕

林春徳の詩文集なり。

とき一がはいへさだ (徳川家定)〔人〕

徳川家慶の弟にして、初めの名は家

祥、政之助と稱す。徳川幕府 十三

代の將軍にして、在職五年、安政五

年五月歿す。年三十。溫恭院と謚す。

とき一がはいへしげ (徳川家茂)〔人〕

徳川吉宗の第一子にして、長福丸と

云ふ。徳川幕府第九代の將軍にして、

在職十七年、延享十一年六月歿す。

年五十一。惇信院と謚す。

とき一がはいへつぐ (徳川家繼)〔人〕

徳川家宣の第四子にして、鍋松丸と

云ふ。徳川幕府第七代の將軍にして

す。

とくがはいへはる (徳川家治)〔人〕
徳川家重の第一子にして、竹千代と云ふ。徳川幕府第十代の將軍にして、在職二十五年、天明六年九月歿す。年五十。没明院と諡す。

とくがはいへみつ (徳川家光)〔人〕
徳川秀忠の第二子にして、竹千代と云ふ。徳川幕府第三代の將軍にして、資性豪毅、武を好み、威望あり。襲職の初め、諸侯を招きて、幕府の基礎を固くす。在職二十七年、正徳四年四月歿す。年四十八。大猷院と諡す。

とくがはいへもち (徳川家茂)〔人〕
紀伊侯徳川齊順の子にして、初め慶福と云ふ。徳川幕府第十四代の將軍にして、在職八年、元治二年八月歿す。

す。年二十一。照徳院と諡す。

とくがはいへもと (徳川家基)〔人〕
將軍家治の長子にして、竹千代と云ふ。明和三年四月、權大納言に任ぜらる。安永八年二月歿す。年十八。嘉永元年十月、詔して太政大臣正一位を追贈せらる。

とくがはいへやす (徳川家康)〔人〕
贈太政大臣源廣忠(一説に藤原)の第一子にして、小字を竹千代と云ふ。幼にして、奇才あり。織田、豊臣の後を承けて、遂に、天下を一統し、幕府を江戸城に開き、慶長八年二月征夷大將軍に任ず。實に、徳川幕府初代の將軍たり。在職二年。元和二年四月歿す。年七十五。東照公と諡す。

とくがはいへよし (徳川家慶)〔人〕

老臣信定の陰謀にかり、安部正豊のために弑せらる。年二十五。

とくがはいげいざん (徳川景山)〔人〕

「人」さくがはなりあきにおな。

とくがはいさゝもんのかみ (徳川左衛門督)〔人〕

徳川綱重を云ふ。

とくがはいしげよし (徳川重好)〔人〕

「人」幼名は万二郎、將軍家重の第二子なり。寶曆九年、左近衛中將に任じ、宮内卿を兼ね。十二月清水館に從り、清水殿と稱す。十二年五月、和泉、大和、播磨、甲斐、武藏、下總等の田十萬石を以て采邑となす。寛政四年二月、權中納言に任じ、同七年七月歿す。年五十一。

とくがはいじつぎ (徳川實記)〔書〕

徳川氏の勃興せし時代より、十代將軍までの事蹟を、諸家の記録により

徳川家齊の子にして、敏次郎と云ふ

徳川幕府第十二代の將軍にして、在職十五年、嘉永六年六月歿す。年六十一。愼徳院と諡す。

とくがはいらまのかみ (徳川右馬頭)〔人〕

徳川綱吉を云ふ。

とくがはいかつなが (徳川勝長)〔人〕

「人」幼名は勇之助、掃部頭と稱す。尾張侯宗勝の第六子にして、左近衛權少將たり。性齋を好み、最も狩野風の畫法をよくす。文化八年九月歿す。

とくがはいきよやす (徳川清康)〔人〕

「人」小字は竹千代、二郎三郎と稱す。信忠の長子なり。資性穎悟、眼光人を射る。漸く長じて四隣を征服し、威名遠近に轟く。天文四年、將に織田氏を討ちて京都に上らんとす。途

て書き記したるものなり。成嶋司直の著。

とくがはせんひめ (徳川千姫)

〔人〕秀忠の嫡女にして、豊臣秀頼に嫁す。大坂没落の後、元和三年九月、本多忠刻に再嫁し、後、竹橋御殿と稱す。寛文六年二月歿す。

とくがはたててる (徳川忠輝)

〔人〕松平忠輝におなり。

とくがはたなな (徳川忠長)

〔人〕駿河大納言と稱す。秀忠の第二子にして、家光の弟なり。幼名は國松丸、長じて駿河、遠江、甲斐三國を領し、駿河に治す。寛永三年八月、權大納言従二位に進む。同十年十二月故ありて自殺す。年二十八。

とくがはちかちぢ (徳川親氏)〔人〕父を有親と云ふ。初め父と共に遊行

僧の徒弟となりて三河に到り、髮を蓄へて坂井邑に寓居す。松平信重其才を愛し、女を以て妻はし、其職を繼がしむ。即ち松平氏の始めとす。應仁元年二月歿す。年四十三。

とくがはちかする (徳川親季)

〔人〕幼名は太郎修理之亮、政義の長子なり。應永年間、足利持氏執事上杉禪秀に應じ、軍敗れて、子有親、孫親氏と相別れて逃る。正長二年十月歿す。

とくがはちかた (徳川親忠)

〔人〕小字は竹千代、信光の子なり。修理亮に任ぜられ、岩津に治す。人となり沈勇にして、賦歛を省き、孤寡を恤み、賞罰を明にし、法制を修む。是を以て國內よく治り、衆皆其徳を稱せり。明應九年八月歿す。年

とくがはつなしび (徳川綱重)〔人〕小字は長松丸、家光の第三子にして、

甲府侯の祖なり。慶安四年四月、美濃、近江、信濃、駿河、甲斐、上野等の田十五萬石を以て封邑とす。寛文元年、更に十萬石を加ふ。左近衛權中將、参議に進む。延寶六年九月歿す。年三十五。

とくがはつなよし (家川綱吉)〔人〕

家川家光の第四子にして、徳松丸と云ふ。徳川幕府第五代の將軍たり。在職二十八年。寶永六年正月歿す。年六十四。常憲院と諡す。

とくがはながちか (徳川長親)

〔人〕親忠の第三子にして、父の後を繼ぐ。永正三年、今川氏親、其將北條長氏と大兵を率ゐて來り岩津を攻

む。長親手兵を提げて之を救ふ。遂に長氏を走らし、戸田憲光を降す。威名大に揚れり。

とくがはなりあき (徳川齊昭)〔人〕

初めの名は景三郎、俊、紀教と改む。字は子信、景山、又、潛龍閣と號す。資性、豪邁果斷にして、最も、神道を尊び、異端を排す。兄、哀公の封を襲うて、兵備を修め、又、弘道館を建てて、文武を訓練す。常に、天朝を尊び、幕府を敬し、銳意、幕府を輔佐す。一朝、外交の事起るや、大に、攘夷論を主張す。遂に、開港派のために嫉まれて、禁錮せられ、萬延元年八月歿す。年六十一。

とくがはなりなが (徳川齊修)

〔人〕字は子誠、水戸侯治紀の子なり。文化十三年封を襲ぎ、参議に拜す。

文政八年、權中納言に任ず。人となり博覽強記、最も書畫をよくし、詞賦に工なり。文政十二年十月歿す。年三十三。

とくがはのぶただ (徳川信忠)

〔人〕小字は竹千代、二郎三郎、又、藏人と稱す。長親の長子にして、左京亮に任ぜらる。家を繼いで安祥にあり。常に群少を寵任し、賦飲度なし。衆心漸く離散す。後、大に悔悟し、家を子清康に譲り、剃髪して泰雲と號す。享祿四年七月歿す。年四十三。

とくがはのぶみつ (徳川信光)〔人〕

小字は竹若丸、二郎三郎と稱す。泰親の第二子なり。容貌魁偉にして、智勇仁を兼備するを以て、威惠並び行はれ、近國を征服して威名大に振ふ。晩年剃髪して和泉入道と稱す。

とくがはひでやす (徳川秀康)〔人〕

小字は於義鷹、家康の第二子にして、秀忠の庶兄なり。豊臣秀吉養ひて子となし、姓羽柴を賜ふ。天正十五年、羽柴秀勝と、共に、嶋津氏を討ちて功あり。人となり、沈毅英邁、武略あり。後、越前六十七万石に封せられ、權中納言に任ぜらる。慶長十二年四月歿す。年三十四。

とくがはひろただ (徳川廣忠)〔人〕

小字は千松丸、清康の嫡子にして、父清康の弒せらるるや、年甫めて十歳、阿部定吉之を輔佐す。時に世良田信定、國政を擅にし、廣忠を除きて自立せんとす。すなはち、援を今川氏に請ひ、以て信定を除く。人となり勇武なりと雖も、猜忌深きを以て臣民の離散するもの多し。天文十

長享二年七月歿す。年七十六。

とくがはのぶやす (徳川信康)〔人〕小字は竹千代、家康の長子なり。人となり英邁、器才あり。然れども、佐久間信盛、酒井忠次等の讒する處となり、天正七年九月死を賜はる。年二十一。

とくがははるさだ (徳川治貞)〔人〕

本名は頼淳、紀州の城主なり。參議權中納言に任ず。人となり慈仁、衆を愛して己れを節し、日夜心を國事に盡せり。故を以て領内大に治る。寛政元年歿す。年六十二。

とくがはひでただ (徳川秀忠)〔人〕

徳川家康の第三子にして、長丸と云ふ。徳川幕府第二代の將軍たり。在職十八年。寛永九年正月歿す。年五十四。台徳院と謚す。

八年三月歿す。年三十四。子家康志を得るに及びて、詔して従一位權大納言を贈らる。

とくがはみつくは (徳川光圀)〔人〕

幼名は千代松、字は子龍、名は徳亮日新齋、常山、梅里等の號あり。水戸頼房の第三子なり。資性、俊邁、果斷、仁慈にして、奇才あり。最も、敬神の志に厚く、文武を重し、又、意を殖産、興業に注ぐ。曾て、彰考館を置きて、大日本史を撰み、万葉集を註釋したるなど、其功績尠からず。晩年、西山に閑居し、西山隱士と號す。元祿十三年十二月歿す。年七十二。

とくがはみつさだ (徳川光貞)

〔人〕小字は長福、頼宣の子にして、紀州の國主たり。元祿三年權大納言

に累進し、十一年剃髪して對山と號す。性藩を好み、狩野探幽に學びて技大に進む。寶永二年八月歿す。年八十一。

とくがはみつとる (徳川光友)

〔人〕義直の男、尾張の國主なり。承應二年、權大納言に累進す。人さなり儉を守り、能く國を治め、傍ら、書齋をよくす。元祿十三年十月歿す。年七十六。

とくがはむねたけ (徳川宗武)

〔人〕田安殿と稱す。從三位左近衛中將に任す。最も國學に長ず。明和六年歿す。

とくがはよしなほ (徳川義直)〔人〕

初の名は義利、元服して、義直と改む。家康の第九子にして、尾州侯の祖なり。資性、聰明、穎智にして、

聖教を尊び、儒學を好む。慶長三年五月歿す。年五十一。

とくがはよしむね (徳川吉宗)〔人〕

紀伊侯光貞の第三子にして、源六、又、新之助と稱す。徳川幕府第八代の將軍たり、在職二十九年、延享二年九月軍職を辞し、寶曆元年六月歿す。年六十八。有徳院と諡す。

とくがはよりふ (徳川頼宣)〔人〕

家康の第十子にして、小字を長福と云ふ。紀州侯の祖なり。資性、雄偉、卓見にして、機略あり。寛文十一年正月歿す。年七十。南龍院と諡す。

とくがはよりふさ (徳川頼房)

〔人〕家康の第十一子にして、頼宣の同母弟、常陸水戸侯の祖なり。資性聰明、英才あり。寛永三年八月權中納言に累進す。寛文元年七月歿す。

年五十九。威公と諡す。

とくがなり (獨眼龍)〔人〕伊達政宗を云ふ。

とくびん (徳源院)〔人〕織田信雄の院號なり。

とくと (徳吾)〔人〕自山と號す。甲斐國の名僧なり。大永壬午五月寂す。年八十四。

とくと (獨語)〔書〕歌道、茶道、音樂、衣服等の事を記したるものにして、太宰純の著なり。

とくと (獨古冷泉)〔地〕磐城國石城郡にあり。寶曆二年の發見にして、泉質單純泉なり。

とくと (徳藏)〔人〕伊勢國の人に於て、大坂に住す。有名なる彫刻師なり。左刀を發明す。天保頃の人なり。

とくと (徳藏寺)〔地〕上總國山武郡にあり。常陸山と號す。眞言宗なり。本尊釋迦佛は、佛工定朝の作なりと云ふ。

とくと (徳佐峰)〔地〕長門國阿武郡の東端に位す。高さ三三七九尺。

とくと (木賊温泉)〔地〕岩代國南會津郡にあり。治曆二年の發見にして、泉質單純泉なり。

とくと (徳嶋)〔地〕阿波國にある市街にして、蜂須賀氏の舊藩地なり。徳嶋縣廳の所在地たり。

とくと (讀史餘錄)〔書〕明の薛瑄の著。修身に關することを輯めたるものなり。

とくと (讀史餘論)〔書〕新井白石の史論なり。十二卷あり。上

古より、豊臣氏迄の事實につきて詳論せり。

とくたいいじさんいぶ(徳大寺公信)

〔人〕晩年、薙髪して、淨覺と號す。後明光天皇に仕へて、内大臣たり。資性、忠誠にして、鯁直なり。嘗て、天皇の飲酒を諫めて、宸怒に遇ひしかば、端坐して、動かさず。翌日、天皇、其忠誠を嘉し、劇飲を止めたまふ。時人、其忠烈に感せざるなし。天和元年七月歿す。年七十七。

とくたいいじさんいぶ(徳大寺實定)

〔人〕藤原公能の子、頗る才學あり。治承元年、大納言に任ぜられ、左近衛大將を兼ね。壽永二年、内大臣となり、尋で左大臣に至る。建久二年剃髪して名を如圓と云ひ、其年歿す。年五十三。

とくだいさんいかり(徳田錦江)〔人〕

字は子瞻、五左衛門と稱す。世々水府に仕ふ。名高き儒者なり。彰考館の總裁となり、また、世子の侍讀たり、明和八年十二月歿す。年六十二。

とくだいさんいかり(得能淡雲)

〔人〕大洲の藩士人見十郎左衛門の子なり。幼より學を好み、深く經史に通ず。時に異船渡來し、國內騷擾す。淡雲諸國を遊説して、大に勤王の論を主唱す。遂に幕府の忌む所となり、捕へられて獄に下され、文久二年八月獄中に病死す。年二十八。

とくだいさんいかり(得能通言)

〔人〕彌三郎と稱す。伊豫國の人。後醍醐天皇、船上に幸し給ふや、土居通治と、共に、義兵を擧げて屢々賊と戦ふ。新田義貞、皇太子を奉じ

て北國に赴くに從ひ、道に大雪のため前軍を失し、敵兵迫り馬凍餒して、戦ふこと能はざるに至り、遂に自刃す。

とくだいさんいかり(得能良介)

〔人〕名は通生、燕山と號す。薩摩の人、世々鹿兒嶋藩に仕ふ。壯年諸國を巡歴し、大に得る處あり。元治元年京都騷擾す。良介藩侯に隨ひて上京し、大久保利通、西郷隆盛等と力を國事に竭す。維新後、明治政府に歴仕し、明治七年、紙幣頭に擢でられ、爾來日夜職制の改良に勉め、十一年に到りて遂に印刷局を完備す。十六年十二月歿す。年五十九。

とくだいさんいかり(徳嶋)〔地〕大隅國南方にあり。周回二十三里余。嶋の東

沿岸に、井ノ川灣、西に平戸野灣あり。

とくだいさんいかり(徳本)〔人〕姓は田伏氏、

紀伊國の人にして、江戸に住す。淨土宗一行院の住僧にして、高德の名あり。文政元年十月寂す。年六十一。

とくだいさんいかり(徳守神社)〔地〕

美作國津山町にあり。縣社にして、天照大神を祭る。天平五年九月の創建なり。

とくだいさんいかり(徳山)〔地〕周防國にある市街なり。

とくだいさんいかり(徳山港)〔地〕周防國徳山灣の北沿岸、即ち、都濃郡の南海岸にあり。陸に鐵道の設ありしより海運一層の便を加へ、船舶の出入するもの多し。

とくだいさんいかり(徳山灣)〔地〕周防國

都濃郡の南沿岸にして、周防灘に瀕

す。郡の地脉は、仙嶋、大津嶋に
よつて此灣をなす。南門には拾嶋、
岩嶋、洲嶋等散在し、北は笠戸灣に
隣せり。

とくらやま (斗藏山)〔地〕磐城國伊
具郡の西部に位す。山上には、斗藏
山大悲閣と稱する地方著名なる古刹
あり。

とくりさりよりかん (徳力龍洞)
〔人〕名は茂弼、字は子諱、讃岐の人、
幕府の儒官たり。寶永七年、進みて
侍直學士となり、十七年、書府監を
拜す。安永六年二月歿す。年七十二。

とくりんじ (徳林寺)〔地〕三河國
幡豆郡にあり。見影山と號す。寶徳
年間創建、領主松平彈正の香花寺た
り。

とくわかくわらざん (徳若嶺山)
云ふ。石見國那賀郡なる海濱の総稱
なり。

とくろがば (常呂川)〔地〕北見國常
呂郡の西南隅に發源し、東北流して
海に入る。長さ二十里余。

とくろざは (所澤)〔地〕武藏國入間
郡の東部南邊に位する名邑にして、
綿布の産出甚だ多し。

とくろやま (常呂山)〔地〕北見國
常呂郡の西南部に位す。高さ五〇〇
〇尺余。

とくろやまこさちらう (所山五
音郎)〔人〕名は輝朗。土佐の藩士に
して、名高き勤王家なり。藩命を奉
じて、京都の藩邸を警備す。常に同
志と時事を談し慷慨せり。後、會
津、彦根の藩士と衝突し、重傷を負
ひて遂に歿す。年十九。

〔地〕筑前國遠賀郡にあり。石炭を産
出す。産出高凡そ二万噸。

とびつ (吐月)〔人〕通稱は飯嶋四郎
左衛門、上總國野毛の俳人なり。安
永九年九月江戸に歿す。年五十四。

とびつけり (渡月橋)〔地〕山城國大
堰川の上流なる、嵐山の三軒茶屋よ
り、法輪寺の山下に達するものにし
て、一に御幸橋の名あり。長虹一帯
碧流に架し、山水の韵致を添ふ。

とくと (杜國)〔人〕通稱は平兵衛、
一に萬菊丸と號す。芭蕉の門弟にし
て、有名なる尾張の俳人なり。後、
罪ありて伊良古崎に流され、元祿三
年五月、配所に歿す。

とくとんぬま (常丹沼)〔地〕北見國
にあり。周囲二里。

とこのうら (床浦)〔地〕一名疊浦と
云ふ。淡路國福良港の西端にあり、阿
波の孫崎と相對す。距離僅かに十五
町。中間は有名なる鳴門海峡なり。

とささ (戸崎)〔地〕土佐國幡多郡の
南沿岸にあり。地脉海中に斗出する
こと三十町余。西方には千尋崎あり。
とささなんゑん (戸崎淡園)〔人〕
名は允明、字は哲夫、五太夫と稱す。
常陸國の人にして、守山侯の儒臣な
り。特に、詩文、及び、書に名あり。

文化三年十一月歿す。年八十三。

とさじんじや (土佐神社)〔地〕土
佐國土佐郡にあり。國幣中社にして、
一言主神を祭る。舊、都佐神社に作
る。

とさせりじより (土佐少椽)〔人〕
初め、内匠虎之助と稱す。有名なる

浄瑠璃家にして、土佐節と稱する一派を創む。寛文、延寶頃の人。

とさなつかかぬ (土佐隆兼)〔人〕邦隆の二男にして、有名なる土佐派の畫家なり。從五位下に叙し、右近太夫に任ぜらる。延寶年中、勅命をうけて春日靈驗記十六巻を畫く。世人之を榮せり。

とさちよ (土佐千代)〔人〕名は光久、土佐光信の女にして、出て、狩野元信に嫁す。最も、畫に名あり。天文頃の人なり。

とさつねたか (土佐經隆)〔人〕初め、春日有房と稱す。土佐宗家の畫人にして、畫所預となる。後、春日を改めて、土佐と稱す。元仁、寛喜頃の人なり。

とさながたか (土佐長隆)〔人〕姓

を姉小路と云ふ。土佐經隆の二男にして、土佐派の畫家なり。法眼に叙せらる。弘安中の人。

とさながはる (土佐永春)〔人〕太夫法眼と稱す。光顯の長男にして、土佐派の畫家なり。貞治中の人。

とさいつき (土佐日記)〔書〕延長八年、紀貫之土佐守となりて、かの國に赴任し、その後、承平五年任期満ちて、京に歸る時の紀行文なり。或は云ふ。貫之が土佐にて愛娘を失ひ、其悲嘆を慰めん爲に作りし文なり。

とさいつきからしより (土佐日記考證)〔書〕種種の考證を擧げて、土佐日記を解釋したるものにして、岸本由豆流の著なり。

とさいつきさうけん (土佐日記

創見)〔書〕土佐日記を解釋したるものにして、香川景樹の著なり。

とさいつきせり (土佐日記抄)〔書〕土佐日記の註釋なり。北村秀吟の著。

とさいつきどろ (土佐日記燈)〔書〕土佐日記の註釋なり。富士谷御杖の著。

とさいつきふねのたぢち (土佐日記船直路)〔書〕土佐日記を解釋したるものにして、橋守部の著なり。

とさのたき (土佐沖)〔地〕土佐國の南方海面を稱す。東は熊野灘に對し、西は日向灘に連る。

とさのつぼね (土佐局)〔人〕春日神主大中臣時廣の女にして、後陽成天皇の宮人なり。最も、滿をよくす。天皇深く之を寵し、道周法親王、幸

勝親王を生む。

とさのゐん (土佐院)〔人〕土御門天皇を申す。

とさはりやす (戸澤盛安)〔人〕

姓は平氏、出羽角館城主道盛の子なり。永祿天正の頃、獨立せんを欲し、鷹、郡邑を掠む。小野寺景道來り攻む。盛安急に兵を發して大に之を破る。威名漸く高く、人呼んで夜叉九郎と云ふ。四隣畏れ懼りて敢て抗するなし。天正十八年歿す。年二十五。

とさひろちか (土佐廣周)〔人〕初め光持と云ふ。行秀の二男にして、土佐派の畫人なり。畫所預となり、土佐守に任ぜらる。應仁中の人。

とさぼりがは (土佐堀川)〔地〕大阪市の中部にあり。淀川畔流にして、同市北區中の嶋の東方、難波橋の下

にて南北三派に分る。北を堂嶋川と云ひ、南は即ち本川なり。共に嶋を挟んで西に流れ、西横堀川を分ち、更に二派に分れ、一は直に木津川に注ぎ、一は再び堂嶋川を會し、下流安治川となる。

とさみつあき (土佐光顯)〔人〕隆兼の男にして、書所預となり、土佐權守を経て、越前守に進む。貞和年中の人。

とさみつねき (土佐光起)〔人〕晩年薙髮して、常昭と號す。土佐宗家の藩人にして、法眼に叙せらる。土佐三筆の一人なり。元祿四年九月歿す。年七十五。

とさみつね (土佐光國)〔人〕永春の男、光顯の孫にして、法眼に叙せられ、粟田口法眼と稱す。書を以

て、備後守に任ず。應永年中の人。とさみつしげ (土佐光重)〔人〕行光の二男にして、書名あり。書所預となり、越前守に任ぜらる。明徳中の人。

とさみつなが (土佐光長)〔人〕經隆の第五子にして、筆意精細、最も、佛畫に長ず、嘗て、勅を奉して、年中行事五十卷を畫く。土佐三筆の一人なり。正應、正安頃の人なり。

とさみつなり (土佐光成)〔人〕光起の男にして、名書と稱せられ、書所預となり、左近將監に任ぜらる。寶永七年三月歿す。年六十五。

とさみつのぶ (土佐光信)〔人〕土佐宗家の藩人にして、書所預となり、書く所、周匠織密にして、當時、狩野元信と名を等くす。土佐三筆の一

人なり。大永五年歿す。年九十。

とさみつりのり (土佐光則)〔人〕源左衛門と稱し、又、右近と云ふ。光吉の男にして、書所預となる。寛永十五年正月歿す。年五十六。

とさみつひろ (土佐光弘)〔人〕行廣の次子にして、書所預となり、土佐權守中務丞に歴任す。永享二年、勅命を奉じて兄行秀と共に、大嘗會の屏風を畫けり。

とさみつもと (土佐光元)〔人〕光茂の男にして、書所預となり、左近將監に任ぜらる。元祿十二年正月故ありて歿す。年三十。

とさむとみつ (土佐基光)〔人〕藤原清隆の子にして、初めの名は盛光有名なる書家にして、土佐氏の開祖なり。奈良東大寺に住し、家を春日

と云ふ。始めて、書所預となる。寛弘年中の人なり。

とさゆきひで (土佐行秀)〔人〕行廣の男、後、族を春日と云ふ。書を以て、修理亮大藏大輔に歴任す。永享二年、勅命を奉じて弟光弘と共に大嘗會の屏風を畫けり。

とさゆきひろ (土佐行廣)〔人〕行光の長男。書所預となり、越前守に任ぜらる。永和年中の人。

とさゆきみつ (土佐行光)〔人〕吉光の男、出でて光顯の後を繼ぎ、書所預となり、越前守に任ぜらる。延文年中の人。

とさよしみつ (土佐吉光)〔人〕經隆の三男。佛畫をよくす。長兄經隆の嗣子となる。宗家を襲て書所預となる。刑部大輔に任ぜらる。正安中

の人。

としまわん (土佐灣)〔地〕土佐國南海岸、蹠趾岬(一に足摺岬)と、室戸岬と東西遙かに相對して、半月狀の一大灣を抱す。長さ二百里、海水甚だ深からざれども、鯉、珊瑚の産地として、其名を知らる。

としなみをき (年並草)〔書〕僧仙雲の和歌の集なり。

としひとしゆらん (利仁將軍)〔人〕藤原利仁を云ふ。

としべつかは (利別川)〔地〕十勝國にあり。源を中川郡の北境に發し、東南に海流して十勝川に入る。長さ三十七里余。

としま (戸嶋)〔地〕○伊豫國西南方にあり。周回四里余。○肥後國天草下嶋の東南方にあり。嶋上には燈臺

を設く。

としま (利嶋)〔地〕伊豆七嶋中、最小なる嶋にして、大嶋の西南五里半餘にあり。周回二里余。嶋の中央に宮塚山峙立し、沿岸は險にして、船の碇泊に便ならず、僅かに、前濱に一埠頭あるのみ。

としまかり (戸嶋港)〔地〕伊豫國宇和嶋灣頭の戸島にあり。東は大池崎、西は日振嶋に對し、豐豫海峽に臨む。交通海運甚だ便なり。

としまがさか (豐嶋岡)〔地〕東市小石川區の西部にあり。

としまのぶつね (豐嶋信庸)〔人〕徳川幕下の士、御目付兼御使番を勤む。閣老井上元就が婚姻の約を變じたるを憤慨し、寛永五年八月之を城中に刺し、己れまた自刃す。後年、

將軍吉宗、其情を憐み、遺子二人を召し、家名の斷絶したるを起さしむ。

としまほりし (豐嶋豐洲)〔人〕名は幹、字は子卿、周吉と稱す。江戸の人、物徂徠の學を唱へ、名高き儒者なり。文化十一年七月歿す。年七十八。著書數十種あり。

としもいぬま (年茂以沼)〔地〕千嶋國紗那郡にあり。周回四里半余。

としやくばな (戸尺鼻)〔地〕肥前國大村灣の北隅、松岳の山脚斗出する處を云ふ。

としよりし (俊頼集)〔書〕源俊頼の和歌を集めたるものなり。

としろなき (純白瀑)〔地〕紀伊國有田郡にあり。高さ一八〇尺、幅二二尺。下流修理川に注ぐ。

としをかゝわりさん (利岡鐵泉)

〔地〕土佐國幡多郡にあり。泉質硫黄泉なり。

としまかりほ (戸田孝甫)〔人〕名は忠則、銀次郎と稱す。水戸の藩士なり。安政の比、烈公再び恭讓を蒙り一藩危懼騒騒す。孝甫此間に處し、盡力遂に平定するを得たり。擢でて執政となり、國政を調理して功あり。後、佐幕黨の忌む處となり、讒誣して其職を罷め幽囚す。幾もなく歿す。時に慶應元年七月。年三十七。

としまさんだち (戸田欽堂)〔人〕大垣侯の第三子。分家阿波守の家を繼ぐ。後、放逸にして産を失ひ、翻譯戲著等を以て活業とす。又、紙腔琴を工夫す。明治二十三年八月横濱に歿す。年四十一。

としまよくさん (戸田旭山)〔人〕

名は齋。備前の人、有名なる大坂の
 醫者なり。特に治痢に妙にして、又、
 本草學に精通す。著書數種あり。
 とたふののちと (土塔址)〔地〕大坂
 市天王寺の南にあり。聖德太子の御
 時、震旦國より渡來せる經論の、烏
 有に歸せんを恐れ、土塔を築きて
 之を藏せりといふ。後世、寺をなし、
 南岡山土垢寺と號す。後、廢絶す。
 とたふのちと (戸田勝隆)〔人〕名は
 恭光、八兵衛と稱し、梨本菴と號す。
 有名なる歌人なり。當時、和歌の
 制の亂れたるを嘆きて、數種の著あ
 り。寛永三年四月歿す。年七十一。
 とたふのちと (戸田越後)〔人〕前田
 利家の臣にして、有名なる刀槍の達
 人なり。戸田流劍法の祖なり。元龜
 慶長頃の人。

とちぎ (朽木)〔地〕下野國下都賀郡
 の中央稍北部に位する名邑なり。此
 地も朽木縣廳の所在地たりしも、
 後、宇都宮市に移されたり。
 とちぎをんせん (朽木温泉)〔地〕
 肥後國阿蘇郡にあり。寛文四年の發
 見にして、泉質鹽類泉なり。
 とちぎをんせん (朽木温泉)
 〔地〕越後國中頸城郡にあり。泉質鹽
 類泉なり。
 とちぎすけもち (戸治資持)〔人〕月
 丹と號す。近江國の人、有名なる劍
 客にして、無外流劍術の祖なり。
 とちぎをんせん (棟湯温泉)〔地〕
 一名藤七湯温泉と云ふ。羽後國雄勝
 郡にあり。甲し二泉あり。明和年中
 の發見にして、泉質各單純泉なり。
 とちぎをんせん (栃尾嶺山)

〔地〕大和國吉野郡にあり。銅を産出
 す。製出高凡そ六千斤。
 とちをんせん (棟尾又鑛
 泉)〔地〕越後國北魚沼郡にあり。泉
 質硫黄泉なり。
 とちかは (十津川)〔地〕大和國吉野
 郡にあり。源を山上嶽に發し、西南
 流して諸水を合せ、紀伊國に入りて
 紀伊川となる。流程二十二里余。
 とちかひとすけ (戸塚彦助)〔人〕
 菊門藩の士にして、世々柔術の師範
 たり。江戸芝愛宕町に道場を設けし
 に、名聲四方に高く、諸藩の士の來
 り教を請ふもの多し。後、幕府に徵
 されて講武所の師範役たり。明治十
 九年四月歿す。年七十四。
 とちじんじや (土津神社)〔地〕岩
 代國耶麻郡にあり。縣社にして、保

科正之を祭る。享保十三年、朝廷よ
 り大明神の號を賜ひ、維新後、今の
 稱に改めらる。
 とちとり (鳥取)〔地〕因幡國にある
 市街にして、池田氏の舊藩地なり。
 鳥取縣廳の所在地にして、市坊七十
 餘、人口二万八千四百餘を有す。
 とちとりじやうし (鳥取城址)〔地〕
 因幡國鳥取市にあり。初め、山名豐
 國の有、後、數氏を經、元和三年、
 池田光政之を領し、又、從弟光仲代
 り、世襲して維新に至る。今尙、石
 壘、外障を存せり。
 とちとりぬま (鳥取沼)〔地〕陸前國
 加美郡にあり。その東南に長沼あり。
 とちばいがい (十時梅屋)〔人〕
 名は賜、字は子羽、牛藏と稱す。浪
 華の人。有名なる儒者にして、特に

宋學を好み、經義を以て稱せらる。又、書畫をよくす。増山侯聘して備官となす。後、致任す。文化元年正月歿す。年七十三。

とろきよこねり (百百玉翁) (人) 名は正生、新藏と稱す。有名なる京都の蒔繪師にして、仙洞御所及び、前田家、鍋嶋家等の御用を勤めたり。天保十一年十二月江戸に歿す。

とろころさいば (富處西馬) (人) 通稱は豊次郎、有名なる高崎の俳人なり。弘化三年、江戸に出で、宗十郎町に住す。安政五年八月歿す。年五十一。

とろころ (土土呂港) (地) 日向國東臼杵郡の東海岸にありて日向灘に臨む。港内水深く、波穏かにして、極めて泊舟に便なり。

國座間味嶋の西北方にあり。周一里余。

とろせせき (泊瀬瀨) (地) 山城國嵐山の麓にあり。

とろみ (斗南) (地) 陸前國田名郡町の異稱なり。

とろみじ (東浪見寺) (地) 上總國長生郡にあり。軍荼利山と號す。本堂には聖德太子の像を安置す。行基僧正の作なりと云ふ。

とろみばね (外波鼻) (地) 備前國邑久郡の南西端にありて、兒嶋灣の咽喉を扼せり。

とろのせんき (隣の疝氣) (書) 遊星と劇場との、氣習の變遷を叙述したるものなり。原武太夫の著。

とろがは (利根川) (地) 一に刀根川又、刀禰川、戸根川に作る。又、坂

とろきよのたき (轟瀨) (地) 一名鞆瀨、又、王餘魚瀨に作る。阿波國海部郡にあり。高さ一九五尺、幅七〇尺、源頭數瀨あり。故に九十九瀨の稱あり。㊶阿波國三好郡にあり、四層に落つ。一の瀑高さ三五尺。二の瀑高さ四〇尺。三の瀑高さ二〇尺。四の瀑高さ一八尺。幅各二〇尺。㊷伊豫國喜多郡にあり。二條に下る。上の瀨、下の瀨と云ふ。上の瀑高さ三六〇尺。幅一二尺。下の瀑高さ一〇八尺。幅一八尺。下流共に、肱川に入る。㊸薩摩國薩摩郡にあり。川内川の上流にして、大隅國曾木瀨の下流六里にあり。高さ三〇尺。幅一〇〇尺。奔流五六町、曾木瀨下より舟を下すに迅速にして甚だ危し。

とろけしき (渡名喜嶋) (地) 琉球

東太郎と云ひ、本邦第一の大河とす。源を上野國白龍嶽、笠科山に發し、西流して、下總國銚子港に到りて海に注ぐ。長さ七十余里。舟楫の便、亦大なり。而して、其上流は、兩岸削るが如く、奇巖磊々として起伏し、且、水深く、奔湍白沫を飛す。又、沼田町の近傍には、二三の奇橋を架し、風景實に、爽快を極むと云ふ。

とろやま (刀根山) (地) 近江國伊香郡にあり。天正元年、織田信長、淺井、朝倉氏と戦ひ、大捷せし處なり。

とろいらつめ (舍人娘子) (人) 萬葉集作者の一人にして、和歌を以て其名著はる。大寶中の人。

とろしんわら (舍人親王) (人) 天武天皇第三の皇子にして、天資聰明穎才にして、博く、諸史に通ず。

桓武天皇の勅を奉りて、藤原不比等と共に、日本書紀を撰む。天平七年薨り。年六十。

とのうらら (外浦)〔地〕大隅國肝屬郡の南端佐田岬の東方海面を云ふ。

とのうらら (外浦)〔地〕石見國那賀郡西海岸の北部にして、古、千江浦と稱せり。港内水深く、船舶の碇繋に便にして、交通最も頻繁なり。

とのうらら (外浦)〔地〕日向國南那珂郡東海岸の中央部にありて日向灘に臨む。灣内には同名の港あり。港内水深く。よく大船を泊まへきも、地僻なるを以て、海運甚だ便ならず。

とのひかり (外江港)〔地〕伯耆國西伯郡の地脉西方へ斗出したる南沿岸にありて、中海に臨めり。西北は中

江瀬戸にして、境港あり。交通甚だ頻繁なり。

とのよき (殿崎)〔地〕對馬國上縣郡の北部東沿岸にあり。西北舌崎と相對して小灣を擁す。

とのしやう (土庄港)〔地〕讃岐國小豆嶋の西沿岸にあり。僅かに一橋を隔てて淵崎と相對す。漁船は大阪、神戸、中國、及び、四國諸港と往復交通するを以て、海運大に便なり。

とのみ (富海港)〔地〕周防國佐波郡の南沿岸東端にありて、周防灘に面す。港口は八崎岬、龍口岬に擁せられ、船舶の出入甚だ多し。

とのゆき (殿湯温泉)〔地〕大隅國始良郡にあり。文政元年、鹿兒嶋市民黒葛原五郎右衛門の發見にして、泉質鹽類泉なり。

とば (鳥羽)〔地〕○志摩國にある市街にして、稻垣氏の舊藩地なり。○

山城國紀伊郡にあり。明治戊辰の役幕軍、官軍と激戦したる處なり。

とば (鳥羽浦)〔地〕一名阿湖浦と稱す。志摩國鳥羽港灣の海面を総稱して云ふ。

とば (鳥羽覺猷)〔人〕源隆國の子、天台の坐主、法務、及び、三井寺の長吏、大僧正となる。鳥羽に居るを以て、鳥羽僧正とも云ふ。

衛を好み、専ら寫意によりて形似を求めず、遂に一家をなす。所謂、鳥羽繪と稱する戲畫これなり。寶延六年薨す。年八十八。

とば (土橋亭龍馬)〔人〕俗名は彌太郎、江戸の人、有名なる落語家なり。元祖龍生の門人。

なり、初、りん馬と云ひ、後、二世龍生と改め、更に龍馬と改む。嘉永六年六月歿す。年五十三。

とば (不問語)〔書〕中井燮庵の隨筆なり。

とば (戸馳嶋)〔地〕肥後國の西方にあり。周回五里半余。嶋の南端に燈臺の設けあり。

とば (鳥羽僧正)〔人〕とば (鳥羽天皇)〔人〕御名は宗仁、堀河天皇第一の皇子にして、八皇第七十四代の天皇たり。在位十六年(紀元一七六八—一七八三)にして、保元元年七月崩す。壽五十四。

とば (鳥羽離宮址)〔地〕山城國紀伊郡にあり。白河天皇

應徳三年創營、鳥羽天皇増築して城南離宮と名づけ給ふ。初め、仁明天皇芹川遊獵ありしより、歴代御幸の處となる。仁治三年、光明院に火あり。後醍醐天皇修理の事ありしかど、爾後全く廢せり。

とばみねと (鳥羽港) (地) 志摩國鳥羽灣内にあり。伊勢灣の咽喉を扼し、前面の諸列嶋は、天然の波止場をなし、水深く、波穏かにして、古來有名なる津港たり。而して、地僻にして、陸路不使海運と相副はず。萬般四日市港に及ばずと雖も、船舶の出入織るが如く、亦、一繁華をなす。

とばやさんゑもん (鳥羽屋三右衛門) (人) 四代目杵屋六左衛門の門人にして、有名なる江戸の淨瑠璃家なり。初め文五郎と稱し、豊後節を

創む。明和四年二月歿す。年五十六。とばわん (鳥羽灣) (地) 志摩國志摩郡の東海岸にあり。答志嶋、菅嶋、坂手嶋によりて、灣をなせり。

とひかしら (土肥霞洲) (人) 名は元成、字は九中、源四郎と稱す。江戸の人にして、徳川幕府の儒官たり。資性、聰明穎悟、幼にして、善く詩を賦したりと云ふ。長じて、學識益々進み、又、能筆の譽高し、擢れて將軍家宣の侍講となる。寶曆七年八月歿す。年六十五。

とひこゑをんせん (飛越温泉) (地) 攝津國神戸市にあり。泉質炭酸泉たり。明治二年の發見たり。

とひさねひら (土肥實平) (人) 相摸國の人にして、次郎と稱す。資性、驍勇にして、智畧あり。源頼朝の兵

を擧るや。之に厲し、其石橋山に破れて、頼朝の危急に迫るや、智畧を以て、之を救ひ、爾來、常に、左右にありて、遂に勲業をなさしむ。建久二年十一月歿す。

とひさねみつ (土肥實光) (人) 孟輝と稱す。丸龜藩の士、性學を好み、氣慨あり。専ら心を經濟に用う。

文久、元治の間、尊攘論盛に起り、天下紛擾す。實光弟實忠と共に義を唱へて藩士を鼓舞す。會、嫌疑を得て逮捕せられ、明治維新の後赦さる。時に官軍進みて奥羽にあり。實光藩侯に勸めて軍を出して京都に會せしむ。爾來地方官に歴任し、到る處治蹟を見る。明治五年、一夜自ら腹を屠りて死す。年三十六。

り。寛永以來、江戸漸次に盛なるに隨ひ、盜賊來り集まる。幕府すなはち鷹澤を捕へ、悪黨を糾合して罪を償はしめ、宅を蘆原の傍に興へ、其徒をして故物賣買の監査をなさしむ。盜賊ために跡を戮む。蘆原は今の富澤町なり。

とひしま (飛嶋) (地) 羽後國飽海郡の西北方にあり。周回二里許。

とひたきじんじや (飛瀧神社) (地) 紀伊國東牟婁郡にあり。縣社にして、神林は瀑布なり。仁徳天皇御宇の創建なり。

とひとこぬま (訪床沼) (地) 千嶋國紗那郡にあり。周回四里余。

とひゆま (飛山) (地) 陸中國下閉伊郡の中央東端に位す。高さ一六五〇尺。

とびをんせん (土肥温泉) [地] 伊豆國田方郡にあり。穴湯、古湯の二泉あり。泉質各摺類泉なり。
 とふろろし (都府樓址) [地] 筑前國筑紫郡にあり。天智天皇御宇に創建せし正廳にして、高層なる樓閣を構へたりとぞ。址には隨々に礎石を存し、又、附近の土中よりは古瓦の斷片を得ること多し。
 とへびんざん (戸部原山) [人] 名良熙、助五郎と稱す。有名なる高知藩の儒者なり。寛政七年十二月歿す。年八十三。
 とほあすかのみやあと (遠飛鳥宮址) [地] 大和國高市郡にあり。今、古址を詳にせず。允恭天皇の皇居なり。其遠飛鳥と稱するは、仁徳天皇難波都のとき、河内の飛鳥を近(チカ

ツ)とみなしたるに對し、大和のを遠と呼べるなりと。
 とほあなをんせん (遠穴温泉) [地] 日向國北諸縣郡にあり。文久元年の發見にして、泉質炭酸泉なり。
 とほかさの (遠笠野) [地] 伊豆國にあり。東西二里、南北一里余。
 とほかつたをんせん (遠刈田温泉) [地] 磐城國刈田郡にあり。上の湯、中の湯、東の湯の總稱にして、泉質、上の湯炭酸泉、他は摺類泉なり。慶長六年の發見とす。
 とほたふみなだ (遠江灘) [地] 一に遠州洋に作る。遠江國南海面を中心とし、東は伊豆半島の沖に及び、相模灘に接し、西は熊野灘と相望み、伊勢内海の沖を界とす。航程七十五里、風浪險惡、最も難所と稱せり。

且、寄泊すべき良津なく、漸く、下田、鳥羽の二港あるのみ。

とほの (遠野) [地] 陸中國上閉伊郡の西南部に位し、猿ヶ石川の東方にある名邑なり。

とほやの (はまの) [地] (遠矢濱故事) [地] 攝津國神戸市和田御崎の別稱なり。建武三年五月、足利尊氏筑紫より上洛の時、官軍本間孫四郎重氏、和田御崎より尊氏の軍船へ遠矢を射て、響をこりしにより此名ありと云ふ。

とほやまかびると (遠山景元) [人] 金四郎と稱す。徳川幕府に仕へて、町奉行たり。資性、穎敏にして、温厚、善く、下情に通ず。良市尹の譽高し。安政二年二月歿す。年五十。
 とほやまろざん (遠山廬山) [人]

名は純慧、攝津國服部の人。八歳にして紀春琴に書法を受け、十三歳にして、京師に移り、東寺の寺侍田邊玄々齋に従ひ、書道を學び、又、永田松坪の門に入り、漢籍を修め、遂に書を以て門戸を建つ。京都の書風廬山出て一變せりと云ふ。明治三十七年一月歿す。年八十二。

とほなまいかり (昔前港) [地] 天鹽國昔前郡西海岸の南方に位す。附近に新開地多きにより、之に要する百貨の集散場たり。

とほむしやらんだけ (昔武者運岳) [地] 膽振國勇拂郡の南部に屹立す。高さ四二〇〇尺。

とほむしやらんぬぶり (昔武者運奴振) [地] 石狩國空知郡にある山。高さ四五〇〇尺。